

古の日本(倭)の歴史

第1部(第2章)

旧石器時代

前期旧石器時代(260万年前～30万年前)

中期旧石器時代(30万年前～3万年前)

後期旧石器時代(3万年前～1万6000年前)

縄文時代

草創期(1万6000年前～1万年前)

早期(1万年前～7000年前)

前期(7000年前～5500年前)

中期(5500年前～4500年前)

後期(4500年前～3300年前)

晩期(3300年前～2800年前)

時代表(旧石器時代～弥生時代)

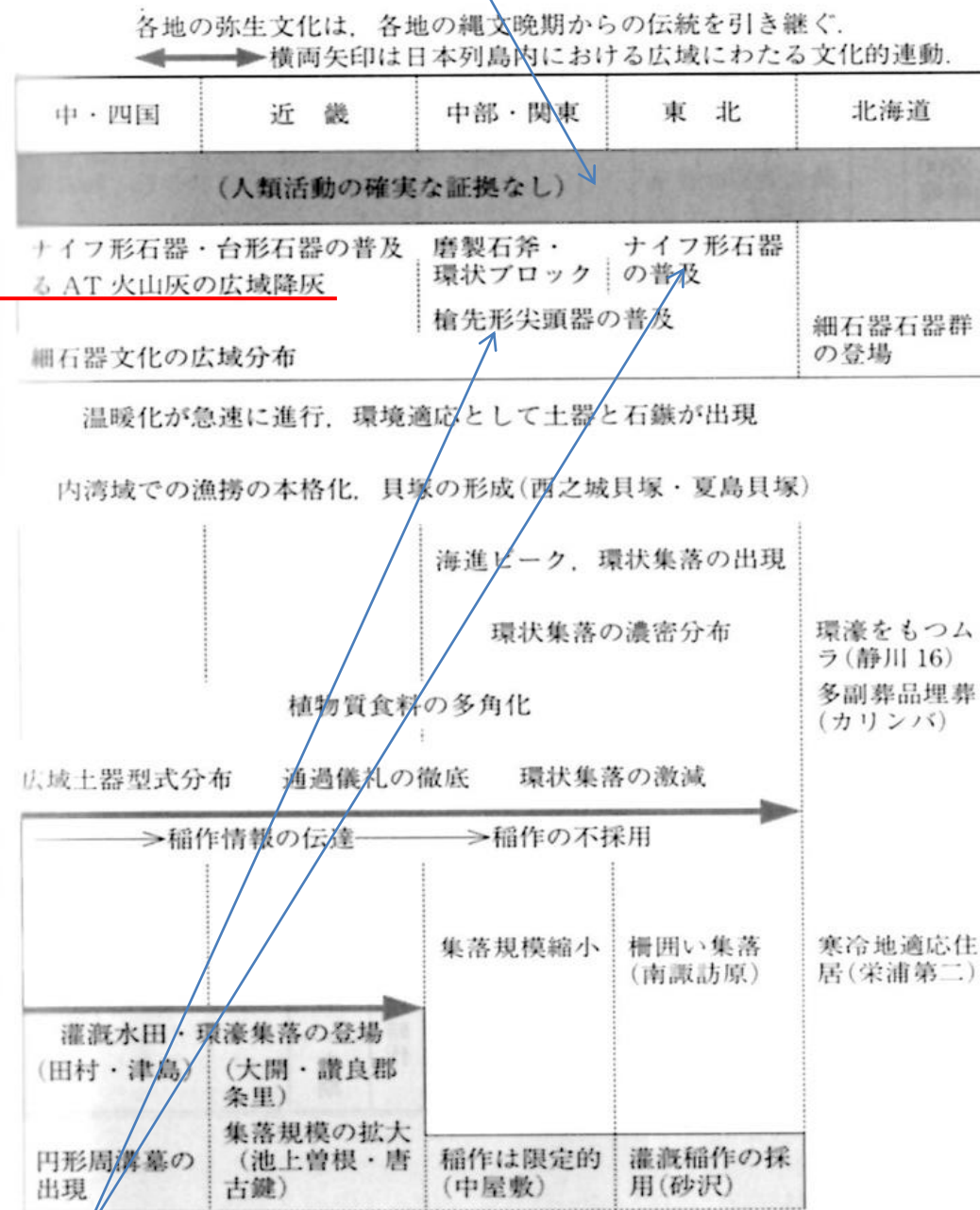
山下町洞人(約3万2000年前の子供の大腿骨と脛骨で、国内では最古級の人骨)

4.8～3.3万年前 野尻湖畔の立ヶ鼻遺跡(マウマンゾウキルサイト)

ヴェルム氷期最盛期
20,000
18,000

弥生時代文化をめぐる文化動向や主な遺跡

	朝鮮半島	沖縄	本州の時期区分	九州
4万年前	前・中期旧石器時代			
3万年前 2万年前	後期旧石器時代	石垣島 国内最古の全身骨格(2.7万年前) 港川人(1.2万年前)	後期旧石器時代	大陸から人類拡散 始良火山の噴火による植物質食料の獲得
1万年前	櫛目文土器時代 = 新石器時代	九州系縄文土器の波及 (前・中期貝塚文化)	縄文時代	草創期
5000年前				早期
				前期
				中期
3000年前				後期
2500年前	無文土器時代Ⅱ青銅器時代	南海産貝輪の九州搬出開始	弥生時代	晩期
				早期
				前期



鬼界カルデラ噴火

(農耕社会の成立、石川)

石刃技法(東京郊外の野川遺跡でみると、16,000年前までは、比較的近場の箱根産の黒曜石を使っていたのに対し、それ以後は200キロ以上も離れた信州和田峠を原産地とする、より品質の高い黒曜石を、多く用いるようになった。

2万年前 岩手県花泉遺跡(ハナイズミモリウシ等のキルサイト)

旧石器時代・縄文時代

区分	年表	沖縄・南朝鮮・西日本(滋賀・奈良まで)	東日本(岐阜・三重から)
<p>前期旧石器時代 (260万年 - 30万年前)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・原人(ホモ・エレクトス)、ジャワ原人、北京原人等 		
<p>中期旧石器時代 (30万年 - 約3万年前)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・4万年前クロマニヨン人(新人)出現 ・3万年前ネアンデルタール人やデニソワ人絶滅 	<ul style="list-style-type: none"> ・砂原遺跡(出雲市)((約12万年前)中期旧石器時代の遺跡、玉随製剥片、石核、石英製の敲石(ハンマー・ストーン)) ・4万年前以降、海洋民族の古華南人が日本列島に進出、さらに千島列島沿いに北上。 ・3.6万年前、蒜山高原遺跡(真庭市)局部磨製石器 ・(沖縄)山下町洞人(約3万2000年前の子供の大腿骨と脛骨で、国内では最古級の人骨) 	<ul style="list-style-type: none"> ・マンモスが北海道まで、ヘラジカ、ヒグマ、野牛(バイソン)などはさらに本州まで南下 ・金取遺跡(岩手県遠野市)(8-9万年前)、石器と木炭粒出土 ・4.8~3.3万年前 野尻湖畔の立ヶ鼻遺跡(マウマンゾウキルサイト) ・井出丸山遺跡(静岡県沼津市)38000年前、神津島産と和田、霧ヶ峰産の黒曜石が出土 ・香坂山遺跡(佐久市)35000年前大型磨製石斧 ・野川遺跡(調布市)(3.5~1.2万年前、黒曜石(伊豆諸島・神津島や長野県八ヶ岳が産地)や小型ナイフ形石器) ・神取遺跡(かんとり)遺跡(山梨県北杜市)(石器の槍先形尖頭器、石鏃、局部磨製石斧)
<p>後期旧石器時代 (3万年前 - 1.6万年前)</p> <p>縄文時代草創期 1万6千年前 - 1万年前</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・1.8万年前ヴェルム氷期最盛期 ・1万年前日本が完全に大陸から離れ島国に ・新人南アメリカ南端に達する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・約2万9000年前から2万6000年前、始良カルデラ噴火 ・(沖縄)白保人、約2万7千年前、石垣島「白保竿根田原(しらほさおねたばる)洞穴遺跡」、国内最古の全身骨格がほぼ揃った人骨。 ・2万年前、華北文化人(D2(D1a2))がナイフ型石器を携え、朝鮮経由で西日本、さらに一部は東日本へ。 ・港川人(みなどがわじん)、1万7000年前の人類 ・1.3万年前、華北文化人(D2)が半円錐形石核を携え、西日本に進出。西日本縄文人と称されるなる。 ・佐世保市の泉福寺洞窟(から、細石刃と共に、約13,000年前の豆粒文土器と約12000年前の隆線文土器が出土。 ・鳥浜貝塚(福井県)で出土した漆の枝は世界最古の約12600年前のもの。高度な漆工芸品の「赤色漆の櫛」も出土。 ・浦入遺跡(舞鶴市)(網漁に用いられた最古の打欠石錘、ウルシ材、爪形文系土器) ・粥見井尻遺跡(松阪市)(竅穴住居跡、最古級の土偶、隆起線文土器、讃岐岩の鏃) ・相谷熊原遺跡(東近江市)(竅穴住居跡、最古級の土偶(通称縄文のビーナス)) 	<ul style="list-style-type: none"> ・2万年前 岩手県花泉遺跡(ハナイズモリウシ等のキルサイト) ・浜北人(浜松市浜北区)(1.6万年前、人骨化石) ・神子柴文化系(局部磨製石斧、尖頭器などを特徴)、青森県の大平山元I遺跡から、隆線文土器より古い、1.6万年前前(暦年較正年代法による)の最古の縄文土器と思われる「無文土器」や世界最古の石鏃が出土。 ・1.3万年前、バイカル湖人(D2(D1a2))はクサビ型細石刃を携え、樺太経由で東日本に南下。東日本縄文人の基層となる。 ・神取遺跡(かんとり)遺跡(山梨県北杜市)(爪形文や表裏縄文土器、隆起線文土器、上ノ山式土器、粕畑式土器) ・大鹿窪遺跡(おおしかくぼ)(富士宮市)(日本最古級の定住集落、集石遺構、配石遺構)
<p>縄文時代早期 (1万年前 - 7千年前)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前7500年頃 - 前6100年 彭頭山文化(長江中流、稲栽培) ・7.3千年前鬼界カルデラ噴火 	<ul style="list-style-type: none"> ・浦入遺跡(舞鶴市)(椀皮巻き弓、押型文土器) ・坂倉遺跡(三重県多気町)(住居跡状の土坑および炉跡、押形文土器) ・横尾貝塚(大分市)(姫島産黒曜石の大型石核や剥片、石材の流通拠点) ・上野原遺跡(霧島市)(複合遺跡の最下層に最古級の大規模な定住集落跡、壺形土器、貝文土器) <p>・鬼界アカホヤ火山灰層、鬼界カルデラ噴火により南九州独自の貝文土器文化が消滅</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・垣ノ島遺跡(かきのしま)(函館市)(幼子の足形や手形をつけて焼いた足形付土版、世界最古の漆工芸品) ・雷下遺跡(市川市)(日本最古の丸木舟) ・夏島貝塚(なつしま)(横須賀市)(最古級の貝塚、単純な文様で底が尖った夏島式燃糸文系土器(BP9450)、燃糸文系土器、貝殻沈線文系土器、貝殻条痕文系土器、沖合への漁撈活動) ・居家以岩陰遺跡-縄文時代早期のタイムカプセル ・栃原岩陰遺跡(とちばら)(南佐久郡北相木村)(人骨、ニホンオオカミの骨、精巧な骨製の釣針、縫い針、出土人骨から復元された「相木人」の頭部復元模型)
<p>縄文時代前期 (7千年前-5.5千年前)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前5000~前3000 仰韶(彩陶)文化(黄河中流) ・ヒブシサーマル期 ・6千年前縄文海進ピーク ・興隆窪文化-紅山文化(遼河)(前6200-5400年頃)(玉の文化)、玦(ケツ)状耳飾文化(日本) 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮には、旧石器時代はヒトが疎で縄文時代早期には、全くヒトの気配がなくなる。鬼界カルデラ噴火の避難民(西日本縄文人)が南朝鮮に渡った。また、避難民の一群は沖繩に渡り貝塚文化(伊礼原遺跡など)を興した。 ・前5000頃、西北九州と南朝鮮の漁撈文化が興る。この頃、朝鮮隆線文土器が現れ、その後、櫛目文土器が現れた。この隆線文土器は縄文時代草創期の隆線文土器の流れを汲むものか。 ・管畑式土器、鬼界カルデラ噴火後の前期の標識土器で、櫛目文土器と製法が極めて似ている。 ・西日本には照葉樹林文化が流入。 ・鳥浜貝塚(福井県若狭町(スギ材の丸木舟) ・浦入遺跡(舞鶴市)(最古級の外洋航海用丸木舟、赤色漆塗り櫛、北白川下層式土器群、小型弓、羽島下層Ⅱ式土器、高台付木製容器、櫛) ・朝寝鼻貝塚(岡山市)(日本最古の稲のプラントオパール) ・洗谷貝塚(福山市水呑町)(縄文土器、サヌカイト) 	<ul style="list-style-type: none"> ・東日本にはナラ林文化が流入。 ・杉沢台遺跡(能代市)(日本最大級の超大型住居、フラスコ状土坑(貯蔵穴)、石錘、石匙) ・三内丸山遺跡(さんないまるやま)(青森市)(大規模集落跡、住居群、倉庫群、シンボリックな3層の掘立柱建物、板状土偶、栗栽培、エゴマ、ヒョウタン、ゴボウ、マメなどの栽培、衛星集落) ・千居遺跡(せんごいせき)(富士宮市)(前期末から中期・後期前半まで、富士信仰のためのストーンサークル) ・阿久遺跡(諏訪郡原村)(巨大環状集石群(ストーン・サークル)、多数の土墳墓) ・里浜貝塚(さとほま)(東松島市)(前期一晩期、最大規模をもつ代表的貝塚、生業カレンダー) ・上掬遺跡(うわはば)(秋田県東成瀬村)(日本最大の磨製石斧、祭祀に使用か) ・栗山川流域遺跡群(千葉県多古町)(ムクノキの外洋丸木舟) ・真脇遺跡(世界最古の捕鯨基地)(石川県能登町)(イルカ漁、船の櫂(ヤチダモ材、磐(石)笛)
<p>縄文時代中期 (5.5千年前-4.5千年前)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前3000~前1500 竜山(黒陶)文化(黄河中流~下流) 	<ul style="list-style-type: none"> ・徳蔵遺跡(和歌山県みなべ町)(西日本では珍しい中期前半の集落遺跡) ・智頭枕田遺跡(鳥取県智頭町)(押形文土器、掘立柱建物跡、配石遺構、土坑群) ・姫笹原遺跡(岡山県美甘村)(イネのプラントオパール) ・田井遺跡(徳島県美波町)(石器などの工房跡、石器・土器・珠状耳飾りなど) ・宿毛貝塚(宿毛市)(土器・石斧・石錘・獣骨・魚骨それに人骨まで出土) ・濁鉄鉱からの製鉄始まる 	<ul style="list-style-type: none"> ・三内丸山遺跡(さんないまるやま)(青森市)(大規模集落跡、最盛期) ・馬高遺跡(長岡市)(集落遺跡、火焰土器、土偶、耳飾、石棒、ヒスイ製玉類など) ・野首遺跡(十日町市)(竅穴住居跡、掘立柱建物跡、敷石遺構、配石遺構、火焰型土器や王冠型土器) ・曾利遺跡(長野県富士見町)(水煙土器、深鉢) ・一の沢遺跡(笛吹市)(有孔鏢付土器、人面裝飾付土器、埋甕、ヒスイの装身具、土偶の「いっちゃん」) ・濁鉄鉱からの製鉄始まる
<p>縄文時代後期 (4.5千年前-3.3千年前)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・気候の冷却化(かなりの東日本縄文人の西日本への移住が始まる) ・前1600 殷王朝の成立(黄河-長江流域)青銅器の使用 ・前1400殷(商)が殷墟(河南省安陽県)へ遷都 甲骨文(卜辞) 	<ul style="list-style-type: none"> ・丹生池ノ谷遺跡(三重県多気町)、天白遺跡(松坂市)や森添遺跡(度会町)(辰砂(水銀朱)、朱彩土器や朱が付いた磨石・石皿など出土) ・向出遺跡(阪南市)(土坑墓どころぼ(地面に穴を掘った墓)群、西日本最大級の縄文墓地遺跡) ・二子山石器製作遺跡(熊本県合志市)(石器工房、石切り場、扁平打製石斧) ・智頭枕田遺跡(鳥取県智頭町)(住居跡、土坑群、遺物廃棄場、突帯文土器) ・大矢遺跡(天草市)(オサンリ型結合釣針、土偶、岩偶) ・本野原(もとのぼる)遺跡(宮崎市)(九州では類例の少ない大規模な集落、広場を中心に、土坑、掘立柱建物、竅穴住居が環状に配置) 	<ul style="list-style-type: none"> ・忍路環状列石(おしよろ)(小樽市)(ストーンサークル、隣接する忍路土場遺跡の巨大木柱は、環状列石とも関連する祭祀的な道具なのか) ・大湯環状列石(秋田県鹿角市)(ストーンサークルは万座と野中遺跡にあり、万座の方が日本で最大、日時計状組石) ・蛭塚遺跡(しじみづか)(浜松市)円環状平地式の住居跡、首飾りや貝製腕輪を身につけた人骨、勾玉や土器、鉄鏃) ・真脇遺跡(石川県能登町)(環状木柱列、巨大な彫刻柱、土偶、埋葬人骨、日本最古の仮面) ・チカモリ遺跡(金沢市)(掘立柱の環状木柱列(ウッドサークル)、堅いウリ材の木柱断面がカマボコ形・U字形) ・大森貝塚(おおもり)(品川区一大田区)(モース貝塚、土器、土偶、石斧、石鏃、鹿・鯨の骨片、人骨片)
<p>縄文時代晩期 (3.3千年前-2.8千年前)</p> <p>弥生時代早期 (3.0千年前-2.8千年前)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・気候の寒冷化 ・前1000 殷が亡び周王朝がはじまる(西周)一都一鎭京 封建制度 ・前841王が貴族に追放され共伯和が執政 ・前771 犬戎の侵入により西周が滅亡 ・前770洛邑に遷都一東周 	<ul style="list-style-type: none"> ・池島・福万寺遺跡(東大阪市、八尾市)(水田跡、イネ科植物のプラントオパール) ・南溝手遺跡(総社市)(イネのプラント・オパール、最古級の糊痕のある土器、石鏃、石包丁) ・津雲貝塚(笠岡市)(多数の仰臥屈葬の抜歯した人骨(貝輪や腰飾り、鹿角製耳飾りの成人骨、石製首飾りをしている小児骨)、石鏃・削器・石錘・土偶・鹿角製釣糸等) ・板付遺跡(福岡市)(水稲耕作跡、最初期の環濠集落、夜臼式土器) ・江辻遺跡(福岡県粕屋町)(最初期の環濠集落) ・原山支石墓群(島原市)(原山ドルメン、国内の支石墓遺跡としては最古最大級のもの) ・菜畑遺跡(唐津市)(最古の水稲耕作遺跡、直播き、山の寺式土器、ジャポニカ種) ・大石遺跡(豊後大野市)(大規模な建物址、黒色磨研土器、打製石斧(耕具)、横刃型石器(収穫具)) 	<ul style="list-style-type: none"> ・亀ヶ岡遺跡(つがる市)(集落遺跡、遮光器土偶) ・加曾利貝塚(かそり)(千葉市)(世界でも最大規模の貝塚、南貝塚の加曾利B式は指標土器) ・山王岡遺跡(さんのうがこい)(宮城県栗原市)(大洞C2式・大洞A式・大洞A'式土器、土製耳飾りやペンダント、編布の本州初の発見、漆器は藍胎漆器・櫛・腕輪・耳飾り・紐状製品、ヌマガイの貝殻に漆を塗った貝器) ・青田遺跡(新潟県加治川村)(土器・石器類、建築部材(柱根・壁材)・櫛・釜状編み物・籠・漆製品) ・山武姥山貝塚(さんぶうばやま)(千葉県横芝光町)(姥山式(姥山 α' β' γ' δ' 式)土器の標式遺跡)・吉根貝塚(よしのべ)(愛知県田原市)(土器・石器・骨角器の他に埋葬人骨が数多く出土) ・伊川津貝塚(いかづつ)(田原市)(スガイ・アサリなどの主鹹貝塚、抗争の痕跡を遺す人骨、食人?抜歯した人骨、甕棺、土偶、耳飾、石刀、石棒、石冠、勾玉、骨角器)

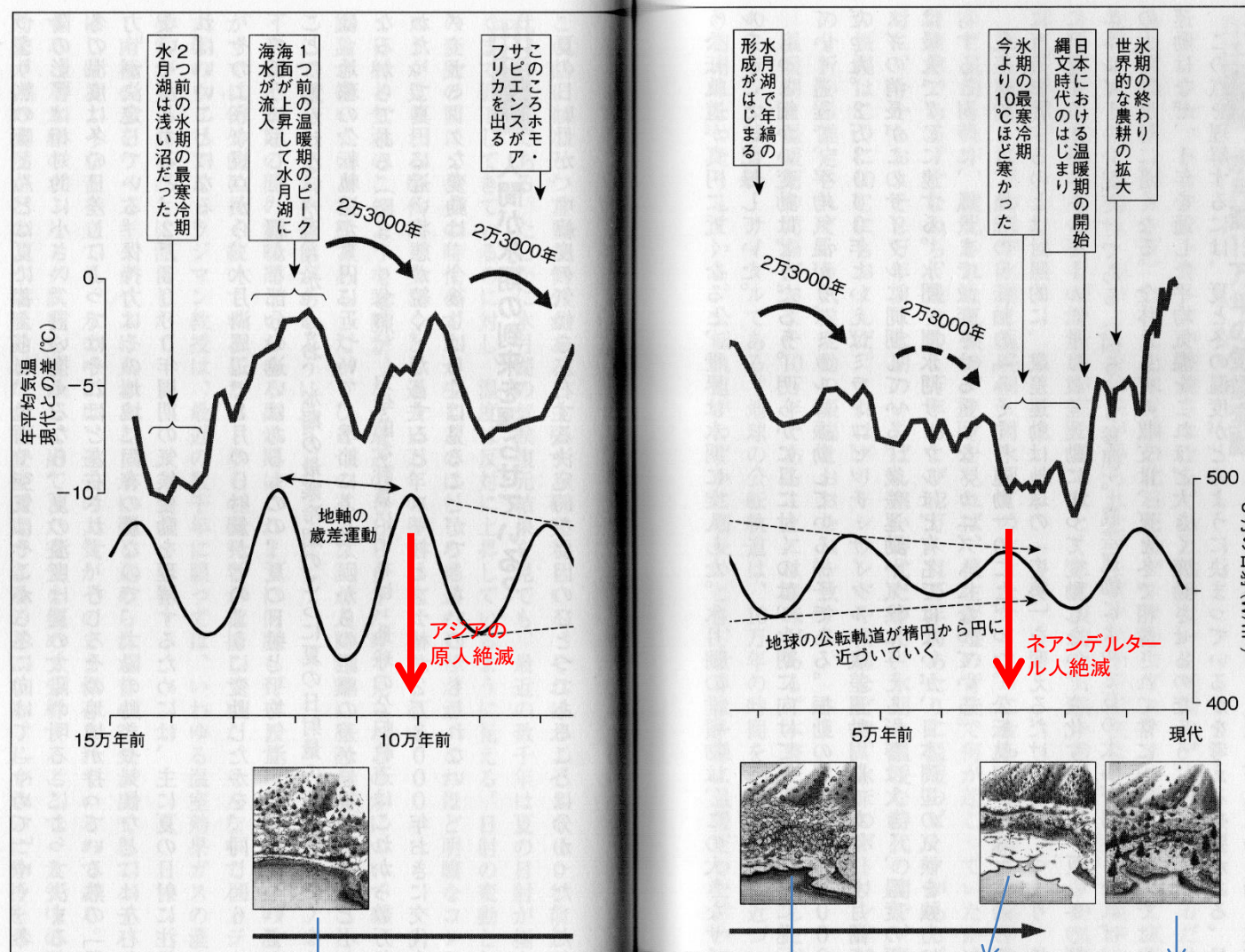
過去15万年の気候変動

地球(水月湖を対象)の過去15万年の気候変動

水月湖は若狭湾岸の三方五湖のひとつである。その湖底に酸素がなく、しかも流れ込む川がないことによって、毎年、一枚ずつ堆積物がたまり、地層断片に年縞と呼ばれる縞模様ができる。水月湖は厚さにして45メートル、時間にして7万年分の年縞が乱されことなく静かにたまっている。ボーリングによって、15万年前の水月湖が形成された当時の堆積物から始まり、年縞ができ始めた7万年前から現在までの堆積物を採取することができる奇跡の湖である。この15万年の気候の変動を種々の樹木の花粉(特にスギ)の量を調べるにより捉えることができる。

地球の気候変動周期は、主に公転軌道周期(10万年)と歳差運動周期(2万3000年)に依存している。この二つの周期が一致し平均気温が最低になると氷河期が始まる。従ってほぼ10万年周期で氷河期と間氷期が繰り返す。最後のヴェルム氷期の最も極寒の時代は1.8~2.0万年前であり、2万年の歳差運動の周期から考えるともうすでに寒冷期に入っているはずであるが、人間の活動(農耕や森林の伐採さらには化石燃料の使用等)により現在も異常な温暖化が進んでいると考えられている。

(人類と気候の10万年史、中川 毅)



水月湖15万年の気候の歴史

平野も山地も
うっそうとしたス
ギや森におお
われていた。

氷期に向かう中
で、スギは徐々
に減っていき、間
を埋めたのは、
現在の東日本に
見られる落葉広
葉樹林だった。

氷期の差異寒
冷期であり、現
在のシベリア
にみられるよう
な、針葉樹に
シラカバが混
じり合うような
風景が広がっ
ている。

5,000年前 照
葉樹の森に混
じって、スギの
巨木が林立し
ている。

(人類と気候の10万年史、中川 毅)

ヴェルム氷期(3万年前～1万年前)と汎世界的生物相の変動

氷期の終わりは1万年前で、それ以来ほぼ現在の海水位、即ち海岸線になる

旧石器時代
ヴェルム氷期

33,000年前ごろを境に汎世界的に気候の激変があり、気候が寒冷化、乾燥化した。その結果、海面の低下が起こり、日本列島は大陸と陸続きに近い状況になった。(当然、樺太や北海道は大陸と陸続きになった。)

日本海では30,000年前から27,000年前を境に暖かい対馬暖流(黒潮の支流)が流入しなくなった。そうすると水蒸気が大幅に減少し、雪雲が出来なくなり、ますます日本海側は少雨化・乾燥化したと考えられる。

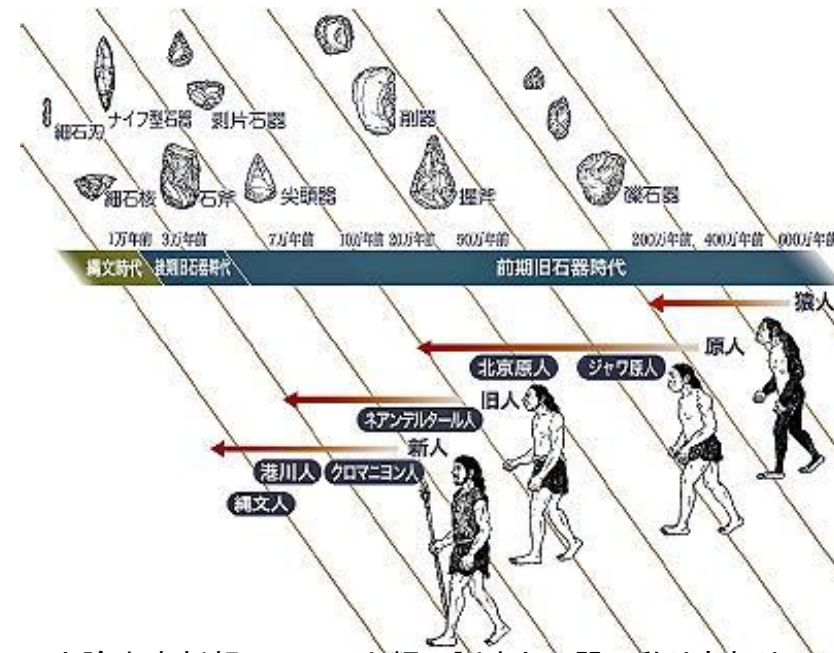
森林は後退し、草原とツガなどの樹林が散在する、今の北海道のような風景が出現していたのだろう。ちょうどそのとき動物相にも大きな変化が現れた。北方ユーラシアの草原に生息していた大型哺乳動物(オーロックス、バイソン、あるいはヘラジカ、馬など)が乾燥化・草原化した日本列島に南下してきた。マンモスも北海道まで南下して来ていたことが確認されている。

時を同じくして33,000年前頃は、ヨーロッパも激変の時代であった。おそらく1万年間ぐらいは現生人類と共存したと思われる、ネアンデルタール人が遂に絶滅に至るのである。その原因は明らかではないが、寒冷化が関係したという見方がある。アジアでも、アジアの旧人達が同じ運命を辿ったのであろうか。一方、ホモ・サピエンス即ち現生人類は、この時期に画期的な石刃技法を獲得し、すなわち生存能力を高め、クロマニヨン人が西ユーラシアに急速に拡散する。東ユーラシアでもアジアの新人が、中国北部からシベリアや日本列島にも拡散している。

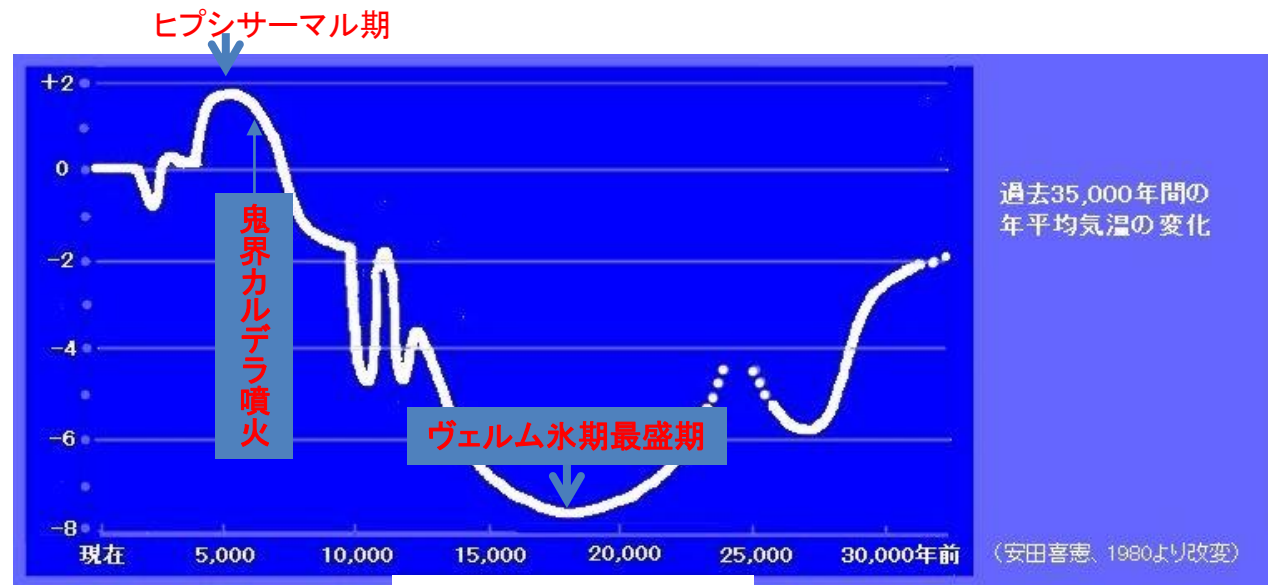
次の20,000年前～18,000年前は、花粉ダイアグラムには表れていないが、ヴェルム氷期でも最も極寒の時代であった。ここでも技術の画期が訪れている。石刃技法が高度に成熟し、美しく成形されたナイフ形石器文化がこの日本列島(除く北海道)で栄え、各地に多数の旧石器時代の遺跡を残した。

(日本人の起源 Net論文、伊藤 俊幸(イトウ トシユキ)
<http://www.geocities.jp/ikoh12/index.html>)

古生物学の亀井節夫によると、ヴェルム氷期(7万年前～1万年前)に、ユーラシア北部の亜寒帯に分布する「マンモス動物群」で、マンモスゾウはシベリアからサハリンをへて陸続きの北海道まで南下し、ヘラジカ、ヒグマ、野牛(バイソン)などはさらに本州まで南下していた、という。



山陰中央新報1401020 人類の誕生と石器の移り変わり (島根県立古代出雲歴史博物館展示ガイドを基に制作)



(日本人の起源、伊藤)

旧石器時代の日本列島への大型動物の移動 (原人(?)・旧人・新人も列島に進出した)

旧石器時代 大型動物の移動

マンモスとナウマン象

マンモス: 新生代第四紀の更新世後期に生息し、最終氷期に絶滅した象。ユーラシア大陸北部からアラスカ・カナダ東部にかけて化石が出土。インドゾウに近縁で、体高約三・五メートル、全身が三〇～四〇センチの長い剛毛で覆われ、皮下脂肪が厚く、長く湾曲した牙をもつ。北海道では歯の化石が発見されており、シベリアからは凍結死体が発掘された。

ナウマン象: ナウマンゾウは約2万年前の更新世後期まで日本に生息していたゾウの一種である。肩高2.5m～3mで、現生のアジアゾウと比べ、やや小型である。氷河期の寒冷な気候に適応するため、皮下脂肪が発達し、全身は体毛で覆われていたと考えられている。日本、朝鮮半島、中国に分布していた。


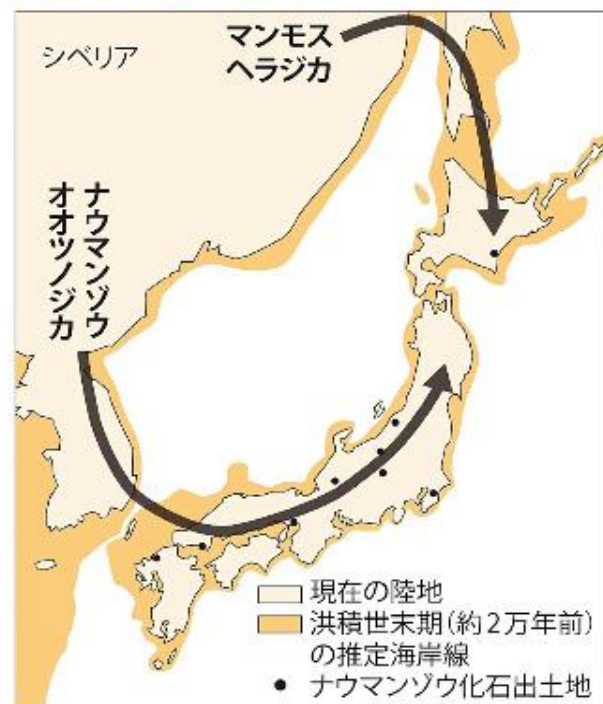
		アフリカゾウ	アジアゾウ	ナウマンゾウ	ケナガマンモス
◆ 主なゾウの仲間の比較					
肩の高さ	オス	3～3.4m	2.5～2.7m	2.3～2.8m	2.8～3.4m
	メス	2.6～3m	2.3～2.4m	1.9m	2.6～2.9m
主な特徴		耳は大きく、牙が長い	アフリカゾウより耳が小さい。牙も短い	耳は小さめと推定される。オスは牙が長い	耳は小さい。牙は長く、大きく曲がっている
食べていたもの		おもに木の葉	おもに下草	おもに下草とみられる	おもに下草
すんでいた場所		アフリカ大陸の熱帯地域	インド、タイ、中国南部など	日本列島(ヨーロッパ、中央アジア、中国などにも仲間がいた)	ヨーロッパ、ロシア北部、北アメリカなどの寒帯地域
絶滅した時期		—	—	3万～2万年前	1万2000～1万年前

イラスト: 菊谷詩子

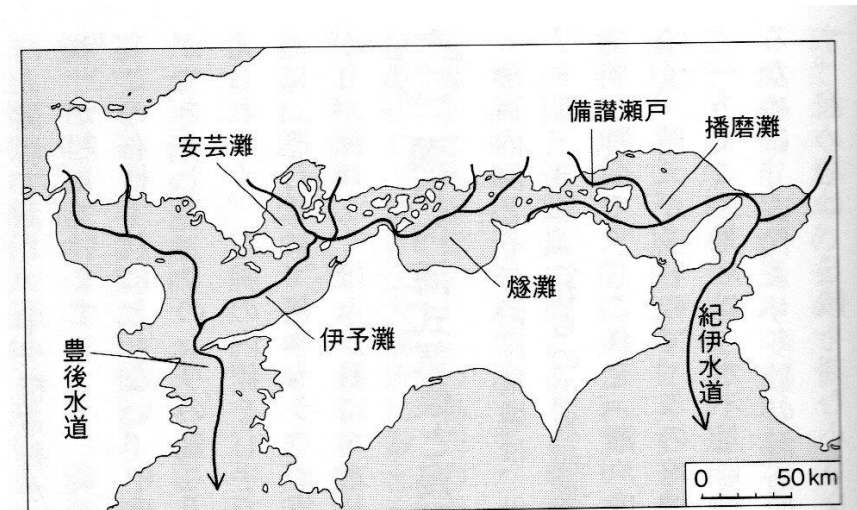
No.3 洪積世の日本



(いっきに学び直す日本史 古代・中世・近世 教養編、安藤)



(日本列島の旧石器時代、Wikipedia抜粋)



最終氷期、海水面が低かった時期の瀬戸内海の水系

(桑代1959原図、太田ほか編『日本の地形6 近畿・中国・四国』東京大学出版会より改変)

120mほど海水面の低かった2万年前には瀬戸内海は完全に干上がって陸地となっていました。瀬戸内海の海底からナウマンゾウの臼歯や牙などの化石が多く発見されたことから、当時はマウマンゾウの食糧となる植物が生育し、さまざまな動物が行き来していた地域であったと考えられる。

(日本列島100万年史、山崎春雄・久保純子)

鬼界カルデラ噴火(縄文時代早期 → 前期)

カルデラ噴火(破局噴火) 日本では7000年 - 1万年に1回程度の頻度で、破局噴火が起きている。鬼界カルデラが生まれた噴火を最後に、ここ7300年間日本では破局噴火は起きていない。今からおよそ7,300年前、鹿児島市の南方およそ100kmの島で激しい噴火が発生し、島の大部分が失われて海底に巨大なカルデラが形成された。放出されたマグマは100立方kmを超えた。当時の島の一部は、現在でも薩摩硫黄島などで確認することができる。この噴火によって発生した火砕流の一部は海上を走り、大隅半島や薩摩半島にまで上陸。また、海中に突入した火砕流の一部は津波を発生させ、その痕跡は長崎県島原半島で確認できる。

成層圏にまで到達した巨大な噴煙を構成する火山灰は、途中で火山灰を降下させながら偏西風に流され東北地方にまで達した。この火山灰はアカホヤ火山灰と呼ばれ、関東地方でも10cm程度、大阪・神戸付近では20cm近くの厚さまで降り積もった(右図)。この火山灰は今でも各地で確認できる。

活火山のない四国も厚い火山灰で覆われ、南九州から四国にかけて生活していた縄文人は死滅するか、食料を求めて火山灰のない地域に移動し、1,000年近く無人の地となった。というのも、この火山灰層の上下から発見される縄文遺跡の土器の様式が全く異なっている。このように、活火山の無い四国や近畿、中国地方東部であっても、南九州で大規模な火山活動が起これば、大変な火山災害に襲われる。(備える防災 NHK、Net)

このカルデラ噴火の降灰の結果、西北九州と朝鮮半島の漁撈文化や三内丸山に代表される東日本縄文文化の発展に繋がったと考える。(藤田)



鬼界カルデラから噴出した火砕流の分布域(オレンジ色の部分)とこの噴火で降り積もった火山灰の厚さ分布

出典：町田・新井、「新編 火山灰アトラス」2003より

鬼界アカホヤ火山灰

鬼界アカホヤ火山灰(きかいアカホヤかざんばい)は、約7,300年前の鬼界カルデラの大噴火に伴って噴出した火山灰。幸屋火砕流と同時に噴出した火山灰のうち、上空に噴き上げられてから地上に降下したものをいう。テフラとしての記号はK-Ah。AKの略称でも呼ばれる。白色または淡褐色(オレンジ色)を呈し、農業には適さない。

火山灰に覆われた面積は約200万km²、体積は約100km³にもなる。偏西風によって東北地方まで到達した。九州南部において地下の比較的浅い場所に厚さ約1mの層をなしており、四国、中国地方西南部および紀伊半島においても層として確認することができる。種子島では、20~40cm、琵琶湖では3~5cmの厚さである。また、層が不明瞭な地域においては土壌分析によって検出可能であり、おおむね日本全域で確認されている。

宮崎県の農家の間でアカホヤと呼ばれていた地層について調査した結果、人吉市付近のイモゴ、種子島のアカボッコ、四国南部のオンジなど、似たような地層が日本各地に分布していることがわかり、1976年(昭和51年)に鬼界カルデラを起源とする火山灰であることが確認された。

地層の年代決定において縄文時代の早期と前期とを分ける重要な鍵層の一つになっている。特に、種子島、屋久島、薩摩半島南部および大隅半島南部は幸屋火砕流が直撃し、当時居住していた縄文人の生活に大打撃を与えたと考えられている。

(鬼界アカホヤ火山灰、Wikipedia抜粋)

貝文土器の消滅

貝文土器(かいもんどき)は、縄文時代草創期・早期の南九州で作られていた、貝殻による模様「貝文」をつけた土器である。

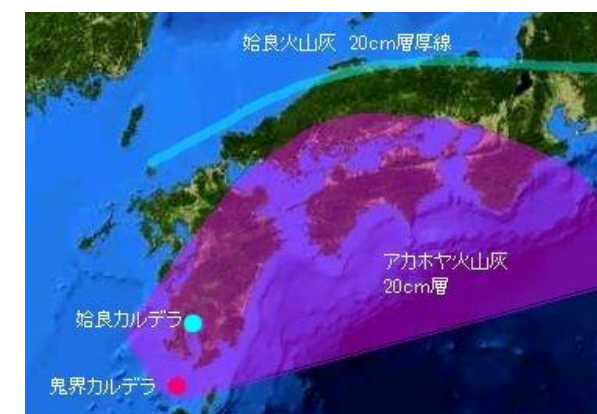
貝文土器に代表される文化を貝文文化または貝文土器文化と呼び、縄文土器に代表される東日本を中心とした縄文文化とは区別される。

九州本島の九州脊陵山脈以南(熊本県南部、宮崎県南部、離島を除く鹿児島県全域)、大隅諸島(種子島、屋久島)に分布する。鹿児島県霧島市の上野原遺跡が代表的な遺跡である。

貝文文化は約7300年前の鬼界カルデラの噴火(K-Ah)で滅亡した。この噴火により、時代区分は縄文時代早期から縄文時代前期となる。

(貝文土器、Wikipedia抜粋)

鬼界カルデラ噴火により大打撃を受けた南九州の縄文人の一群は生き残りをかけて北九州さらに当時ほとんど無人の南朝鮮へ移り、漁撈文化を興した。他の一群は、これまたほとんど無人の沖縄に移住し、縄文土器を持ち込んだ(伊礼原遺跡など)。(日本の誕生、長浜 + 藤田)



(日本人の起源、伊藤)



図26 ● 上野原遺跡の貝殻文円筒土器と角筒土器
南九州の縄文時代早期土器には、縄文ではなく貝文で、尖底ではなく平底の円筒土器や角筒土器が存在する。

(日本人はるかな旅、新東晃一)

旧石器時代・縄文時代

旧石器・縄文時代の遺跡(西日本)

西日本	
旧石器時代	<ul style="list-style-type: none"> ・砂原遺跡(すなばら)(出雲市)(約12万年前) 中期旧石器時代の遺跡、玉随製剥片、石核、石英製の敲石(ハンマー・ストーン) ・西八木遺跡(明石市)(6~5万年前、ハリグワという広葉樹を用いた板状の木製品(加工痕のある木片) ・3.6万年前、蒜山高原遺跡(真庭市)局部磨製石器 ・はさみ山遺跡(藤井寺市)(約2.2万年前、円形竪穴住居) ・早水台遺跡(そうずだい)(大分県日出町)(石英脈岩製の石器、石刃、石刃核、刃部磨製石斧) ・泉福寺洞窟(佐世保市)(旧石器時代の岩陰遺跡、ナイフ形石器)
縄文時代草創期 15,000~12,000	<ul style="list-style-type: none"> ・浦入遺跡(舞鶴市)(網漁に用いられた最古の打欠石錘、ウルシ材、爪形文系土器) ・粥見井尻遺跡(松阪市)(竪穴住居跡、最古級の土偶、隆起線文土器、讃岐岩の鏃) ・相谷熊原遺跡(東近江市)(竪穴住居跡、最古級の土偶(通称縄文のビーナス)) ・上黒岩岩陰遺跡(愛媛県久万高原町)(最古級の細隆起線文土器、有舌尖頭器、矢柄研磨器、削器、礫器、緑泥片岩製の礫石に線刻した岩版7個など、注目される遺物として投槍の刺さった経妊婦の腰骨や女神像線刻礫)
縄文時代早期 12,000~7,000	<ul style="list-style-type: none"> ・浦入遺跡(舞鶴市)(桜皮巻き弓、押型文土器) ・大鼻遺跡(亀山市)(押型文土器、土偶) ・坂倉遺跡(三重県多気町)(住居跡状の土坑および炉跡、押形文土器) ・智頭枕田遺跡(鳥取県智頭町)(押形文土器、住居跡) <p style="text-align: center;">鬼界カルデラ噴火(アカホヤ火山灰)</p>
縄文時代前期 7,000~5,500	<ul style="list-style-type: none"> ・鳥浜貝塚(福井県若狭町)(スギ材の丸木舟) ・浦入遺跡(舞鶴市)(最古級の外洋航海用丸木舟、赤色漆塗り櫛、北白川下層式土器群、小型弓、羽島下層Ⅱ式土器、高台付木製容器、櫂) ・北白川縄文遺跡群(京都市)(西日本の代表的な縄文遺跡群、北白川式土器) ・島根大学構内遺跡(スギ材の丸木舟) ・朝寝鼻貝塚(岡山市)(日本最古の稲のプラントオパール)
縄文時代中期 5,500 - 4,500	<ul style="list-style-type: none"> ・徳蔵遺跡(和歌山県みなべ町)(西日本では珍しい中期前半の集落遺跡) ・智頭枕田遺跡(鳥取県智頭町)(押形文土器、掘立柱建物跡、配石遺構、土坑群)
縄文時代後期 4,500~3,300	<ul style="list-style-type: none"> ・丹生池ノ谷遺跡(三重県多気町)、天白遺跡(松坂市)や森添遺跡(度会町)(辰砂(水銀朱)、朱彩土器や朱が付いた磨石・石皿など出土) ・向出遺跡(阪南市)(土坑墓どこうぼ(地面に穴を掘った墓)群、西日本最大級の縄文墓地遺跡) ・檀原遺跡(檀原市)(晩期の基準資料の檀原式文様土器、土製品・石器・骨格牙製品など出土) ・二子山石器製作遺跡(熊本県合志市)(石器工房、石切り場、扁平打製石斧) ・智頭枕田遺跡(鳥取県智頭町)(住居跡、土坑群、遺物廃棄場、突帯文土器、信州・北陸の浮線網状文土器、東北の変形工字文土器)
縄文時代晩期 3,300~2,800	<ul style="list-style-type: none"> ・池島・福万寺遺跡(東大阪市、八尾市)(水田跡、イネ科植物のプラントオパール) ・南溝手遺跡(総社市)(イネのプラント・オパール、最古級の靱痕のある土器、石鍬、石包丁) ・津雲貝塚(笠岡市)(多数の仰臥屈葬の抜歯した人骨(貝輪や腰飾り、鹿角製耳飾りの成人骨、石製首飾りをしている小児骨)、石鏃・削器・石錘・土偶・鹿角製釣糸等) ・板付遺跡(福岡市)(水稻耕作跡、最初期の環濠集落、夜臼式土器) ・江辻遺跡(福岡県粕屋町)(最初期の環濠集落)
	<ul style="list-style-type: none"> ・上野遺跡(京丹後市)(約3万6千年前、石器のかけら多数出土、その内5点は隠岐の黒曜石) ・山下町洞人(那覇市)(3.2万年前、子供の大腿骨と脛骨で、国内最古級の人骨、初期現代型新人の特徴) ・石垣島洞窟(沖縄県)(2.7万年前、国内最古の全身骨格) ・港川人(沖縄県八重瀬(1.2万年)、上腕骨・尺骨・寛骨・大腿骨2点・脛骨2点・距骨・第1中足骨の断片) ・サキタリ洞人(沖縄県南城市)(1.2万年前、断片的な人骨)
	<ul style="list-style-type: none"> ・泉福寺洞窟(佐世保市)(旧石器時代の岩陰遺跡、ナイフ形石器、細石器や隆起線文土器、ブランク、スクレイパー、叩き石などとともに約12,000-13,000年前といわれる世界最古級の豆粒文土器、中位で豆粒文・隆起線文併用土器が、上部で隆起線文土器、さらに上層で爪形文、押引文土器) ・梶ノ原遺跡(南さつま市)(舟形配石炉、煙道付炉穴 集石、隆帯文土器) ・掃除山遺跡(鹿児島市)(竪穴住居跡、煙道つき炉穴、舟形や円形をした配石炉(調理用の施設)、植物食料の製粉具である磨石や石皿(ドングリなどの木の実を割って砕いたり、製粉する道具類)
	<ul style="list-style-type: none"> ・早水台遺跡(そうずだい)(大分県日出町)(早水台式土器(細かい目の押型文土器、西日本における早期の標識土器)) ・横尾貝塚(大分市)(姫島産黒曜石の大型石核や剥片、石材の流通拠点) ・上野原遺跡(霧島市)(複合遺跡の最下層に最古級の大規模な定住集落跡、壺形土器、貝文土器)
	<ul style="list-style-type: none"> ・貝塚遺跡(岡山市)(縄文時代前期から晩期にかけての貝塚、前期の西日本最大の貝塚、ドングリ貯蔵穴、屈葬埋葬の人骨、彦崎式土器(前期の標式土器、貝や骨でつくった装飾品)) ・洗谷貝塚(福山市水呑町)(縄文土器、サヌカイト) ・美濃ヶ浜遺跡(山口市)(轟B式土器(縄文土器)) ・月崎遺跡(宇部市)(集石遺構) ・伊木力遺跡(長崎県多良見町)(丸木舟)
	<ul style="list-style-type: none"> ・姫笹原遺跡(岡山県美甘村)(イネのプラントオパール) ・田井遺跡(徳島県美波町)(石器などの工房跡、石器・土器・球状耳飾りなど) ・宿毛貝塚(宿毛市)(土器・石斧・石錘・獣骨・魚骨それに人骨まで出土)
	<ul style="list-style-type: none"> ・月崎遺跡(宇部市)(柱穴・炉跡・木炭集中部などの遺構、多量の土器片・土錘、や鏃・石錘・石斧などの石器類) ・平城貝塚(愛媛県愛南町)(磨消(すりけし)縄文の平城式土器、貝製の笛や腕輪、獣骨の漁具) ・大矢遺跡(天草市)(オサンリ型結合釣針、土偶、岩偶) ・御領貝塚(熊本市)(西日本最大級の貝塚、御領式土器、石器、土偶、人骨) ・阿高・黒橋貝塚(熊本市)(土器、人骨) ・陣内遺跡(高千穂市)(西平式・三万田式・御領式などの土器) ・本野原(もとのぼる)遺跡(宮崎市)(九州では類例の少ない大規模な集落、広場を中心に、土坑、掘立柱建物、竪穴住居が環状に配置)
	<ul style="list-style-type: none"> ・原山支石墓群(島原市)(原山ドルメン、国内の支石墓遺跡としては最古最大級のもの) ・丸山遺跡(佐賀市)(支石墓群、壺に靱の圧痕) ・菜畑遺跡(唐津市)(最古の水稻耕作遺跡、直播き、山の寺式土器、ジャポニカ種) ・大石遺跡(豊後大野市)(大規模な建物址、黒色磨研土器、打製石斧(耕具)、横刃型石器(収穫具)) ・田井原遺跡(竹田市)(御物石器(本州などの他所で作製された石器が持ち込まれたものか))

旧石器・縄文時代の遺跡(東日本)

	東日本	
旧石器時代	<ul style="list-style-type: none">金取遺跡(かねどり)(遠野市)(中期旧石器時代(9〜8万年前)、片面調整石器、チョップパー、両面加工石器、五角形剥片) 花泉遺跡(はないずみ)(岩手県一関市)(3.5〜1.6万年前、ヤギユウ、オーロックス(原牛)、野牛の一種ハナイズミモリウシ、ヘラジカ、オオツノジカ、ナウマンゾウなどの化石骨が多量に出土、キルサイト) 立ヶ鼻遺跡(タテガハナ)(長野県信濃町野尻湖、1〜5万年前ナウマンゾウやオオツノシカを狩っていたキルサイト(狩場)の遺跡)	<ul style="list-style-type: none">野川遺跡(調布市)(3.5~1.2万年前、黒曜石(伊豆諸島・神津島や長野県八ヶ岳が産地)や小型ナイフ形石器) 竹佐中原遺跡(飯田市)(3万年―5万年、石器集中地点からの遺物) 井出丸山遺跡(静岡県沼津市)38000年前、神津島産と和田、霧ヶ峰産の黒曜石が出土 香坂山遺跡(佐久市)37000年前大型磨製石斧(世界最古級)
縄文時代草創期 <p>15,000~12,000</p> 縄文時代早期 <p>12,000~7,000</p>	<ul style="list-style-type: none">大平山元遺跡(おおだいやまもと)(青森県外ヶ浜町)(文様はなく平らで角張った底の土器(世界最古級の土器16,500年前)、世界最古の石鏃(世界で最も古い弓矢の使用)、石斧、石核など) 垣ノ島遺跡(かきのしま)(函館市)(幼子の足形や手形をつけて焼いた足形付土版、世界最古の漆工芸品) 岩井堂岩陰遺跡(秋田県湯沢市)(表裏縄文、貝殻文、貝殻腹線文、押型文土器、石鏃、局部磨製石斧、石篋、凹石、石匙、礫器、焼土遺構) 池之元遺跡(富士吉田市)(撚糸文土器、表裏縄文土器、回天縄文土器、押型文土器、磨石、剥片石器、砥石) 栃原岩陰遺跡(とちばら)(南佐久郡北相木村)(人骨、ニホンオオカミの骨、精巧な骨製の釣針、縫い針、出土人骨から復元された「相木人」の頭部復元模型)	<ul style="list-style-type: none">神取遺跡(かんとり)遺跡(山梨県北杜市)(爪形文や表裏縄文土器、隆起線文土器、上ノ山式土器、粕畑式土器) 大鹿窪遺跡(おおしかくぼ)(富士宮市)(日本最古級の定住集落、集石遺構、配石遺構) 寺西貝塚(てらにし)(群馬県板倉町)(縄文時代早期(茅山式他)の土器片、ニホンシカの骨、魚骨、貝輪が出土) 雷下遺跡(市川市)(日本最古の丸木舟) 夏島貝塚(なつしま)(横須賀市)(最古級の貝塚、単純な文様で底が尖った夏島式撚糸文系土器(BP9450)、撚糸文系土器、貝殻沈線文系土器、貝殻条痕文系土器、沖合への漁撈活動) 居家以(いやい)岩陰遺跡(群馬県長野原)(縄文時代早期のタイムカプセル、イスビエ、アズキの原生種(栽培開始)
縄文時代前期 <p>7,000~5,500</p>	<ul style="list-style-type: none">杉沢台遺跡(能代市)(日本最大級の超大型住居、フラスコ状土坑(貯蔵穴)、石錘、石匙) 三内丸山遺跡(さんないまるやま)(青森市)(大規模集落跡、住居群、倉庫群、シンボルのな3層の掘立柱建物、板状土偶、栗栽培、エゴマ、ヒョウタン、ゴボウ、マメなどの栽培、衛星集落) 大木岡貝塚(だいきがこい)(宮城県七ヶ浜町)(大規模な環状貝塚遺跡、東北地方南部の標式遺跡、出土土器を大木1式から10式(後に13型式)までの型式編年) 大清水上遺跡(おおすずかみ)(奥州市)(大木5式期、大型竪穴住居が中央広場を取り囲むように配置、その外側に小型竪穴住居や土坑) 里浜貝塚(さとはま)(東松島市)(前期―晩期、最大規模をもつ代表的貝塚、生業カレンダー) 岩井堂岩陰遺跡(秋田県湯沢市)(大木1式-5式土器) 上檜遺跡(うわはば)(秋田県東成瀬村)(日本最大の磨製石斧、祭祀に使用か) 根羽子沢遺跡(ねばこざわ)(秋田県横手市)(配石、ケツ状耳飾り、立石、大木4式および大木5式土器) 一ノ坂遺跡(いちのさか)(米沢市)(超大型住居、石器工房) 真脇遺跡(石川県能登町)(イルカ漁、船の櫂(ヤチダモ材)	<ul style="list-style-type: none">千居遺跡(せんごいせき)(富士宮市)(前期末から中期・後期前半まで、富士信仰のためのストーンサークル) 花鳥山遺跡(山梨県笛吹市)(集落遺跡、炭化植物(クルミ、ドングリ、エゴマなど) 阿久遺跡(諏訪郡原村)(巨大環状集石群(ストーン・サークル)、多数の土壌墓) 陸平貝塚(おかだいら)(茨城県美浦村、前期―後期、環状の貝層、土器や土偶、土製品、石器、骨角器、貝製品、動物遺体(ハマグリを中心に、シオフキ、サルボウ、ハイガイ、マガキ、アカニシ、クロダイ、スズキ、フグなどの魚骨、シカ、イノシシ、ウサギなどの獣骨) 篠山貝塚(栃木市)(関東平野の最奥、居住跡や竪穴跡、貝殻類、動物の骨) 栗山川流域遺跡群(千葉県多古町)(ムクノキの外洋丸木舟) 関山貝塚(せきやま)(埼玉県蓮田市)(土器型式関山式の標式遺跡) 黒浜貝塚(埼玉県蓮田市)(黒浜式の標式遺跡) 加茂遺跡(南房総市)加茂(旧豊田村)(泥炭遺跡、ムクノキ製の丸木舟や櫂、イヌガヤ製の丸木弓、諸磯式土器(漆塗りのもの含む)、五領ヶ台・勝坂・阿玉台式土器) 諸磯貝塚(もろいそ)(三浦市)(土器型式諸磯a, b, c式の標式遺跡、石鏃、磨製石斧、石皿、骨角器)
縄文時代中期 <p>5,500 - 4,500</p>	<ul style="list-style-type: none">三内丸山遺跡(さんないまるやま)(青森市)(大規模集落跡、最盛期) 御所野遺跡(岩手県一戸町)(大木8b式期、環状配石遺構群とよぶべき祭祀の施設、盛土遺構) 宮畑遺跡(みやはた)(福島市)(竪穴住居(屋根に土、複式炉) 馬高遺跡(長岡市)(集落遺跡、火焰土器、土偶、耳飾、石棒、ヒスイ製玉類など) 笹山遺跡(新潟県十日町市)(火焰型土器、土偶、石器など、竪穴住居跡や炉跡などが環状ないし馬蹄形に配置された集落跡) 野首遺跡(十日町市)(竪穴住居跡、掘立柱建物跡、敷石遺構、配石遺構、火焰型土器や王冠型土器) 沖ノ原遺跡(新潟県津南町)(火焰土器、深鉢型のノ原式土器、打製石器や石鏃、クッキー状炭化物(縄文クッキー)、クリ栽培) 長山遺跡(富山市)(土偶大量に出土、妊婦を模した形のもの、体の一部がこわされているもの、背中に三つ編みのおさげを1本垂らしたもの) 長者ヶ原遺跡(糸魚川市)(石斧やヒスイの玉の生産・交易拠点) 金生遺跡(山梨県北杜市)(敷石・石組住居、石棒、石剣、独鈷石、祭祀用土器などの祭祀遺物、装身具)	<ul style="list-style-type: none">釈迦堂遺跡群(山梨県笛吹市)(多量の土偶(三内丸山遺跡に次ぐ)) 一の沢遺跡(笛吹市)(有孔鏢付土器、人面装飾付土器、埋甕、ヒスイの装身具、土偶の「いっちゃん」) 安道寺遺跡(甲州市)(深鉢形土器(4つの装飾把手を有する大型装飾土器)など) 鑄物師屋遺跡(南アルプス市)(円錐形土偶、人体文様付有孔鏢付土器など) 井戸尻遺跡(諏訪郡富士見町)(烧畑式農耕、井戸尻式深鉢、凹石や打製石斧、石皿) 尖石遺跡(とがりいし)(長野県茅野市)(竪穴式住居跡、列石、黒曜石の交易、焼畑農耕) 大深山遺跡(長野県南佐久郡川上村)(最も標高の高い遺跡、竪穴住居跡、人面香炉型土器(通称『ウルトラマン』) 棚畑遺跡(長野県)(土偶「縄文のビーナス」、国宝) 西ノ前遺跡(山形県舟形町)(土偶「縄文の女神」、国宝) 南高野貝塚(みなみこうや)(中期―晩期、日立市)(阿玉台式、加曽利式、称名寺式、堀之内式の土器、斧や皿などの石器、ヤマトシジミを中心とする貝類、カツオ、サメやスズキなどの魚類、イノシシやシカなどの哺乳類が出土) 加曽利貝塚(かそり)(千葉市)(世界でも最大規模の貝塚、北貝塚の加曽利E式は指標土器) 姥山貝塚(うばやま)(市川市)(竪穴式住居跡、その1つから5名の人骨)
縄文時代後期 <p>4,500 ~ 3,300</p>	<ul style="list-style-type: none">忍路環状列石(おしよろ)(小樽市)(ストーンサークル、隣接する忍路土場遺跡の巨大木柱は、環状列石とも関連する祭祀的な道具なのか) 垣ノ島遺跡(かきのしま)(函館市)(朱漆色の朱色注口土器) 小牧野遺跡(こまきの)(青森市)(弧状列石や、直線状列石、環状列石) 大湯環状列石(秋田県鹿角市)(ストーンサークルは万座と野中遺跡にあり、万座の方が日本で最大、日時計状組石) 伊勢堂岱遺跡(いせどうたい)(北秋田市)(4つのストーンサークルや掘立柱建物跡、土坑墓、土器埋設遺構、捨て場、フラスコ状土坑、日時計型組石) 宮畑遺跡(みやはた)(福島市)(敷石住居、関東地方の土器群、埋甕(土器埋設遺構)) 分谷地(わけやち)遺跡(新潟県黒川村)(住居址・土壙・捨場遺構、土器・土偶・石器・漆器など) 蛸塚遺跡(しじみづか)(浜松市)円環状平地式の住居跡、首飾りや貝製腕輪を身につけた人骨、勾玉や土器、鉄鏃) 前田遺跡(福島県川俣町)(約4400〜3700年前の墓域から人骨約40〜50体出土)	<ul style="list-style-type: none">桜町遺跡(石川県小矢部市桜町)(高床式建物(梁間一間型高床建築)、環状木柱列(北陸特有) 真脇遺跡(石川県能登町)(環状木柱列、巨大な彫刻柱、土偶、埋葬人骨、日本最古の仮面) チカモリ遺跡(金沢市)(掘立柱の環状木柱列(ウッドサークル)、堅いクリ材の木柱断面がカマボコ形・U字形) 寺野東遺跡(栃木県小山市)(巨大な環状盛土遺構、木組遺構、水場遺構、住居跡や埋甕、土偶や耳飾り、石剣・石棒など) 真福寺貝塚(しんぶくじ)(さいたま市)(貝塚と泥炭層、竪穴住居跡、土偶、勾玉、打製・磨製石斧、石鏃、石棒、砥石、独こ石、磨石、凹石、曲石、X字形石製品、耳飾り、土版、骨角器等、標識的真福寺泥炭層式土器、ミミズク形土偶) 堀之内貝塚(ほりのうち)(市川市)(堀之内式土器(標式土器)) 大森貝塚(おおもり)(品川区一大田区)(モース貝塚、土器、土偶、石斧、石鏃、鹿・鯨の骨片、人骨片) お茶の水貝塚(おちやのみず)(文京区)(加曽利B式、安行式、堀の内式土器、人骨の脛骨の断面は乙審辺三角形に近く、原アイヌ人(蝦夷)のものか)
縄文時代晩期 <p>3,300~ 2,800</p>	<ul style="list-style-type: none">亀ヶ岡遺跡(つがる市)(集落遺跡、遮光器土偶) 山王岡遺跡(さんのうがこい)(宮城県栗原市)(大洞C2式・大洞A式・大洞A´式土器、土製耳飾りやペンダント、編布の本州初の発見、漆器は籃胎漆器・櫛・腕輪・耳飾り・紐状製品、ヌマガイの貝殻に漆を塗った貝器) 青田遺跡(新潟県加治川村)(土器・石器類、建築部材(柱根・壁材)・櫂・釜状編み物・籠・漆製品)	<ul style="list-style-type: none">加曽利貝塚(かそり)(千葉市)(世界でも最大規模の貝塚、南貝塚の加曽利B式は指標土器) 山武姥山貝塚(さんぶうばやま)(千葉県横芝光町)(姥山式(姥山 α´ β´ γ´ δ´ 式)土器の標式遺跡)・吉胡貝塚(よしご)(愛知県田原市)(土器・石器・骨角器の他に埋葬人骨が数多く出土)

旧石器時代・縄文時代の遺跡

香坂山遺跡（佐久市、35000～38000年前（中期旧石器時代末）から磨製石刃の石斧が出土した。磨製石器は新石器時代の石器を特徴づけるものである。最近、6万年前の磨製石器がオーストラリアで見つかったが、中期旧石器時代末の日本列島で世界最古級の磨製石器が出土したことは驚くべきことである。香坂山遺跡は、出アフリカ後南ルートで列島に到達した新人（古華南人）の遺跡と考えられる。（藤田）

ひすい
 緑色をした宝石の一種。装身具として縄文時代から利用されており、世界最古の利用例とされる。

ひすい製の大珠（たいしゆ）。

● 縄文時代の遺跡
 ◆ 黒曜石の産出地
 ◆ サヌカイトの産出地
 ◆ ひすいの産出地

黒曜石の推定交易圏
 サヌカイトの推定交易圏

香坂山遺跡
 三内丸山遺跡
 御所野遺跡
 大湯環状列石
 里浜貝塚
 高原山
 中里貝塚
 加曾利貝塚
 大森貝塚
 神津島

山鹿貝塚
 泉福寺洞穴
 腰岳
 阿蘇山
 上野原遺跡
 上黒岩岩陰遺跡
 二上山
 金山・五色台
 隠岐
 鳥浜貝塚
 下呂
 香坂山遺跡
 箱根
 和田群
 手カモリ遺跡
 桜町遺跡
 姫川流域

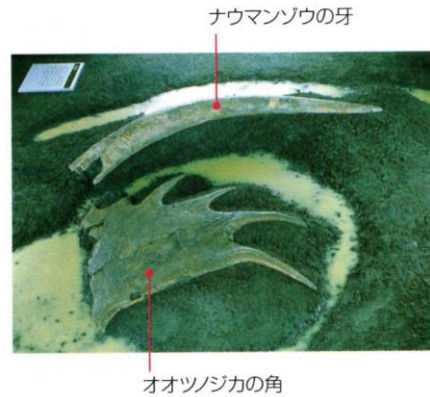
黒曜石

サヌカイト
 安山岩の一種で、讃岐岩ともいう。主に石器の材料として使われた。二上山や香川県など、ごく限られた地域からしか産出しない。

（図説 古代史、成美堂出版）

旧石器時代の文化

旧石器時代



野尻湖遺跡群(長野県)
動物の狩猟・解体場の遺跡。ナウマンゾウやオオツノジカの化石(写真は出土状況のレプリカ)、石器が出土している。



富沢遺跡(宮城県)
約2万年前の樹木の根(写真)や焚き火の跡、動物のフンなどが発見された。出土した樹木のほとんどは針葉樹で、当時は現在より寒冷な気候だったことを示す。



鹿児島県の前原・和田遺跡で発掘された旧石器時代の礫群。

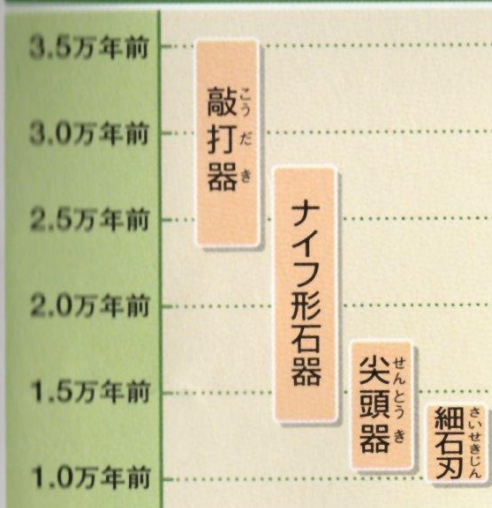
旧石器時代の遺跡からは、十数個の石が穴に詰まった状態で発掘されることがある。これらは「礫群」とよばれる。石には焼いた跡が残っていたり、炭化物が付着していたりすることから、旧石器時代の人びとは熱した石を利用して食べ物を調理していたと考えられている。

旧石器時代の調理法

コラム

(図解 古代史、成美堂出版)

石器の使用時期



長さ3~4cm

細石刃

長さ数cmの小さな石器。替え刃の一種で、木の柄や動物の骨の側縁に数個を埋め込んで使う。主に北海道で発達した。



とがったシカの角などで先端を鋭利に仕上げた。

長さ7cm

尖頭器

先端をとがらせ、柄に取りつけて槍として使用。おもに投げ槍として使われ、狩猟の道具として活躍、狩猟に進歩をもたらした。

石をたたいて割ってつくった刃。



刃の逆側はナイフの背のように加工。

長さ8cm

ナイフ形石器

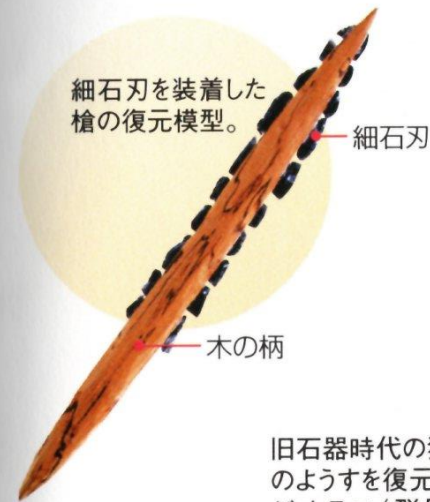
一片に鋭利な刃をつけた石器。手に持って動物の肉や毛皮を切るのに使用されたほか、柄に取りつけて槍としても使われた。



長さ10cm

敲打器

石をたたいて割ってつくった石器。直接手に持つか、柄に取りつけ斧のように使い、動物を打ち殺したり木を切ったりした。



細石刃を装着した槍の復元模型。

細石刃

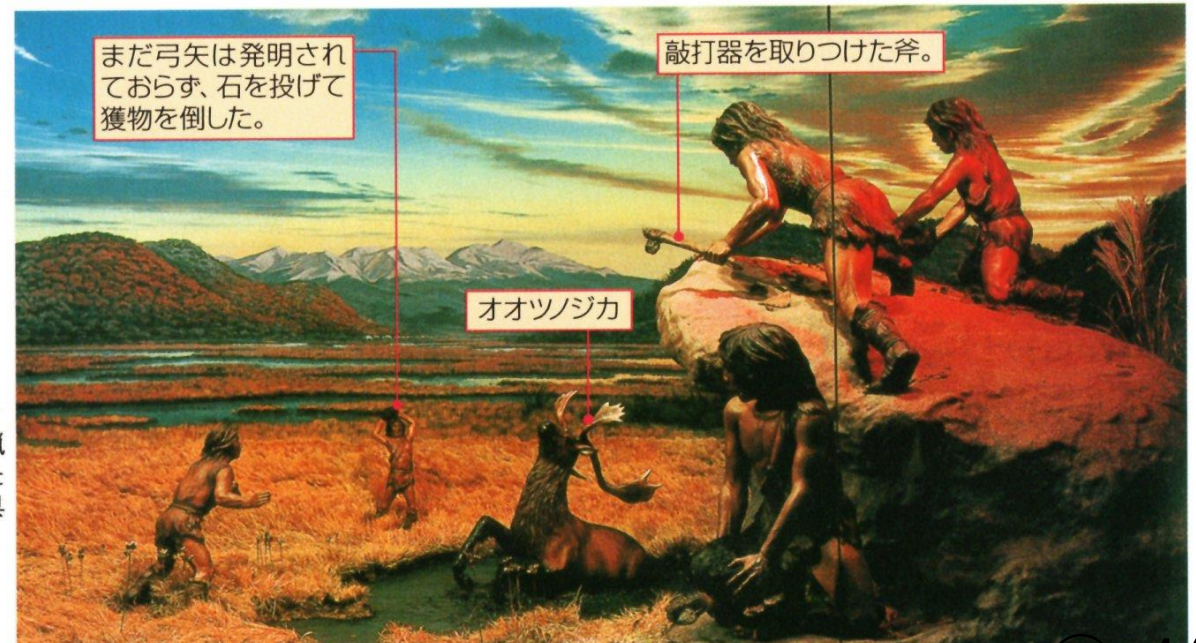
木の柄

旧石器時代の狩猟のようすを復元したジオラマ(群馬県立歴史博物館)。

旧石器時代の生活必需品

石器の種類

旧石器時代の人びとは、主に狩猟と植物採取によって食料を得ていた。動物を捕らえる道具として、また捕らえた動物を解体する道具として発達したのが石器である。石器とは、石を加工してつくった道具の総称で、当時の人びとの暮らしに欠かせない道具であった。

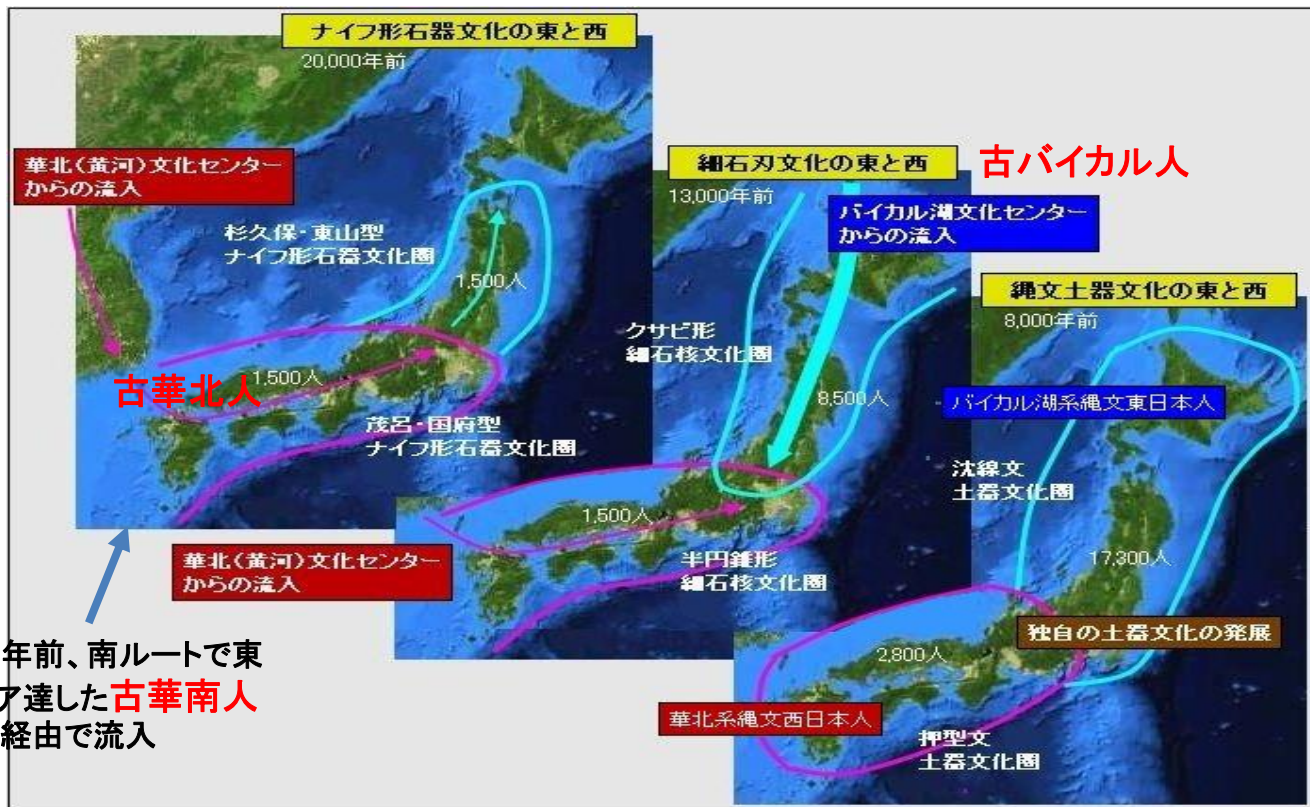


まだ弓矢は発明されておらず、石を投げて獲物を倒した。

敲打器を取りつけた斧。

オオツノジカ

日本列島への新人の流入 古華南人・古華北人-古バイカル人



(日本人の起源、伊藤)

3. 5万年前、南ルートで東南アジア達した古華南人が沖縄経由で流入

ハイクストーン、クサビ形細石刃石器群(荒屋型彫器を含む)は20~30,000年前にバイカル湖周辺で発生し、中国東北部、朝鮮半島あたりを南限として北方アジア、アラスカまで広がっていた。そこで、日本列島へは前項のように13,000年前に、沿海州、樺太を経由して約10,000年遅れで流入してきたことになる。まず北海道に達した後、東北地方全域から新潟県・長野県あたりまで南下し、華北型ナイフ形石器(20,000年前に列島に入る)にとってかわった。しかもこの細石刃文化の影響は大変強かつたらしく、東北日本ではそれまでのナイフ形石器文化の伝統が消滅してしまうほどであった。ほぼ同じころ関東地方より西、主として西日本の各地には半円錐形細石刃石器群が分布した。この細石刃文化の成立に関してはナイフ形石器をベースに、クサビ形細石刃文化の影響を受けて、日本独自に発展したという説や、中国大陸の華北形細石刃石器群が流入したという説がある。半円錐形系統に属していた九州の細石刃文化は、福井(洞穴)型細石核と呼ばれるクサビ形細石刃石器群にかわる。これは東日本のそれと違って荒屋型彫器を含まない。これも華北型系統の細石刃が朝鮮半島をへて九州に伝わったものと言われている。

列島の東日本地区で、1,500人が各部族集団に分かれ、それぞれが一種のテリトリーの中で石刃技法・ナイフ形石器文化を担い狩猟生活をしていたところへ、突然、クサビ型細石器というハイクストーン技術を持った、未知の集団が7,000人規模で流入して来た。おそらく、東日本の先住民の社会秩序は崩壊し、大パニックを起こしたことだろう。遺物から見ると、それまでの高度に磨かれた石刃技法・ナイフ形石器文化は放棄され、侵入者の細石刃技術が短期間のうちに東日本地区を席卷したことが、その様子を垣間見せてくれる。しかし、彼らバイカル湖人達も、思いがけない事態に愕然としたことだろう。彼らが夢見ていた大型獣の姿は、何処にも見当たらなかったからである。彼らが持っていた技術・細石刃を装填した植刃器は20cm以上の刃渡りを持った、大振りな槍先が得意な、いわば大型獣向きのものであった。

もともと1,500人しか許容力のないはずの東日本地区が、8,500人(先住民1,500人+バイカル湖人7,000人)という大人口を養わなければならなくなった。この食糧問題を解決するためには、縄文動物相の主役に躍り出た、鹿とイノシシを大量に狩猟しても、まだ困難であったろう。

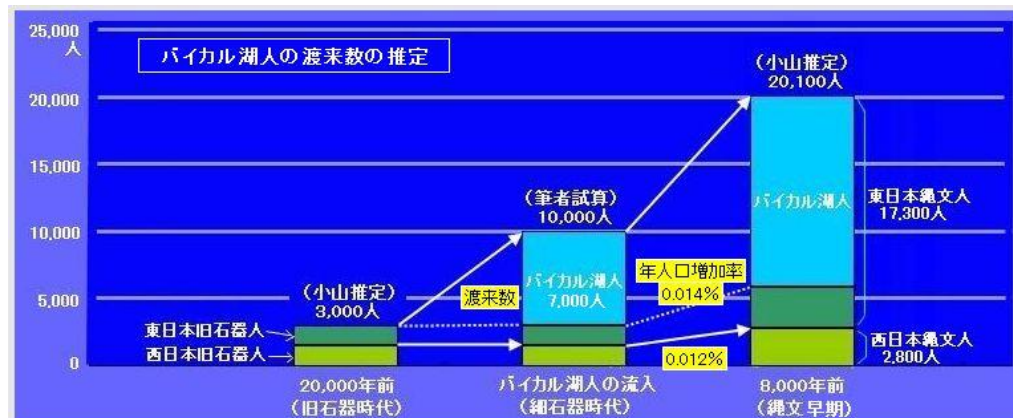
『日本人はどこから来たか』 加藤晋平(岩波新書)

(日本人の起源、伊藤)

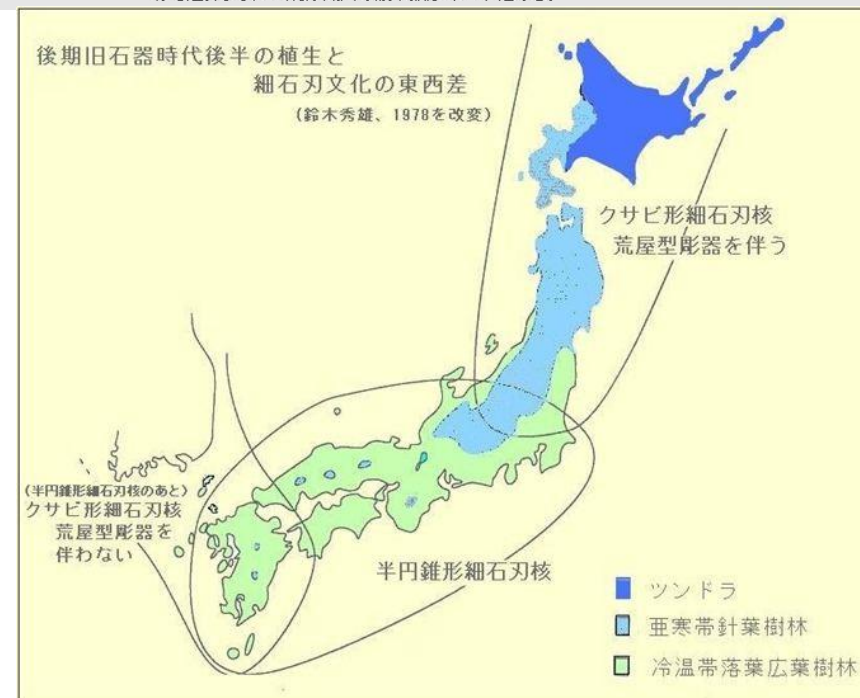
アイヌ人は極端にD2が多いので、バイカル湖文化センターからの流入はD2がメインでC3も含む集団が渡来したのではないかと推測される。その渡来以前に朝鮮から渡来した華北文化人もまたD2と思われる。(藤田)

日本列島には前期旧石器時代の原人・旧人の骨や遺跡は見つからず、中期旧石器時代の砂原遺跡(出雲市)が最古(約12万年前)でそれに続くのが金取遺跡(遠野市)(8-9万年前)であり、石器(ハンドアックスのような両面加工石等)や木炭粒が出土している。これらの遺跡は、旧人あるいは原人の残存者の活動の跡と見なされる。新人と思われる山下町洞人(沖縄、約3万2000年前の子供の大腿骨と脛骨)の人骨出土が、国内では最古級であり、南ルートで列島に到達した可能性がある。

東ルートでアジアに到達し華北文化センターがたてた古華北人(Y染色体D2型)が、朝鮮半島経由でナイフ形石器を伴って断続的に日本列島に侵入してくる。その最大の集団の侵入は約2万年前であった。さらに、1.3万年前、古バイカル人(D2)はクサビ型細石刃を携え、樺太経由で東日本に南下。東日本縄文人の基層となる。また、同時期、華北文化人(D2)が半円錐形細石核を携え、西日本に進出。西日本縄文人の基層となる。



バイカル湖人の渡来数の計算手順
 ①バイカル湖人渡来時期は13,000年前とした。
 ②まず、20,000年前の人口を東日本、西日本とも1,500人とし、13,000年前まで増減しなかったと仮定した。すなわち、年人口増加率を0とした。
 ③細石器時代から縄文早期までの5,000年間の、西日本縄文人の人口は1,500人→2,800人であるから、年間の人口増加率は0.012%という極めて低い数値である。
 ④同じ期間の東日本縄文人の年間人口増加率を、西日本より若干高い0.014%に設定すると、17,300人から逆算して、バイカル湖人の渡来数は7,000人となる。



(日本人の起源、伊藤)

【日本経済新聞】

長野の石刃、国内最古と判明 現生人類流入の手掛かり

2021年6月2日

長野県佐久市の香坂山遺跡で昨年出土した旧石器時代の石器「大型石刃」が、石刃として国内最古となる3万6800年前のものであることが、遺跡を発掘した奈良文化財研究所の国武貞克考古第一研究室長の研究で明らかになった。

遺跡からは大型石刃を含め、アフリカで誕生し、ユーラシア大陸を東に拡散した現生人類に特有の石器群が、国内で初めてそろって出土。同様の石器群は、中央アジア、南ロシア、中国などで5万～4万年前のものが出土。朝鮮半島でも4万1千年前の大型石刃が見つかった。日本列島への現生人類の到達にも関わる事例で、国武氏は「ユーラシアの系譜を引く石器群が、朝鮮半島を通じて流入したという評価も可能」と指摘した。

国武氏は昨年8～9月に発掘。3万年前の火山灰層の下から、幅3センチ、長さは10センチを超え、鋭い刃の大型石刃、カミソリ刃のような「小石刃」、三角形の「尖頭器」などを含む1100点以上が出土。地層中の炭化物による放射性炭素年代測定で、年代を導いた。

国内では、3万8千年前ごろから人類の痕跡が明確になる。国武氏によると、「追加で実施した年代測定では今回の発表より古い値も出ており、今後分析を続け、最終的な見解をまとめる」とのことである。

国内では3万6300年前の石刃石器の発見事例があったが、大陸との関連は明確ではなかった。今回の石器群には、大陸と共通する製作技術が認められるという。〔共同〕



長野県佐久市の香坂山遺跡で出土した(左から)大型石刃、小石刃、尖頭器

磨製石器はオーストラリアで発見されたものが、香坂山遺跡で出土したものよりも2倍ほど古い年代の6万年前のものである。それ故に、磨製石器に関しては香坂山遺跡のものが世界最古とは言えないが、世界最古級と言ってもいいと思う。

新人(ホモサピエンス)の日本列島への到達は、まず出アフリカ(7万年前)から南ルートを取った集団の一部が東南アジアより海岸沿いに東アジアに向かい、3.5万年前頃には列島に到達していた(古華南人、Y染色体ハプログループC1a1型か)。この旧石器時代人が営んだ香坂山遺跡は、南ルートで列島に到達した可能性が高い。

(藤田)

日本の磨製石器

日本では旧石器時代である3万～4万年前のものと推定される局部磨製石斧が、群馬県岩宿遺跡、栃木県磯山遺跡、長野県杉久保遺跡、東京武蔵野台地の栗原遺跡、千葉県三里塚55地点遺跡などから出土し、旧石器時代に磨製石器が存在したことが明らかになった。小田静夫によれば、日本の旧石器文化の磨製石斧は3-4万年前に集中し、その後は草創期にならないと出現しないが、世界最古の磨製石器とされる。(左記のように、現在、オーストラリア出土の磨製石器が世界最古とされる。)尚、日本列島の旧石器時代に用いられた石材の代表的なものは、黒曜石、硬質頁岩、サヌカイトなどがあげられる。

(石器-Wikipedia抜粋)(藤田改変)

【琉球新報】

世界最古釣り針を発見 沖縄・南城のサキタリ洞 2万3000年前、貝製

2016年9月20日

沖縄県南城市の観光施設「ガンガラーの谷」内のサキタリ洞遺跡で、約2万3千年前の世界最古の釣り針が発見された。国内最古の人骨である山下洞人(約3万6500年前)に次ぐ約3万年前の幼児人骨も見つかった。さらに旧石器人が海や川の動物を採取し、食料としてきた文化が3万年以上前から2万年余りの間、ほぼ途切れずに存在したことが明らかになった。「人骨は出るが文化が分からない」とされてきた旧石器時代の沖縄に独自の文化があることが示されただけでなく、日本の旧石器時代文化の解明につながる大きな成果となった。

「ガンガラーの谷」を運営する株式会社南都の協力で2009年から調査を続けてきた県立博物館・美術館が、17日にマスコミ発表した。調査中の遺跡には二つの調査区があり、今回は調査区1での成果。

釣り針の大きさは約1・4センチ。ニシキウズ科の貝の底部を割り、先端が徐々に細くなるようにさせている。同じ地層から研磨に使ったとみられる砂岩片も見つかった。12年に発見、周囲の木炭の放射性炭素年代測定により年代を特定した。未完成品も1点あった。アオブダイやオオウナギの骨も見つかりこれら魚を釣った可能性がある。

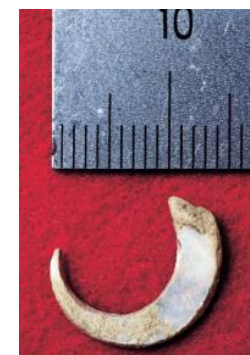
出土品には、海産貝製のスクレイパー(ヘラ状の道具)やビーズもあり、貝を割って砂岩で磨き多様な道具や装飾品を作る文化があったことが分かった。大量に見つかったモクスガニの爪やカワニナの貝殻の分析の結果、カニが最も成長する秋に採取されていたことが分かった。モクスガニの旬の時期にこの場所を拠点に採取し食べていたとみられる。

県立博物館・美術館の前館長で考古学が専門の安里進・県立芸大付属研究所客員研究員は「沖縄の人類のルーツが山下洞人の時代までさかのぼることがほぼ確実になった。旧石器時代と貝塚文化のつながりがだんだん見えてきた」と語り、調査のさらなる進展に期待した。調査成果をまとめた共同執筆論文が「PNAS」(米国科学協会紀要)に掲載され、オンライン公開されている。県立博物館・美術館は11月15日から特別展「港川人の時代とその後—琉球弧をめぐる人類史の起源と展開—」を開催し、今回発掘した遺物などを展示する。



サキタリ洞

南城市玉城字前川にある洞穴遺跡。港川人が見つかった港川フィッシャーから約2キロ。2009年から県立博物館・美術館が発掘調査を行っている。これまで9千年以上前に埋葬されたとみられるほぼ全身の人骨が見つかる。



沖縄県南城市のサキタリ洞遺跡で出土した世界最古となる約2万3千年前の釣り針



約3万年前の幼児の首の骨(右上)と肋骨(ろっこつ)(右下)。左はカワニナの貝殻とモクスガニの爪

刃物としても使える黒曜石とその産地(1)

日本は良質な黒曜石の産地

旧石器時代・縄文時代

黒曜石

黒曜石

黒曜石は黒色(茶色、半透明もある)のガラス質の美しい石である。割るとガラス同様非常に鋭い破断面を生じることから、世界各地で先史時代から有用な石器材料として重用されてきた。黒曜石は火山活動によりマグマが地表に噴出したり、地表近くの割れ目に入って急速に冷却するとき生成する。従って火山帯や活火山など火山活動の活発な日本列島は有力な産地である。ただし、黒曜石はどの火山でも産出するものではなく、黒曜石を生じやすい性質のマグマを伴っている火山でしかつくられない。

日本では約60ヶ所の産地が知られているが、良質な産地は信州八ヶ岳周辺(矢出川遺跡など)や和田峠、北海道白滝村、伊豆諸島の神津島、山陰の隠岐島、佐賀県伊万里市の腰岳など限られている。旧石器時代、縄文時代の人々も意外なほど石器の材質へのこだわりが強く、いいものは困難を厭わずに手に入れていたらしい。

右図は、伊豆半島沖の神津島産の黒曜石を石器原料として使っていた遺跡とその分布範囲である。この地域には箱根産という別の立派な黒曜石があるにもかかわらず、神津島産を多くの集落が利用していたとみられる。

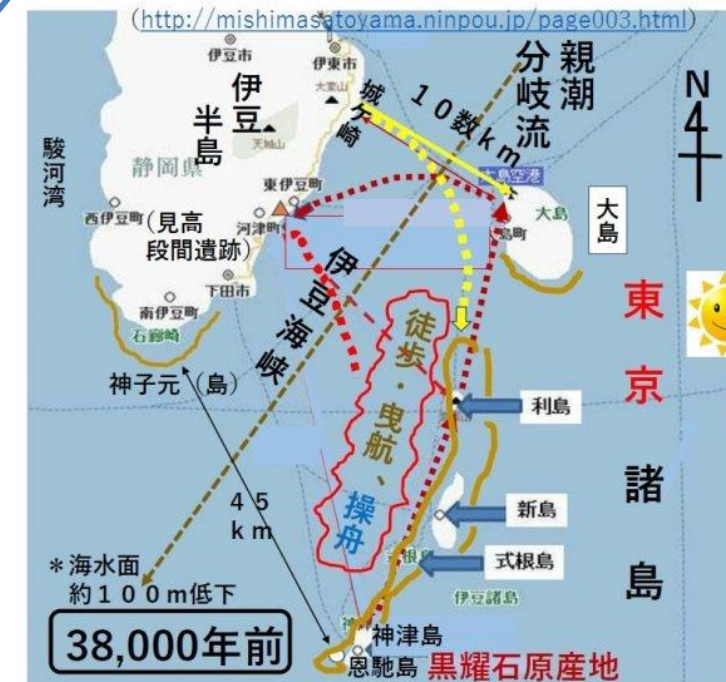
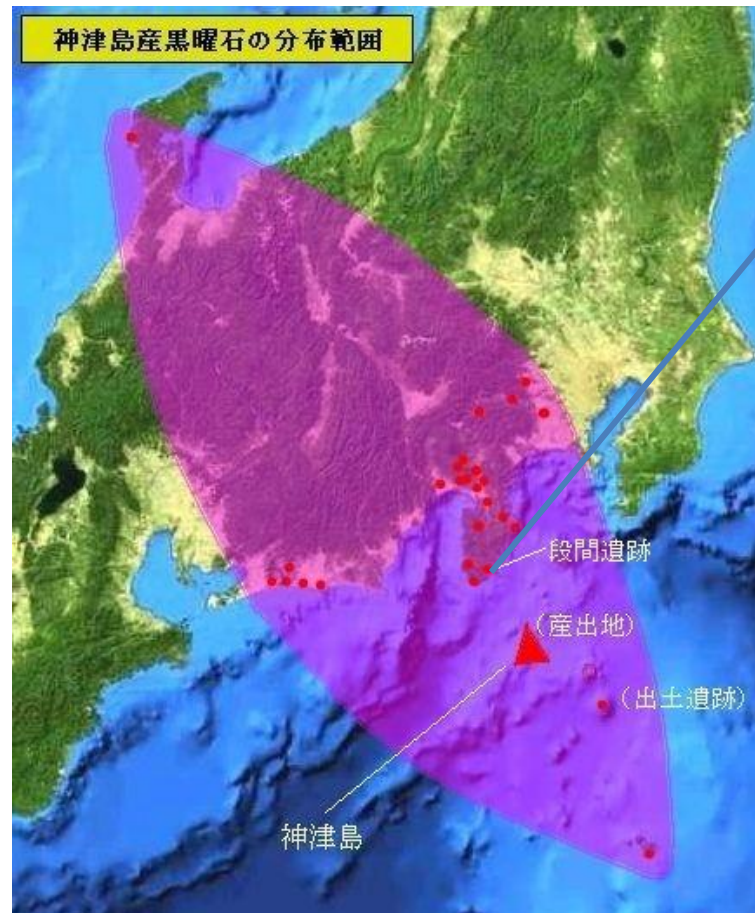
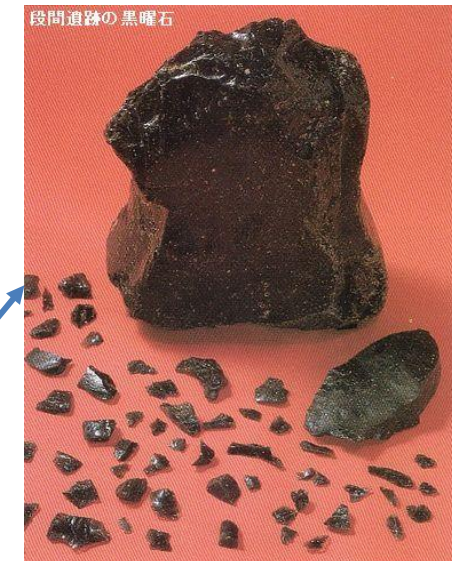
イギリスの若い研究者マーク・J・ハドソンの「古代のミロス島と神津島における黒曜石の調達」という論文(1988年)によれば、---神津島の黒曜石は早くも2万7000年前に本州島に搬入され、後期旧石器時代と縄文時代とに、「他の伊豆諸島や南関東との間で定期的な交易があったことは間違いない」と述べている。

神津島と伊豆半島間の海は水深が400mもある。したがって、陸橋が出来ていたわけでもない。当然、27,000年前という、石刃石器文化でも初期の時代から、何らかの海上運搬手段が使われていたということになる。

しかもせっかく苦心して入手するのであるから、それほど少量でもなかつたろう。右の写真はその一例で、下田の北方にある段間遺跡の黒曜石の塊である。段間遺跡は神津島産の黒曜石の集積場であったといわれている。塊の大きさは、破片や拳大の石塊に比べればかなり大きなものであろう。

逆に考えれば、どういう舟であれ、舟という運搬手段が使えるのであれば、黒曜石のような重量物の運搬は、陸上輸送より海上輸送の方がはるかに楽であるに違いない。島から取り寄せれば、陸上の搬送は短くて済むはずである。神津島や隠岐の黒曜石が好まれた理由には、その品質だけでなく、運搬の便利さが関与していたのかもしれない。

(日本人の起源、伊藤)



(「最初のアメリカ人」最新説と北海道に「日本祖人」を探る! Net)

刃物としても使える黒曜石とその産地(2) 黒曜石の運搬と用途

大陸からも求められた日本列島の黒曜石

火山列島・日本は、旧石器時代から高品質の黒曜石を産出する場所として、北東アジアに知れ渡っていたのではなかろうか。石器の原料に拘ったのは、なにも列島のヒトばかりではなかった。北東アジアの細石刃技術など先端技術を駆使していた集団も、日本列島産の高品質黒曜石を渴望したらしい。列島内に於ける黒曜石の流通をはるかに上回る規模で、列島産の黒曜石は北東アジアに拡散していたのである。

南サハリンの旧石器時代の遺跡・ソーコル遺跡には、当時陸橋となっていた宗谷海峡を陸路、白滝の黒曜石が届いていたと思われる。しかしそれ以外の新石器時代の遺跡では、間違いなく舟が使われたに違いない。渡海に限らず、サカチアリヤンやグロモトウハの遺跡はアムール川沿いにあり、水運を利用して運んでいたことが明らかである。しかも、これは列島人のほうから交易品として、大陸の方に持っていったものではあるまい。むしろ、大陸の人々が列島各地に高品質黒曜石を求めてやって来て、持ち帰ったものであろう。隠岐や男鹿産の黒曜石は、ウラジオストク辺りから日本海を横断して来島し、潮や風向きなどを見計らって持ち帰ったものであろう。

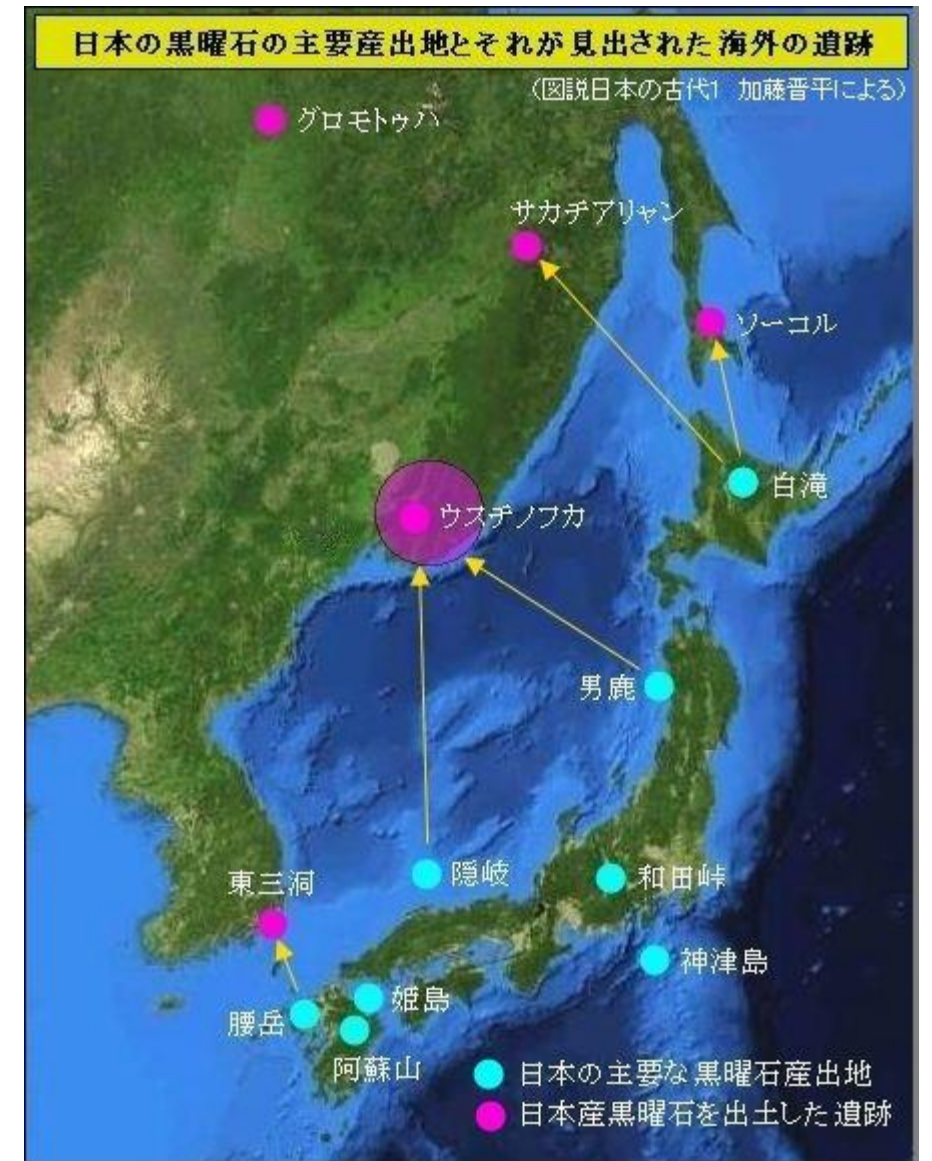
以上のように、この列島の祖先たちが、どういう舟乃至は海上交通手段で、どういう操船技術で、黒曜石の塊を海上輸送したのか、実のところ明確には解らない。しかし、黒曜石という当時の最重要物資が、海を越えて運ばれたということは、紛れもない事実である。

(日本人の起源、伊藤)

黒曜石の用途

石器時代において、その切れ味の良さから石器素材として広く使われた。刃物として使える鋭さを持つ黒曜石は、金属器を持たない民にとって重要な資源であった。現にヨーロッパ人の来訪まで鉄を持たずに文明を発展させた南アメリカでは、15世紀頃まで黒曜石を使用していた。メキシコのアステカ文明などではマカナなどの武器を作り、人身御供で生贄の身体に使う祭祀用メスもつくっていた。一説にはアステカが強大な軍事力で周辺部族を征服し帝国を作れたのは、この黒曜石の鉱脈を豊富に掌握していたからだともいう。

(黒曜石-Wikipedia抜粋)

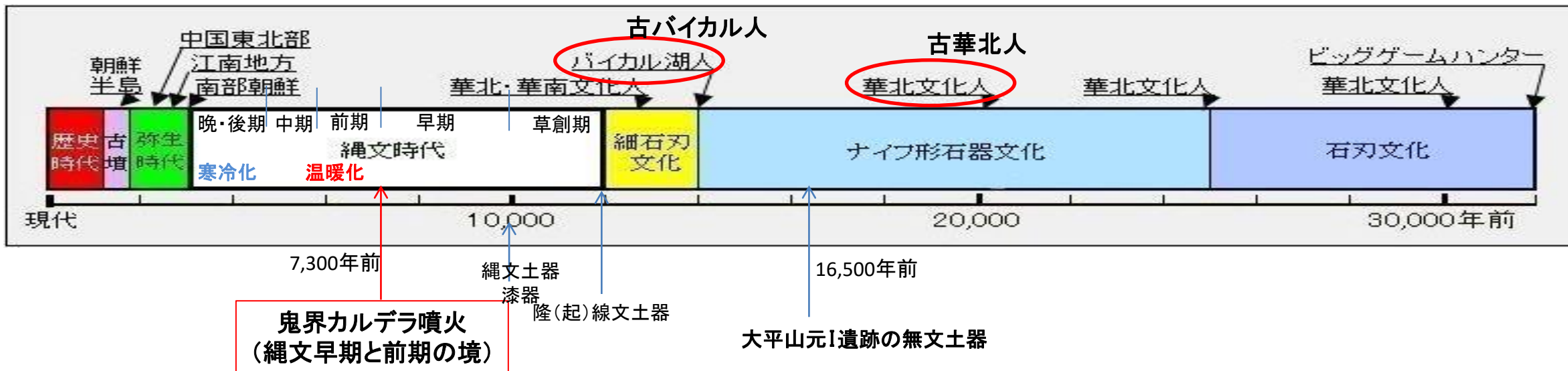


(日本人の起源、伊藤)

縄文時代は、1万年以上継続した持続可能な「森と水の文明」(狩猟、漁撈、採取/栽培/農耕)として世界に冠たるもので、縄文文明と称せる。

祝 2021年7月27日 19時12分 ユネスコの世界遺産委員会は、北海道と青森県、岩手県、それに秋田県に点在する「北海道・北東北の縄文遺跡群」を世界文化遺産に登録しました。(NHK)

列島への新人および文化の流入



縄文文明

縄文土器(世界最古級)の誕生(1)

縄文土器の出現はどうやら氷期が終了する前の事であり、世界的にみて非常に古いものだが、大陸側の極東地域には同時期の土器文化の存在が知られ、東アジア一帯で世界最古期の土器が同時並行的に出現したとみられており、相互の関係が注目される。

現在までに知られている日本列島最古の土器は青森県大平山元I遺跡や茨城県後野遺跡(うしろの)・神奈川県寺尾遺跡などから出土した文様のない無文土器であり、大平山元I遺跡から発見された土器の年代測定の算定は16,500年前(暦年較正年代法による)とされている。

長崎県佐世保の福井洞穴の3層で、クサビ形(福井型)細石核や細石刃が大量に出土すると共に、粘土紐を器面に貼り付けた「隆線文土器」が見つかった。第3層から共に出土した二つの木炭片のC14年代を測定したところ、12700±500年前と12400±350年前という大変古い値が得られた。その後、福井洞穴から近い(10kmほど)泉福寺洞穴から隆線文土器の更に下の層から、豆粒文土器が発掘された。また、愛媛県久万高原町美川の上黒岩岩陰遺跡の最下層の第9層から細隆起線文土器、第6層から薄手の無文土器、第4層から押型文土器と厚手の無文土器が出土している。その中でも細隆起線文土器は約1万2000年前のもので、日本最古級の土器の一つである。

日本列島最初の土器は次の4段階をたどると考えられている。まず最初の第1段階は無文土器を特徴とし、第2段階は豆粒文土器と隆起線文土器群であり、第3段階は爪形文土器群であり、第4段階が縄文土器群である。

(Wikipedia抜粋)

大平山元I遺跡からは世界最古と考えられる石鏃も出土している。(藤田)



(日本人の起源、伊藤)

縄文土器

縄文土器(世界最古級)の誕生(2)

1.5万年前、縄文時代の草創期に入ると最終氷期が終わり、間氷期に入り気温が急激に上昇し始めた。落葉広葉樹林が大量に生み出してくれるクルミ、クリ、ドングリなどの堅果類やヤマノイモなどの野生のイモ類などの、植物性食料資源の本格的活用に向けさせたであろうことは、まず間違いないと考えられる。旧石器時代末期ないし縄文草創期を推定すると、それまでの獣肉中心のメニューに、植物資源を加えることがどんなに重要な意味を持つものであったかを想像することが出来る。

ところが、エネルギー源となる澱粉の含有量の多い植物資源、堅果類(除く、クルミ)やイモ類などは、生(β澱粉)のままでは大変消化しにくい。熱と水でその結晶を破壊してα澱粉に変えないと食用とはならない。この加熱処理のための煮沸用の容器として、どうしても「土器」が必要だったのである。

以上のように、この時代の人々の獣肉に対する危機感と、植物資源に対するこうした欲求とが、「土器」という人類が初めて化学的変化を利用した製品を作り出すことに繋がったと思われる。しかし、土器の発見は、意外にも、まず、九州の西北部から始まった。この地区にも土器製作の、何らかの必然性があったのであろう。おそらく西日本地区全体で1,500人程度の人口分布であっても、大型哺乳動物の絶滅は、それに依存してきた当時の人々にとっては重大事であったに違いない。

長崎県佐世保から北へ10数キロ、福井川の右岸の山肌に開口した洞穴、いわゆる福井洞穴で1960年夏、芹沢長介、鎌木義昌を中心とする調査団が発掘調査を行っていた。洞穴の地表面のすぐ下には縄文早期の層があり、その下の第2層からみごとなクサビ形細石核や細石刃とともに「爪形文土器」が発見された。細石刃と土器とが一緒に出土するという衝撃的事実が初めて確かめられたのである。さらに第3層になると、クサビ形(福井型)細石核や細石刃が大量に出土すると共に、粘土紐を器面に貼り付けた「隆線文土器」が見つかり始めた。第3層から共に出土した二つの木炭片のC14年代を測定したところ、12700±500年前と12400±350年前という大変古い値が得られた。この事実は当時の学会に大きな衝撃を与えた。

福井洞穴から出土した隆線文土器は、日本列島を東方へ遡るように伝わっていた。考古学の江坂輝弥らが発掘調査した愛媛県美川村の上黒岩岩陰遺跡からも隆線文土器が出土した。しかしここでは細石刃は全く伴わなかった。共伴したのは基部に舌状のどっぴりのある有舌尖頭器であった。ここに土器が伝わった時は、すでに細石刃文化の時代が去り、有舌(茎)尖頭器の時代になっていたのである。その後、福井洞穴から10kmほど佐世保市の中心部寄り、泉福寺洞穴から隆線文土器の更に下の層から、「豆粒文土器」が発掘された。

東日本を見てみると、長野県上伊那郡南箕輪村の神子柴(みこしば)という所で、後に国の重要文化財指定を受ける、優美な形や精巧な技術を持った石器群が発掘された。この石器群は、特有の局部磨製石斧をはじめ、世界一優美だといわれる神子柴型尖頭器や、搔器、彫器などの組合せをもっていた。

この神子柴文化は、北海道から本州東北部に集中しているところから北方から東日本地区に南下してきたものらしい。すなわち、バイカル湖系の細石刃文化とは別の文化が先に渡来したことになる。ところが、この神子柴文化も、クサビ形細石刃文化の植刃器と同様、美しいが長大な、いわば時代遅れの尖頭器の文化であった。神子柴文化人も、後着のバイカル湖人同様、食用動物の資源の減少や動物相の変化にいかに対応するか、同じ問題に遭遇したに違いない。ここでも食用植物の利用を可能にする、煮炊用の“うつわ”が強く求められていたと思われる。東日本の神子柴文化系の遺跡・青森県の大平山元 I 遺跡から、隆線文土器とは別種で、しかもそれよりも古く最古の縄文土器と思われる「無文土器」が発見された(1万6千年前)。さらにその後、茨城県の後野遺跡や東京都の前田耕地遺跡でも神子柴系石器と共に「無文土器」が出土した。

興味深いことは、東日本のクサビ型細石刃文化や西日本の円錐型細石刃文化という、メジャーな文化から土器が生まれたのではなく、マイナーな神子柴文化や福井型細石刃文化の中から、土器という革新的な技術が生まれたことである。その後、神奈川県大和市の月見野上野遺跡の出土状況から明らかのように、東日本でも有舌尖頭器と隆線文土器が卓越し、隆線文土器は初期土器文化の全国スタンダードとなる。まさに縄文時代の幕が開いたということが出来るだろう。これは「縄文変革」ともよばれる新しい文化の胎動であった。

土器を手に入れた縄文人は、旧石器時代末から縄文草創期に、植物資源をメインとする食物体系に大転換を果たし、さらに草創期から早期には、この列島の豊かな資源である海産資源をメニューに加えた。そのうえ土器による煮沸で、従来の獣肉でも筋肉などが、植物でも繊維などがやわらかく食べやすくなり、原料の利用率も格段に向上した。貝や魚の荒を入れるとなおさら温かくてうまいスープが食べられるようになった。

植物性食料への依存度増大は、豊猟と不猟の差の大きい狩猟活動、つまり動物性食料に大きく依存していたときに比べ、食料の安定確保にも大きく貢献することとなった。その結果、土器を持つ生活は、定住的な生活様式や人口増加の現象を導き出すこととなり、10,000年にわたる縄文文化の出発点となったと見て差し支えあるまい。(日本人の起源、伊藤)

韓国の縄文土器

高山里遺跡(こうさんりいせき)は大韓民国済州道済州市翰京面高山里に所在する新石器時代の遺跡。新石器時代草創期に属し、「韓国国内最古の遺跡」として報道されたことがある。9万点以上の石器や1000点あまりの土器の破片が出土しており、1998年、大韓民国指定史跡となった(史跡第412号)。

高山里遺跡から9700年前 - 9200年前の縄文土器が出土、西日本縄文人が持ち込んだか

(Wikipedia抜粋 + 藤田)

縄文時代草創期の土器 隆(起)線文土器



神奈川県大和市上野遺跡出土
ごく初期の土器・隆起線文土器
12,000~10,000年前

(DNAでたどる日本人10万年の旅、崎谷満)

縄文土器の変遷



図 2-1 日本列島の新石器時代草創期における地域的差異
大塚 (1992: 55) による。

草創期



図 2-2 日本列島の新石器時代早期前葉末における地域的差異
原田 (1992: 61) による。

早期

多様な文明・文化の日本列島への流入



図 2-3 日本列島の新石器時代前期における地域的差異
小杉 (1992: 63) による。

前期

鬼界アカホヤ火山灰層、鬼界カルデラ噴火により南九州独自の貝文土器文化が消滅

縄文時代の開始時期である草創期を土器の出現によって定義する。この時期を特徴づける尖底や丸底の隆起線文土器には東日本型、西日本型、九州型とで差異がある。これらの差異は先行する無文土器の差異に由来すると思われる。

早期になると土器の様式がさらに多様化する。南九州では草創期から見られた貝文文化が盛んになる。貝文文化は南方島嶼部から黒潮に乗って北上したと考えられている。

朝鮮半島では、旧石器時代にはヒトが疎で縄文時代早期には全くヒトの気配がなくなる。鬼界カルデラ噴火(7,300年前)の避難民(西日本縄文人)が南朝鮮に渡り、西北九州と南朝鮮の漁撈文化が興る。12,000年前の縄文時代草創期の日本最初の土器である隆起線文土器に遅れること5,000年以上経った7,000年前頃の半島に日本と同じ隆起線文土器が現れる。この土器は縄文時代草創期の隆起線文土器の流れを汲むものと思われる。また、九州地方を中心に西中国、山陰地方にまで分布する轟B式土器は、この半島の隆起文土器に酷似している。その後、半島には北方の影響が見られる縄文土器(櫛目文土器)が現れた。鬼界カルデラ噴火後の縄文前期の標識土器である曾畑式土器が北西九州に現れるが、櫛目文土器と製法が極めて似ている。この曾畑式土器が南九州に南下する。

沖縄でも旧石器時代の遺跡が消滅し、新たに遺跡(伊礼原遺跡など)が現れるのは、7000年前頃の貝塚文化早期(縄文時代前期に相当)からである。この新規の遺跡は鬼界カルデラ噴火の避難民(西日本縄文人の一群)が沖縄(琉球)に逃れ、貝塚文化をひらいたと考えられる。この時持ち込まれた縄文土器が南島爪形文土器である。従って、琉球人の直接の先祖は西日本縄文人ということになる。

縄文土器 世界最古級で、多彩・多様

縄文土器の出現はどうかや氷期が終了する前の事であり、世界的にみて非常に古いものだが、大陸側の極東地域には同時期の土器文化の存在が知られ、東アジア一帯で世界最古期の土器が同時並行的に出現したとみられており、相互の関係が注目される。

日本列島最初の縄文時代草創期の土器は次の4段階をたどると考えられている。まず最初の第1段階は無文土器を特徴とし、第2段階は豆粒文土器と隆起線文土器群であり、第3段階は爪形文土器群であり、第4段階は多縄文土器群(土器の表面全体に限なく文様を施す)である。その後の早期から晩期まで、各期の標識とされる土器が選定されているがそれらの様式は多彩である。

(Wikipedia抜粋)



丸底深鉢形土器 縄文草創期 横浜市都筑区花見山遺跡出土 東京国立博物館蔵



把手付甕形土器 縄文中期 長野県伊那市宮ノ前出土 東京国立博物館蔵



深鉢形土器 縄文中期 東京都あきる野市二宮大塚出土 東京国立博物館蔵



深鉢形土器(火焰土器) 縄文中期 新潟県長岡市関原町馬高遺跡出土



火焰型土器(笹山遺跡出土)

火焰土器は)は縄文時代中期を代表する縄文土器の一種で、信濃川流域の新潟県にとくに出土が多く、長野県北部、および阿賀野川流域の福島県西部からも多く出土する。北陸地方の富山県や東北地方の南部山形県、群馬県・栃木県から少数出土することがある。

(Wikipedia抜粋)



水煙土器

深鉢(縄文中期): 長野県 富士見町 曾利遺跡出土 (古代日本人の造形センス、Net)



人形裝飾付壺形土器 縄文後期 青森県弘前市十腰内出土 東京国立博物館蔵



把手付甕形土器 縄文中期 長野県伊那市宮ノ前出土 東京国立博物館蔵



遮光器土偶、亀ヶ岡遺跡出土



注口土器 縄文晩期 青森県つがる市亀ヶ岡遺跡出土 ギメ美術館蔵

一般的には「亀ヶ岡遺跡」と呼ばれる約3000~2300年前の縄文時代晩期を中心とする、後期~晩期(約4000~2300年前)の遺跡です。出土品には、晩期の「亀ヶ岡遺跡」を代表する、遮光器土偶、籃胎漆器(らんたいしつき)、漆塗土器などがあり、精巧で卓越した芸術性が見られます。

(史跡 亀ヶ岡石器時代遺跡、Net)

日本の漆は世界最古

縄文漆 出土した漆(日本固有種)は1.2万年前の世界最古

長江河口にある河姆渡遺跡で発掘された漆碗は、放射性炭素年代測定で約6200年前と確認されたことから、漆器は中国が発祥地で技術は漆木と共に大陸から日本へ伝わったと考えられていた。

ところが、北海道の南茅部町の垣ノ島遺跡から出土した漆の装飾品6点が、米国での放射性炭素年代測定により中国の漆器を大幅に遡る約9000年前の縄文時代前期の装飾品であると確認された。縄文時代の集落と生活様式の変遷が確認できる垣ノ島遺跡からは、赤漆を染み込ませた糸で加工された装飾品の他に、黒漆の上に赤漆を塗った漆塗りの注口土器なども発見されている。さらに、福井県(鳥浜貝塚)で出土した漆の枝は、放射性炭素(C14)年代測定法による分析の結果、世界最古の約12600年前のものであると確認され、漆木のDNA分析で日本の漆は日本固有種であることが判明した。更なる調査で技術的に高度な漆工芸品である「赤色漆の櫛」も出土、この他に、木製品、丸木船、縄、編物、その加工に用いられた工具なども相次いで出土しており、漆工芸品も含めた木材加工の関連品が発見されている。このことから、現在では漆器の起源は日本であるという考えが一般的である。(漆器-Wikipedia抜粋)



青森県是川中居遺跡から出土
(八戸市教育委員会提供)



鳥浜貝塚遺跡から出土
(大阪法律事務所、Net)

桜町遺跡(富山県小矢部市)

(縄文時代早期~晩期の遺跡)

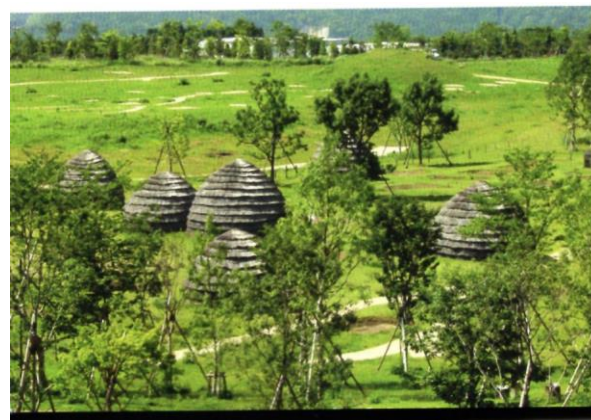
高床建物の柱材(写真)が大量に発掘され、弥生時代に大陸から伝わったと考えられていた高床建物が縄文時代に存在したことを証明した。この遺跡では軸組工法(柱に穴を開け横材を通す)の出土が見られ、当時2階、3階建ての建物が建築できたと思われる。



上野原遺跡(鹿児島県霧島市)

(縄文時代草創期から始まる、国内最古級の定住集落遺跡、竪穴住居(写真・復元)、燻製をつくる設備、道路の跡など多数の遺構が整然と配置されている。)

縄文時代草創期から始まる、国内最古級の定住集落遺跡、竪穴住居(写真・復元)、燻製をつくる設備、道路の跡など多数の遺構が整然と配置されている。



(図説 古代史、成美堂出版)

埋葬

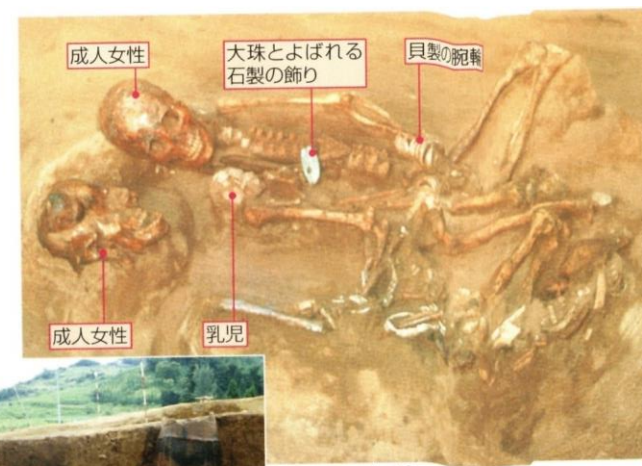
定住生活のスタートで墓地在誕生

埋葬と墓地

移動生活を送っていた旧石器時代人は、遺体を点々と埋葬していたと考えられるが、縄文時代になって定住生活が始まると、集落に墓地がつけられるようになった。縄文時代の一般的な墓は、地面に穴を掘って遺体をおさめ、土を被せる土壙墓(→P.36)である。

埋葬

地面に穴を掘り土器を埋めた遺構。乳幼児の遺体を入れ再生を願ったとされるが、胎盤を入れて子供の成長を願ったとする説もある。



屈葬

手足を折り曲げて埋める、縄文時代の一般的な埋葬方法。生者に災いが降りかからないよう、死者の霊を封じ込める意味があったとされる。写真は福岡県の山鹿塚。

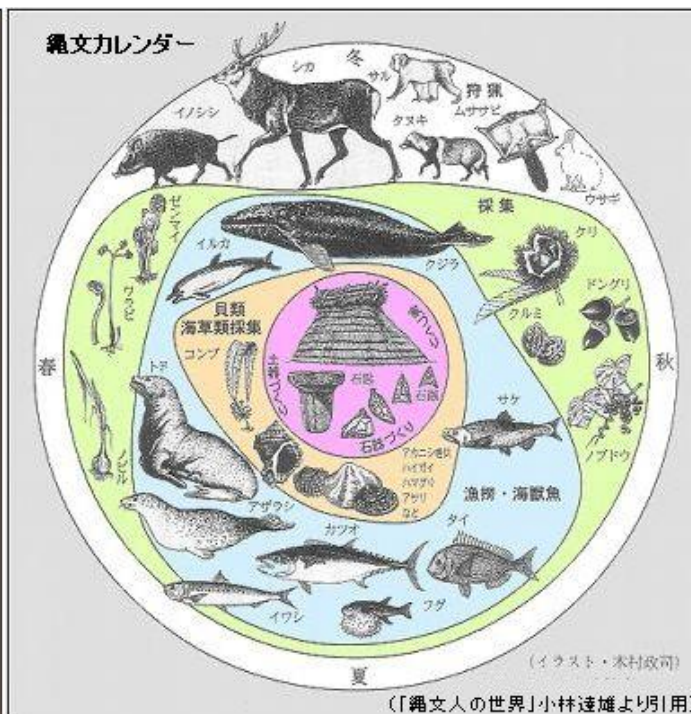
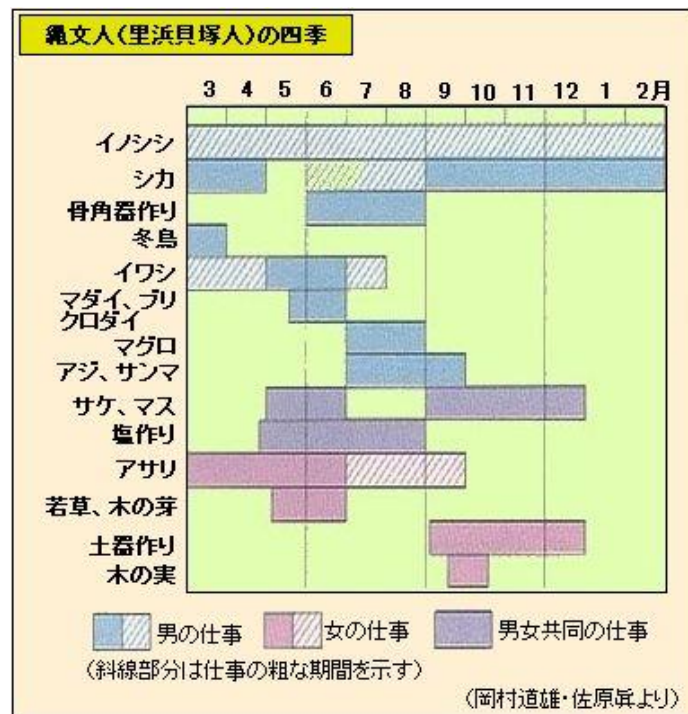


(図説 古代史、成美堂出版)

縄文時代後期前葉(約4千年前)の村上市・上野(かみの)遺跡から、火葬され焼けた人骨がまとまって出土した。焼人骨葬は縄文晩期になり、新潟や長野、山梨など中部地方で広まった(渡邊)。特徴は「土葬で1度葬った遺体を掘り出してから焼いており、何らかの儀礼や信仰が介在した可能性がある」(2020/12/2新潟日報社)

漁撈・狩猟・採取/栽培/農耕 その1

縄文カレンダー(どの季節に何が狩猟・採取できるかのカレンダー)



豊かな自然と四季の恵み 縄文時代の食事

本格的な水稲耕作をまだ知らない縄文人は、膨大な自然界の恵みを食料としていた。四季の変化に合わせて、狩猟・漁撈・採取によって多様な食料を獲得し、マメ類などの栽培、クリ林の管理、一部ではイネなどの穀物の栽培も始まっていた。

深鉢土器 (Deep bowl pottery), イノシシ, カモ肉, クリ, キノコ, トチ団子の煮物 (Boiled acorn dumplings, etc.), ヤマブドウ酒 (Wild grape wine), クリの実 (Acorns), サケの薫製 (Smoked salmon).

注口土器 (Spout-neck pottery), 福島県文化財センター 白河館 (Fukushima Prefecture Cultural Property Center, Shirahige Branch).

クリ, クルミ, エゴマ, シカ肉, ヤマブドウを混ぜた縄文クッキー (Jomon cookies mixed with acorns, chestnuts, flaxseed, venison, and wild grapes).

三内丸山遺跡で出土したクリの炭化物。気候の変化とともにクリ, クルミ, トチなどの木の実が豊富になり、肉類より植物性食料への依存度が高かった。

(図説 古代史、成美堂出版)

(日本人の起源、伊藤)

石鏃 (Ishizayumi)
石製の矢じり。弓矢の発明ですばやい動物の狩猟が可能になった。縄文時代の弓矢は戦争用ではなく、狩猟用である。
アスファルトを使って矢柄と接着した。

落とし穴 (Otsushi-ana)
深さは1mほどで、イノシシなどを追い込んで穴に落とし、捕まえたとされる。落とし穴は動物相が変わり始めた旧石器時代末ごろに出現する。
落とし穴の底には先のとがった棒が刺してあった。



木の実のクッキー
縄文時代の遺跡からは、クッキー状の炭化物が見つかることがある。これらはすりつぶした木の实を焼いてつくった保存食と考えられる。

(図説 古代史、成美堂出版)

縄文時代

縄文カレンダー

漁撈・狩猟・採取/栽培/農耕 その2

縄文時代

縄文時代早期から行われていた丸木舟による遠洋航海

雷下遺跡(市川市)から出土した縄文時代早期の丸木舟が日本最古の丸木舟と見なされている。その後、全国各地で100隻以上出土を見ている。

伊豆諸島の神津島産の黒曜石が本土の旧石器時代の遺跡から出土する。つまり、明確な運搬手段の証拠はあがっていないが、旧石器時代に神津島と本土とを結ぶ海上交流があったことを示す。縄文時代になると伊豆諸島間、本土間との交流は活発となる。伊豆諸島で出土する前期から中期の土器は関東地方の土器だけでなく関西地方の土器もかなり含まれている。土器以外にも交流の証拠は多数ある。八丈島の倉輪遺跡からは縄文時代前期から中期の住居跡と人骨、土器、石器に混じって、イヌ、イノシシの骨が出土している。これら動物は本土から持ち込まれたものと考えられる。

南アメリカのペルーで縄文式土器と酷似する土器が出土したことがある。黒潮に乗って(たぶん漂流か)縄文人が太平洋を渡ったのではないかと考えられている。

さて、伊豆諸島内の縄文遺跡から「磨製丸のみ石斧」が出土する。この特徴ある石斧の原産地は南の硫黄島からマリアナ諸島に点在する遺跡にみつけることができる。したがって、伊豆諸島が北からの本土と南からのマリアナ諸島との2重の交流を担っていた可能性がある。

つまり、小さな丸木舟からは想像できないくらい、縄文人は勇敢に太平洋の乗り出していたのである。そして、大海中にあっても方向、距離などを誤らない航海技術と熟練したテクニックをもっていたことがわかる。

(逆説の日本古代史、水野祐監修)



中里遺跡出土丸木舟 東京都北区

漁撈

丸木舟
丸太をくりぬいた舟。1本の木からつくられているため、衝撃に強く安定性にも優れている。
深さ20cm程度の浅い舟が多い。
木製の櫂(かい)がいっしょに見つかることもある。

骨角器
シカなど動物の骨や角などを削ってつくられた道具。釣針や獲物を突き刺す漁具などに利用された。

約針
括(もり)柄ごと投げて獲物を突き刺す漁具。
いかり型釣針 仙台湾周辺から三陸沿岸に特有の形。

縄文人とカキ
縄文時代中期〜後期の中里遺跡(東京都北区)からは大量のカキ殻とカキむき場の跡が発見されており、縄文人がカキをむいて食べていたことを示す。また、貝塚の近くで海に打ち込まれた木の杭が見つかり、大量のカキが付着していた。縄文人がカキを養殖していた可能性があると考えられている。

貝塚



品川区の大森貝塚遺跡庭園に建つ記念碑。その脇には京浜東北線(写真左)が東海道本線と並行する形で走る。

日本初の遺跡・大森貝塚
1877年、アメリカの動物学者モースは、横浜から新橋へと向かう列車(現在の東海道本線)の車窓から貝塚を発見した。これが大森貝塚で、日本の考古学研究の第一歩とされる。大森貝塚からは土器や石器が発掘され、「縄文土器」という用語はそのときのモースの報告書の文から名づけられた。



埋葬されたイヌの骨も見つかった。



里浜貝塚から出土したマグロの骨。(宮城県東松島市)

(図説 古代史、成美堂出版)

漁撈

西北九州と朝鮮半島の漁撈文化(大型魚を対象にした漁業)

6,300年前(7,300年前 較正年代)九州・大隈半島の南、鬼界カルデラが大噴火したのである。アカホヤ火山灰と呼ばれる膨大な火山灰が遠く東北地方まで降った。当然、南九州の生態系は破壊され、ヒトの住めるところではなくなったであろう。中九州でも事情はそれほど大きく異なることはなかったであろう。そういう時、西北九州では生き残りをかけて、新たな漁撈文化が生まれた。

おそらく、アカホヤ火山灰の打撃の少なかった西北九州(さらに半島)には、九州南部・中部からの避難民が押し寄せたに違いない。それは、堅果類、芋類の植物食をベースにし、タンパク質の供給を魚に求める、補完的な小規模漁業という旧来からの生業パターンの変更を迫ることになったと思われる。

堅果類や芋類の自然の供給量は西北九州でも減少し、それを補うために漁業資源の比重を大幅に引き上げる必要性に迫られたに違いない。新たな漁撈文化は、そうした状況変化に対応して、必然的にこれまでの沿岸漁業から大型魚(マグロ、サワラ、シイラ、サメ)を対象にした、外洋性の大規模漁業が必要とされた。

大型魚を釣るには当然大型の針が必要となる。そのとき導入されたのが、沿海州辺りから朝鮮半島の東海岸まで南下していた、結合式釣り針(5~10cmの大きさ)の技術であった。(日本人の起源、伊藤)



(日本人の起源、伊藤)

浦入遺跡(舞鶴)から出土した外洋航海用丸木舟

丸木舟の全長は約8mと推定され、幅0.8m、舟底の厚さは5cmで、造られた時に付いた焦げ跡が実見できる。縄文時代の丸木舟は50数例発見されているが、前期は5例(長崎・伊木力遺跡や福井の鳥浜遺跡など)で、浦入遺跡の丸木舟は中でも特別大きく、湾口近くで発見されたことから、外洋航行に使用されたと推測されている。外洋航海用としてはわが国でも最古級と判断される。縄文人の広域的海上交易は今や定説になっているが、日本海側で出土した船着場・集落跡などから日本海沿岸の交易起点の一つと考えられる。これまでの発掘調査によれば、丸木舟は、僅かな例を除き、殆どが日本海側の遺跡から発掘されていて太平洋側からは出土していない。日本海側では、日本全国のいろんな地域と「海の道」を通じて交易をしていたことがわかり、遠くシベリアと交易があった痕跡も確認されている。日本列島の縄文人は、一万年に渡り相当高度な「海の文化」を築いていたと察しられる。

(浦入遺跡、Net)



丸木舟
6000年前
浦入遺跡出土
京都府舞鶴市教育委員会蔵

世界最古の捕鯨発祥の地(真脇遺跡)、大量のイルカとクジラの骨出土

能登半島の真脇遺跡に立って、前方を見ると、遺跡と接して海が広がっている。ここは昭和57年から昭和58年にかけて発掘された、縄文時代の前期初頭約6000年前から晩期終末約2300年前までの約4000年間続いた定住型の縄文集落遺跡である。特にこの遺跡を有名にしたのが、多量のイルカやクジラの骨の出土であった。平均体重約100キロのマイルカを捕獲していたとなると、多数の縄文人とイルカの戦いが海の中で行われていたと推測される。

縄文前期の層から発見された個体数は284体分しかないが、今まだ発掘されている面積は少ないので、イルカ捕獲数は数千頭に及ぶと思われる。「人類と鯨類との関係史にとって、きわめて重要な遺跡である」(「海を渡った縄文人」橋口尚武編著 小学館)と評価されているし、能都町教育委員会のパンフでも「真脇は世界最古の捕鯨基地であった」と誇らしく記述されている。

(大阪法律事務所、Net)



「お魚土器」と呼ばれる真脇式深鉢(大阪法律事務所、Net)

照葉樹林文化(ヒマラヤ麓、東南アジア北部、江南、南朝鮮および日本西部に拡がる日本人の琴線に触れる文化)

縄文時代

1952年、日本山岳会はヒマラヤのマナスル初登頂をめざして、事前調査のため「マナスル踏査隊」をネパールに派遣した。その一員に植物学者、中尾佐助がいた。中尾は、カトマンズ郊外のカカニの丘に立ち、周囲の山々を覆う森が、常緑のカシを主とする照葉樹林であることを確認していた。中尾はこのフィールドワークを契機として、照葉樹林文化論という壮大な仮説を構想したという。このときの感動がよほど大きかったのか、「照葉樹林文化論の誕生」という論文の冒頭で中尾は「それはネパール・ヒマラヤから始まった」と自ら述べている。

照葉樹というのは、いわゆる常緑広葉樹で、植物に弱い筆者が図鑑で調べると次のようなものである。ツバキの葉のように、葉が比較的厚めで表面がテカテカと光っているので、照葉樹という名称が付けられたようだ。これらの樹木がネパールのヒマラヤの麓(海拔1,500~2,500m)からブータン、アッサムの一部を通して、東南アジア北部山地、雲南・貴州高地、長江流域の江南山地をへて、朝鮮半島の南端をかすめ、日本列島の関東・信越の平地まで覆っているのである。

日本人は稲作農耕文化の民だと規定したのは、民俗学の祖、柳田国男である。たしかに現代でも、稲作農耕文化は、その習慣や儀礼など形のあるものだけでなく、精神的風土として日本の文化の根幹を成している。しかし我々は稲作農耕文化以外の文化、もっとその下辺に潜む基層の文化を受け継いでいるという感覚、大変懐かしく感じるものがあることを知っている。

中尾佐助はネパール・ヒマラヤで、我々が無意識に基層と感じているような、我々の古い民族習慣の中に深く刻み込まれた文化要素の多くが、「特有の文化のまとまり」として、この広域な照葉樹林帯にあまねく存在していることに気づき、それを「照葉樹林文化」と名づけたのである。

日本人の琴線に触れる文化要素

我々は、何の疑いもなく正月には餅を食べ、雑煮には里芋をいれる。端午の節句にはチマキや柏餅を食べ、また、お祝いの席にはおこわや赤飯が用意される。こうした習慣や文化を、我々は殆ど無意識のうちに受け入れている。しかしこれらは、“お米を食べるという日常”とは異なる、いわゆる稲作農耕文化とは“異質の文化”が、「ハレ(晴れ)の日の特別な食べ物」として、習慣的に入り込んでいることを意味する。しかもその異質の文化は、稲作文化の発展形として出てきたものなどでは決してないことに、我々は教えられてもいないのに自然に気づいている。おそらく我々が今浸かっている豊穡な稲作文化ではなくて、はるか昔の祖先から伝えられた、不作や飢饉の時には非常食物の知識として、大切にしなければならぬ文化伝統であるからこそ、それは特別に美味くも贅沢でもないのに、“ハレの日に食べねばならぬ”のであり、我々はその文化要素に触れたとき、“琴線に触れるような、密かな懐かしさ”をこの文化に感じるのではなからうか。

これらの食文化を含む文化クラスター(群・かたまり)が、照葉樹林文化と呼ばれるものであり、中尾と共に照葉樹林文化やナラ林文化の研究で名高い、佐々木高明の著書「日本文化の基層を探る」から整理すると、その文化要素は右表のように纏められる。

『植物栽培と農耕の起源』中尾佐助著・昭和41
(日本人の起源、伊藤)



一倭と同じく南朝鮮が照葉樹林文化帯に入っていることに注目ー
(日本人の起源、伊藤)

照葉樹林文化圏に共通する諸要素

物質文化

水さらしによるアクぬき技法	ワラビ・クズ・ヒガンバナなどの野生のイモ類、カシの実などの堅果類の食用化
絹をつくる技術	蚕をはじめ、野生のものも含め、数多くの絹糸虫の繭から糸をひく
漆器を作る技法	ウルシノキやその近縁種の樹液を使う
雑穀・根菜型焼畑農耕	アワ・シコクビエ・モロコシ・ソバ・オカボなどの雑穀類、サトイモ・ナガイモなどのイモ類
ハンギング・ウォールの家屋構造	柱や梁で屋根の重量を支え、壁は柱の間に吊り下げたような構造
鵜飼の習俗	河川で鵜を使っておこらう漁撈

食事文化

粘性に富むモチ食品嗜好	モチアワ・モチキビ・モチ稻などのモチ種の開発、モチ・チマキ・オコワなどの食品
ハレの食品としての慣行	儀礼や接客用として、あるいは贈答用としてのモチ製品の活用
大豆の発酵食品	ミン・ナットウなど
サトイモを用いる慣行	正月の儀礼食にサトイモを用いたり、八月十五夜に月を拝み、芋祭りをおこなう習俗
コンニャクという特殊な食品	コンニャクイモの中に含まれるマンナンという多糖を糊化して固めたもの
ナレズシ	蒸したモチ米と魚肉を交互に桶の中に漬け込み、十分に発酵させた食品
小豆を邪霊祓いに用いる習俗	アズキに邪霊を祓う力があると考え、歳時儀礼に用いる習俗
芳香野菜などの利用	柑橘類やシソ類の栽培
茶葉の飲食慣行	茶の葉を穴の中で発酵させ、それを加工して食べ茶、噛み茶、飲み茶
醸造酒の技術	雑穀や米を粒のまま麴を用いて発酵させ、酒を醸造する

精神文化

死体化生型神話	オオゲツヒメやウケモチガミなどの女神が殺され、その死体から作物が生まれたとする神話
洪水神話	原古の洪水に生き残った兄妹神が世界を創造する(イザナミ・イザナギ神話はその一変形)
歌垣の習俗	春秋の満月の夜などに、若い男女が丘に登り、歌の交換、愛情の印を交換して求婚する
儀礼的狩猟の慣行	焼畑の火入れに先立ち、村の男たちが狩をおこなって、獲物の多寡で焼畑の豊凶を占う
山上世界の観念	人生は山に由来し、死者の魂は死後再び山に帰ってゆくという観念
カミ(精霊)信仰	巨石や巨木などに宿り、時に臨んで去来するカミ
正月に訪れる異型の来訪神	男鹿半島のナマハゲが有名
同じ型の昔話や説話の伝承	羽衣伝説、花咲爺、サルカニ合戦、炭焼小五郎、絵姿女房など

(日本人の起源、伊藤)

小豆(あずき)は縄文時代に品詞改良され、赤色で大粒の小豆になった。このことは、縄文時代に豆類の品種改良が行われていたことを示し、他の作物の品種改良も行われていたと推測される。小豆の全ゲノム配列が決定されており、200系統に及ぶ品種のゲノム解析を進めることで、品種改良の過程が明らかになると期待できる。
(ヤポネシアゲノム機関紙第1巻あき号、内藤健)

居家以岩陰遺跡—縄文時代早期のタイムカプセル

◆2019年9月10日 上毛新聞

<https://this.kiji.is/543899567437775969>

—縄文人の起源 不思議な葬制 解明に期待 居家以岩陰遺跡 長野原—

国内最古級の埋葬人骨20体超

国内最古級となる約8300年前の埋葬人骨が見つかった縄文時代の居家以(いやい)岩陰遺跡(群馬県長野原町)が、考古学関係者の注目を集めている。遺跡からは人骨20体以上が見つかっているが、DNA分析が可能なるほど状態は良好。考古学や形質人類学などの専門家が横断的な組織をつくり、縄文人の起源や埋葬習俗の解明に取り組んでいる。

遺跡は「岩陰」の名称通り、張り出した岩盤下のくぼみにある。縄文時代は岩陰や洞窟が生活空間として利用されており、同遺跡からは身近な場所に遺体を埋め、死者とのつながりを大事にしたことがうかがえる。

DNA分析

2014年から国学院大を中心とした調査団(団長・谷口康浩国学院大教授)が発掘。今年も8月下旬から約1カ月の日程で現地入りし、地中にある約7体を精密な測量で記録している。東京大大学院の近藤修准教授(形質人類学)は「人骨の特徴やDNAを調べることで、日本人の成り立ちが分かるかもしれない」と期待を寄せる。

年代測定を終えた8体のうち、5体が約8000年前の縄文時代早期、残る3体は約6000年前の同時代前期の人骨だった。

20~40歳とみられる女性の人骨は上半身と下半身が腰で切断され、骨盤の上に頭骨がのった状態で見つかった。これは縄文時代にみられた手足を折り曲げて葬る「屈葬」と異なり、特殊な埋葬法があった可能性を示している。埋葬した骨を掘り返し、あらためて埋めた形跡のある人骨も見つかった。

谷口教授は「不思議な状況がいろいろある。縄文早期は葬制の始まりで、縄文人が死んだ人をどう扱ったか、死生観を考える材料になる」と話す。

近親婚回避か

成人女性の人骨と、近くにあった子どもの骨、若い成人男性3体をDNA解析したところ、近い関係にあると思われたが、母子やきょうだいといった近親関係にないことも分かった。

谷口教授は多くの人骨を鑑定し、埋葬された集団の構成を明らかにする必要があるとした上で、「DNA解析の結果は近親間による結婚を避けていた可能性を示しているとも考えられる。縄文早期の家族や婚姻制の研究にもつながる」と指摘する。

調査では岩陰と「前庭」部分から掘り起こした土を水洗いし、数ミリ単位の微物も回収。動物の骨や植物の種、石器、1万年以上前の土器を発見している。周辺にはまだ5カ所の岩陰がある。さらに古い人骨が見つかる可能性もあり、縄文人の起源解明に期待が高まっている。(三神和晃)

動物、環境、植物 広く専門家集う

遺跡調査のため結成された、通称「居家以プロジェクト」には、DNA分析を行う東邦大の水野文月助教や年代学・同位体分析が専門の東京大学総合研究博物館の米田穰教授ら多くの研究者が加わっている。

魚やニホンジカ、イノシシの骨、イヌビエ、アズキの原生種が見つかっており、動物考古学や環境史、考古植物学の専門家が分析。縄文人の食生活や当時の自然環境など幅広い実態の解明を進めている。

半定住生活、栽培の始まり



国学院大学考古学研究室 発掘調査 速報 展示Ⅱ

発掘された 縄文時代早期の人骨 —居家以岩陰遺跡の発掘調査—

国学院大学考古学研究室では、平成26(2014)年から
群馬県吉岡郡長野原町・居家以岩陰遺跡の学術調査を
実施し、縄文時代早期の山場・資源利用と行動範囲に
関する調査研究に取り進んでまいりました。
この展示では、きわめて良好な保存状態で発掘された
縄文時代早期の埋葬人骨を中心に研究成果を報告します。

平成29年10月14日

10.14 ▶▶▶▶ 11.19*

*本展示は展示の都合上、一部にて行う場合があります。

国学院大学博物館 ホール

開館時間：10:00～18:00(入館17:30まで)

休館日：10月23日(土)

※本展示は国学院大学博物館・国学院大学考古学研究室

主催

国学院大学



発掘は2014年より、毎年夏休み時期に実施している(写真提供:谷口康浩氏)

縄文時代(草創期から前期)のタイムカプセル

縄文のタイムカプセル...鳥浜貝塚...

福井県若狭町に縄文時代草創期から前期にかけて(今から約12,000~5,000年前)の集落遺跡・鳥浜貝塚がある。風光明媚な三方五湖の最も南側にあり、当時は三方湖に面した集落であったらしい。

この住人は、生活廃棄物を、岸近くの湖の澱みに投棄して処理していたと考えられている。湖底に沈んだ堆積物は、大気からはもちろん湖水の循環からも遮断され、虫や微生物も活動できない無酸素状態の、“偶然が用意したタイムカプセル”に閉じ込められたのである。もともと貝塚は、貝殻のカルシウム成分が土壌を中和し、有機物由来の考古遺物を保護するため、人骨や獣骨、魚骨、骨角器などが数多く出土する。(旧石器時代と比べ縄文時代の人骨や遺物の出土が格段に多いのは、この貝塚という要因が大きい。)しかし、この鳥浜貝塚の自然の長期保存装置は、そのレベルをはるかに越えるものであった。

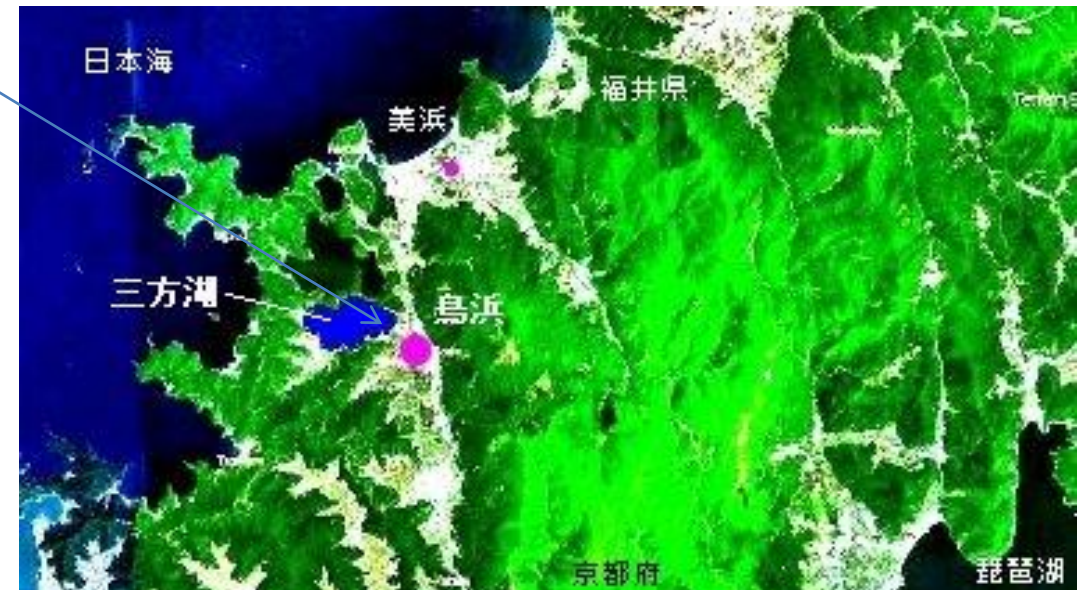
木の葉は葉緑素が残ってグリーンの色で、漆の櫛は赤漆の色鮮やかに出土したという。もちろん、空気に触れると直ちに、数千年の時を一挙に使い果たして、色を失ったと言うが.....。いずれにしろ、この縄文のタイムカプセルは、奇跡的レベルの有機遺物を保存していたといっていだらう。なかでも特筆される発見は、縄文時代前期初頭の泥炭層の中から、ヒョウタンやリョクトウ(最近の研究ではアズキの仲間らしいとされる)、その他の栽培植物の種子が検出されたことである。ヒョウタンは炭化種子だけではなく、果皮も多数出土し、中には加工されたものもあったという。更に同じ地層から、エゴマやシソなどの種子も発見されている。それぞれの起源地は、ヒョウタンがアフリカ、リョクトウ(orアズキ)はインド、エゴマやシソは東アジアの照葉樹林帯である。ということは、いずれもアジア大陸の照葉樹林帯を經由して、この日本列島に“人の手”によって持ち込まれたと考えざるを得ない。だから、これは野生ではなく、栽培されていたに違いないと考えられるのである。この“人の手”が、照葉樹林文化を伴った人の渡来によるものか(もしかすると、浦和1号などは照葉樹林文化を伴って渡来した人の一人乃至は子孫かもしれない。)、列島人が大陸の照葉樹林文化圏へ“旅”をして、持ち帰った文化なのかは明らかではない。筆者(伊藤)はおそらく両方であったろうと考える。それほど活発な交流があっていたのではないかと考えるからである。

しかも、鳥浜貝塚での発見以来、これらの有用植物は、長野県の大石遺跡や荒神山遺跡でエゴマが、千葉県大坪貝塚や滋賀県粟津湖底遺跡からヒョウタンが、岐阜県高山市ツルネ遺跡からエンドウかダイズと思われるマメが出土するなど、縄文前期・中期の遺跡や層から続々と発見されている。

さらに、縄文時代の前期から中期にかけての巨大遺跡、青森県・三内丸山遺跡からも、赤い漆塗りのお椀が出土したのをはじめ、ヒョウタン、エゴマ、マメ類、ゴボウ、アサなど、鳥浜貝塚で発見された作物群とよく似た“栽培植物のセット”が発見され、プレ農耕段階の照葉樹林文化の影響が、当時すでに本州の北端にまで及んでいたという、驚くべき事実が報告されている。

(日本人の起源、伊藤)

照葉樹林文化の影響を受けたヒョウタン、リョクトウ(orアズキ)、エゴマやシソ等のプレ農耕段階の有用植物の江南からの渡来



環日本海交流・交易(1)

日本海を挟んだ対岸のナラ林帯から日本海を横断あるいは日本海岸に沿って渡来した栽培作物群(カブ、オオムギ、ゴボウ、ネギ、カラシナ、アワやキビ)の存在

縄文時代

ナラ林文化

ナラ林文化圏

日本の在来種のカブには、洋種系と和種系の二種類があり、洋種系は主として東日本に分布し、和種系は西日本に分布している。そして洋種系のカブの系統は、朝鮮半島北部、中国東北部からシベリアに連なるといふ。明らかに東日本から、日本海を挟んだ対岸、すなわち、ナラ林帯から渡来した作物であるということが出来る。

また、栽培種のおおむぎは、野生植物当時の脱粒性を防止する遺伝子の組合せから、W型とE型に分けられるという。そして、E型がインド東部、チベットから中国南部をへて西日本に分布し、W型は西アジア・ヨーロッパからシベリア・中国東北部・朝鮮半島北部をへて東日本に分布している。

このようにこの列島の在来作物の中に、シベリア、中国東北部から、サハリン・北海道を経由し、あるいは日本海を縦断して直接に、乃至は朝鮮半島を経て入ってきたものがある。それはカブやおおむぎだけでなく、ほかにもゴボウ、ネギ、カラシナなどや、アワやキビ、それに一部ソバも加えて、北方系作物群と呼ばれている。

これらの作物群は、黄河流域の農耕地帯から中国東北部に入ってきたというより、もっと北の南シベリアから東北アジアのナラ林帯に伝わり、その地域にいわゆるナラ林型雑穀畑作文化を形成し、それが日本列島にまで達したと考えられる。

このナラ林文化圏が、民族や一定規模以上の集団の移動・交流を伴っていたか、明らかではない。しかしそれは上記、興隆窪文化や、沿海州の遺跡の解明が進むことによって次第に明らかになると思われる。

『日本文化の基層を探る』佐々木高明著・NHKブックス
(日本人の起源、伊藤)

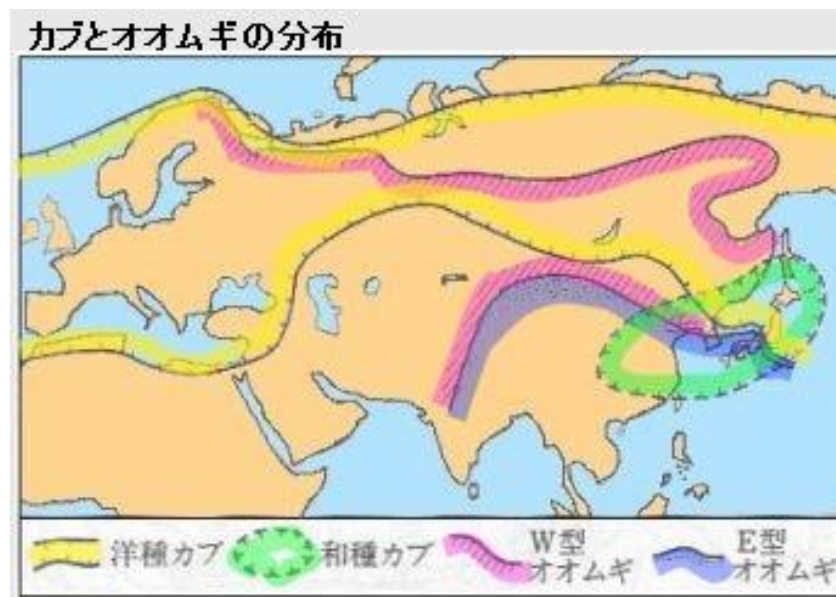
沿海州からの渡来の規模は如何ほどか

旧石器時代は海岸線が後退していたとはいえ、隠岐などの日本海側で産出の黒曜石が日本海を横断あるいは沿岸沿いにロシアの沿海州に運ばれていた(前述)。縄文時代にもナラ林文化圏の栽培作物が沿海州からリマン海流に乗り対馬海流を横切り若狭や越前などの日本海側に到達する、人的・文化的交流があったと思われる。また、興隆窪・紅山文化の玦(ケツ)状耳飾もまたこのルートで伝わった可能性が高い。弥生時代中期に匈奴の製鉄技術(野ダタラ)や中国北方の「オルドス式短剣」(双環柄頭短剣)もまた日本海横断して渡来したと思われる。さらに、奈良・平安時代には朝鮮半島北方や沿海州に版図を持つ渤海からの使節団が日本海を横断して度々来日している。このように、朝鮮半島を経由しない日本海を横断する海路が存在したことは明らかである。実際、どれほどの渡来人が沿海州から列島に渡っているかは不明であるが、海洋を渡るのだから日本人の成り立ちに大きく影響するほどの多数の渡来があったとは思えない。(藤田)



東アジアの植生帯とナラ林文化圏・照葉樹林文化圏
(佐々木高明より引用・改変 地図を90°右回転)

(日本人の起源、伊藤)



(日本人の起源、伊藤)

環日本海交流・交易(2)

興隆窪・紅山文化(玉文化)

縄文人のファッションを彩った玦(ケツ)状耳飾

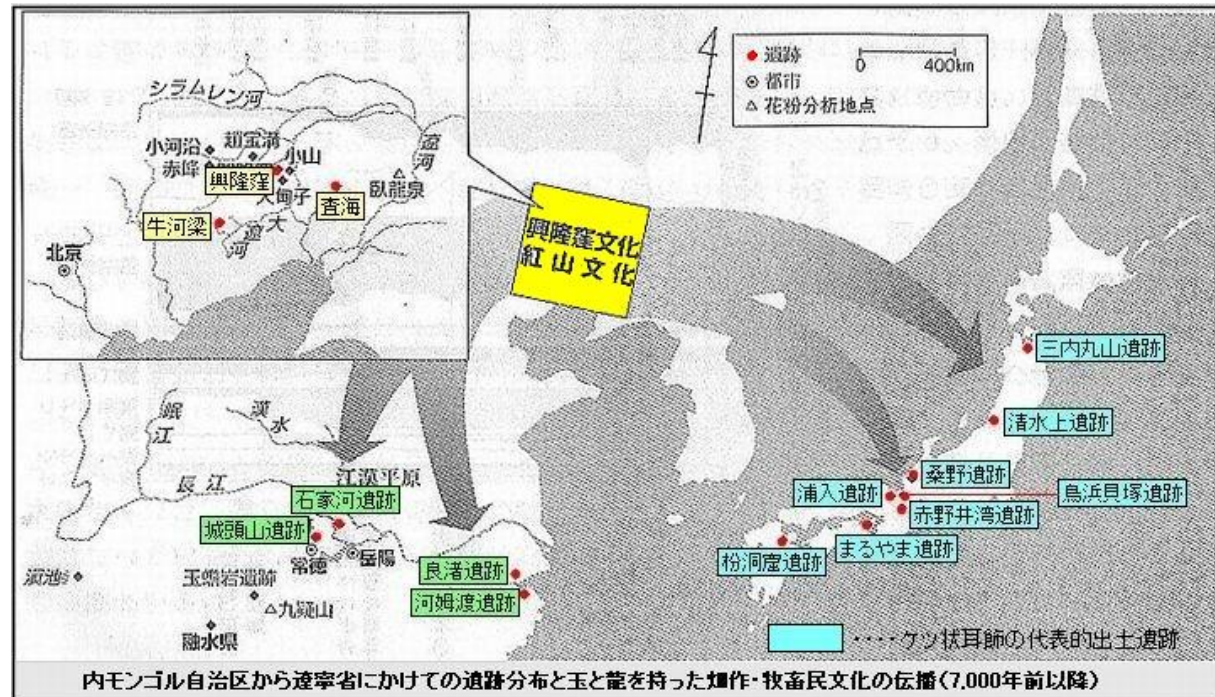
長江中・下流域に、「黄河文明」に先行する「長江文明」があったことが、近年認知されてきた。その長江文明で、最も繁栄した良渚遺跡(5,500~4,000年前)から実に4,000に上る多数の、且つ精緻で優美な玉器が出土した。一方、この列島に「玉」が現れるのは、大阪府藤井寺市の国府(こう)遺跡からである。ここからは100体に及ぶ人骨が発掘されているが、縄文前期の人骨の一部にケツ状耳飾りをつけて埋葬されていたものがあった。このケツ状耳飾りと同様のものは、古くから長江下流域で見られたものであったが、それが列島では突然、縄文早期末から前期に、北海道から九州にかけて一斉に出現したのである。

玉は長江からという常識に沿えば、照葉樹林文化の一環として西日本地区に伝播した、というのならよく理解できるのだが、このケツ状耳飾りに関する限りは、西日本地区というような偏りはなく、列島全体に一気に拡散した。この不自然さは、中国サイドの発掘発見で解決されつつある。すなわち、ここ十数年来俄かに、中国東北部の内モンゴル自治区から遼寧省にかけて、8,000~7,000年前の新石器時代に高度な玉文化が存在していたことが、明らかとなってきたのである。その遼寧省西部の興隆窪(こうりゅうわ)文化と呼ばれる遺跡のうちの一つ、査海遺跡(7,000年前)の墓地から、全く予想外のことだが、耳に玉ケツを着けた遺体が発見された。それだけではなく、玉七(ぎょくひ)や玉斧などの玉製品が発見された。

長江流域における最古の玉は、6,500年前まで遡るのがせいぜいであり、7,000年前の査海遺跡の玉は、正しく中国最古の玉であることが明確となった。玉の起源は、中国南部ではなく、東北部であったのである。しかも、この査海遺跡の玉ケツ(ケツ状耳飾り)や玉七とよく似ている遺物が、福井県金津町の縄文早期末~前期(6,000年前)の桑野遺跡から出土していた。桑野遺跡だけではない。類似したケツ状耳飾りは、前節の鳥浜貝塚をはじめ、新潟県清水上遺跡、京都府浦入遺跡など日本海側の遺跡を中心に、日本全国に分布しているのである。

即ちこの玉ケツ(ケツ状耳飾り)は、実は長江流域から照葉樹林文化の一つとして伝播したものではなく、中国東北部(旧満州)から日本海を縦断して伝播し、桑野遺跡を含む北陸地方を生産拠点として、全国的に広がったと今では考えられている。また、こう考えることが、ケツ状耳飾りが地域の植生や、それが醸す文化とは関係なく、全国的広がりを見せたことを、無理なく説明できると思うのである。

安田喜憲は、以上述べてきた文化の伝播や交流について、「龍の文明 太陽の文明」(PHP新書)のなかで、右図を提示して“中国東北部→長江流域あるいは中国東北部→日本列島”という文化の流れを想定している。(日本人の起源、伊藤)



(三内丸山遺跡と牛河梁遺跡の日本と中国の交流の話、Net)
(日本人の起源、伊藤)



福井県金津町の桑野遺跡出土の玉製品

(日本人の起源、伊藤)



土偶をモデルにした衣装と朱赤の櫛、大きなケツ状耳飾、ヒスイのペンダント、貝製の腕輪をした縄文美人

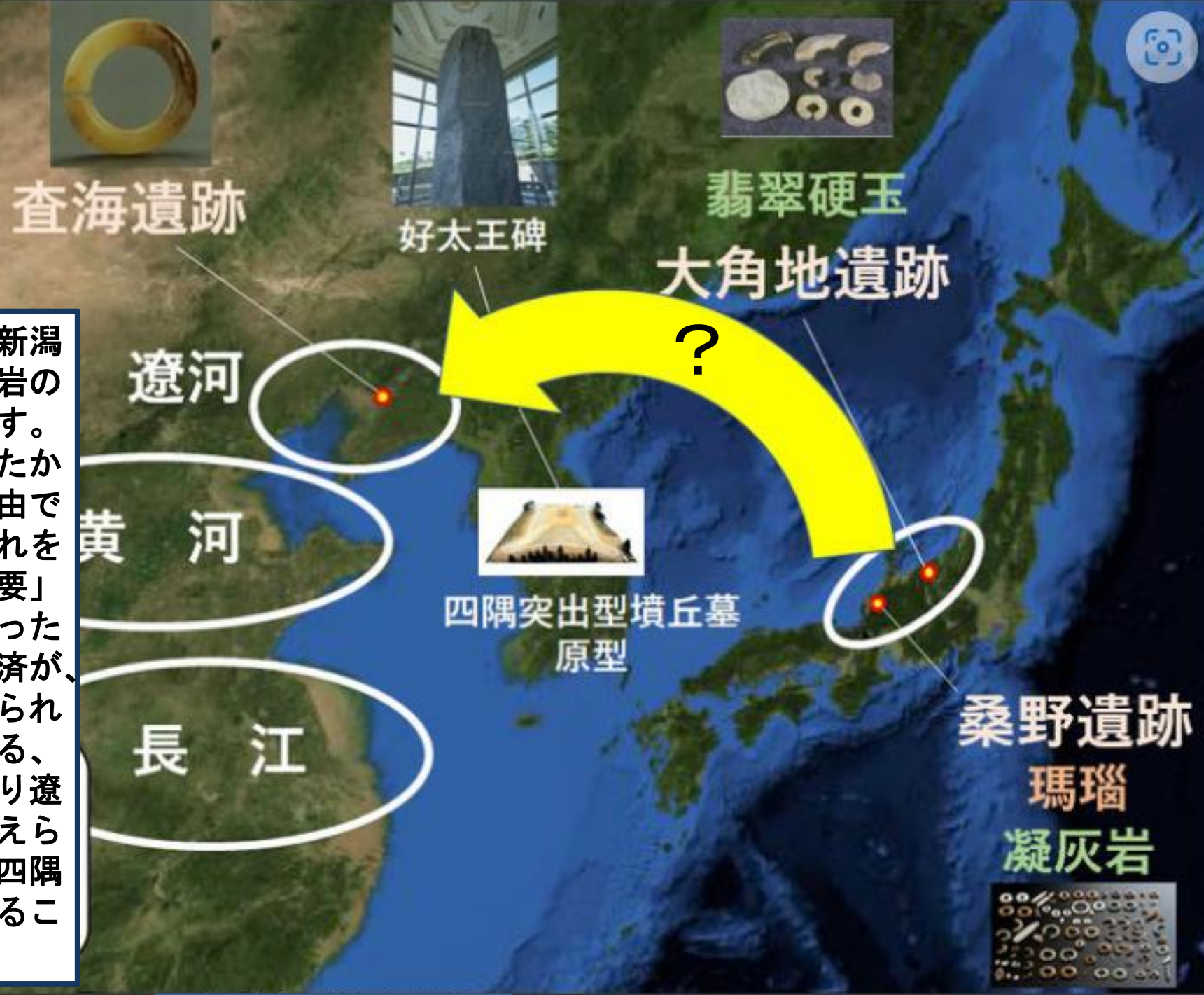
(日本人の起源、伊藤)

縄文時代 玉文化

世界最古の玉造り

7000年前

大角地遺跡は翡翠硬玉の産地である新潟県糸魚川市、桑野遺跡は瑪瑙や凝灰岩の産地である福井県あわら市にあります。これら二つの遺跡は、石の産地だったから玉造りが始まったという単純な理由ではないでしょう。石を加工して、それを装飾品やお金として使うという「需要」があったからこそ、石の加工が始まったに違いありません。世界初の通貨経済が、この北陸地方で始まっていたと考えられます。まさに「縄文文明」とも言える、縄文人により、これらの地域からより遼河文明の査海遺跡に伝わったとも考えられる。また、年代は新しくなるが、四隅突出型墳丘墓の原型が朝鮮半島にあることにも注目。



(世界最古の玉造り(Net)、八俣遠呂智)



玦状耳飾は、最初装飾品として作製されたと思われるが、北陸地方を中心日本各地の縄文時代前・中期の遺跡から出土している。この出土状況から、この玦状耳飾は貨幣歳使用されたのではないと思われる。ちなみに、弥生・古墳時代に貨幣として使われた勾玉は、この玦状耳飾を2分したものに類似している。

遼河文明と縄文文明との活発な交流

1

約8,000年前の遼河文明の査海遺跡では、打製石斧が沢山出土し、畑を耕すために使ったと考えられる。(査海遺跡の集落のほぼ中央で、赤褐色の石で積んだ長さ19.7m、幅2mの龍形配石遺構が発見された。その遺構の下から、土抗墓と祭祀抗が発見され、副葬品のない墓が多いものの、22点の石器を副葬した墓もあった。) サドルカーンという石器も発見され、雑穀をすりつぶして、粉にするもので、恐らく粟を栽培していたと思われる。7,800年前の土器の出土もあり、縄文土器とほぼ同じであった。また、遼河文明の査海遺跡から出土した中国最古の玉製品「玦状耳飾り」とほぼ同じものが、福井県の鳥浜遺跡(6,000年前)からも発見されている。さらに、縄文時代中期の三内丸山遺跡の土器は、遼寧省から内モンゴル自治区にかけて、遼河文明の一つの紅山文化の時代に作られていた円筒土器と材質も形状もそっくりであった。このように縄文人は、中国北部や沿海州との交易のため、環日本海を縦横無尽に移動していたと思われる。

縄文時代の環日本海地域の活発な交流を考える上で重要なのは縄文時代の環日本海の気候の変動を考慮することである。縄文時代前期・中期に本州の北端に高度な縄文文化(三内丸山遺跡)が花咲いていた。環境考古学、特に花粉分析、および酸素、炭素の安定同位体を駆使して過去の気候を復元によると、三内丸山遺跡の最盛期の6,000年前は、現代よりも気候が温暖で縄文海進のため現在より海面が2~3m高く、気温も2~3度高かった。三内丸山遺跡が衰退し始めた縄文時代中期後半は、温暖な時代が終わり、冷涼化し始めた時期でした。

縄文時代前期の6,000~7,000年前に遼寧省から内モンゴルに高度な紅山文化が栄えていた。(紅山文化は、東北三省(遼寧・吉林・黒龍江)と内モンゴル・新疆ウイグル自治区の新石器時代の文化です。) ボーリング調査して土の中に含まれている花粉の化石を取り出して分析した結果、当時は日本海沿岸と同様にナラ・ニレ・カエデや満州グルミといった落葉広葉樹と松などの針葉樹が混交した森があったことが明らかになった。

2

三内丸山遺跡は寒冷化し始めた約5,000年前から衰退するが、紅山文化もまた約5,000年前に突然崩壊します。この寒冷化が、紅山文化に大変大きな影響を与え、紅山文化を担っていた人々が、寒さを避けて、南へ、或いは南東部海岸地帯へ逃れ、その一部が北陸地方を中心に渡来してきたと思われる。

(るいネット、縄文人は中国と交易していた?【その1】、文責藤田)

朝鮮半島を介しない旧石器・縄文・弥生時代および古代の活発な環日本海交易・交流の存在

1. 旧・新石器時代、隠岐などの列島産の黒曜石が沿海州などの大陸沿岸に運ばれている。
2. 日本最古(世界最古級)の土器は青森県大平山元I遺跡から出土した文様のない無文土器であり、16,500年前の土器と推定されている。この土器と同じ年代の土器が環日本海の沿海州などの極東で出土している。また、縄文土器と類似の土器が沿海州や北中国で出土する。
3. 縄文文化と遼河文明の玉文化(玦状耳飾など)が環日本海沿岸で出土する。
4. 日本海を挟んだ対岸のナラ林帯から日本海を横断あるいは日本海岸に沿って渡来した栽培作物群(カブ、オオムギ、ゴボウ、ネギ、カラシナ、アワやキビ)が存在する。
5. 気候が冷涼化した縄文時代の後期には沿海州など日本海沿岸からかなりの渡来人が列島に来たと思われる。
6. 前4世紀の弥生時代中期にオルドスの双環柄頭短剣が日本海系経路で列島にもたらされた。出雲の野ダタラ製鉄もまた日本海経路でもたらされた可能性がある。即ち、匈奴の強靱な鉄製造技術が半島経路ではなく、日本海経路で倭国に伝わった。
7. 奈良・平安時代には朝鮮半島北方や沿海州に版図を持つ渤海からの使節団が日本海を横断して度々来日している。(藤田)

東日本縄文人の巨大集落

縄文都市（三内丸山遺跡）（5,500年～4,000年前）

いま我々は、縄文時代の最盛期の真っ只中にいる。縄文文化は、春には山菜、夏には魚介類、秋には木の实、冬には狩猟という、森と海の恵みに基盤を置いた、自然=人間循環系の文化（安田喜憲）であった。この生活原理に従いながら、クリの栽培化などの高度な技術開発により、大規模集落に発展させたのが、縄文都市とも呼ばれる三内丸山であった。

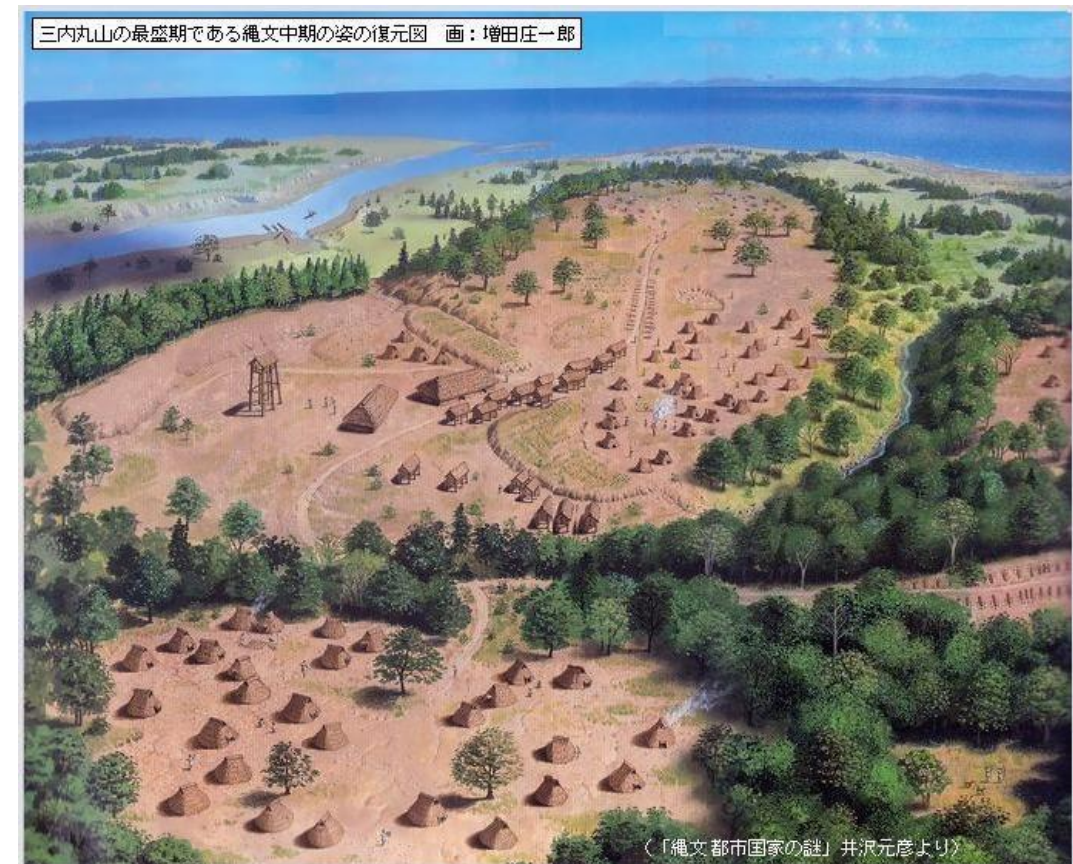
三内丸山は自ら数百人規模の人口を擁する大都市であり、且つ周辺に16以上の衛星都市を抱える大都市圏であった。おそらく列島内はもちろん、大陸、沿海州・アムール地方、更には南西諸島まで名の知れた拠点都市であったに違いない。

したがって、ここには、あらゆる物資が集積し、いろいろな人々が集う交易センターすなわち国際都市であった可能性もある。あの6本の巨大な柱の建造物は、おそらく出入りする舟の見張りの櫓（やぐら）であり、狼煙をあげれば通信用タワーとなり、夜、篝火を焚けば灯台代わりとなったであろう。（そうした意味では、上図の建造物の復元図には屋根が描かれており、筆者（伊藤）としてはやや疑問である。筆者は屋上には、何らかの集石炉が作られていたと想像している。）

右下の図は列島内の交易ルート、交易品の数々である。生活物資から装飾品までが列島各地から三内丸山に集積していたことが分かる。

（日本人の起源、伊藤）

佐藤洋一郎は、三内丸山遺跡から出土したクリのDNA解析をしたところ均一のパターンを示し、クリは均質の栽培種であることを明らかにした。また、玉製品等には、興隆窪・紅山文化の伝搬もみられた。（藤田）



三内丸山の住人は、誰か？

東アジアまで拡散したホモ・サピエンスは、寒冷に適応しながらアジア人化してゆく。もしかすると、まだ生存していた北東アジアの旧人と混血したかもしれない。この推測は、シンドントと称される北東アジア人特有のシャベル状切り歯（上あごの前歯がシャベル状に凹んでいることを指す）が、原人段階から現代人にまで引き継がれているという、アフリカ単一起源説では説明のつかない事実からの推測である。

北東アジアは寒冷な気候の地域ではあったが、大型哺乳類の宝庫でもあった。彼らは黄土動物群やシベリアのマンモス動物群の大群に群がったことであろう。そこでは人口の増加率が高まり、人口の増加は“文化・技術の創出効果”を高めた。バイカル湖文化センターと呼ばれる地域は、そういう地域であったと筆者（伊藤）は理解している。

伊藤は、列島の旧石器文化の分析から、細石刃文化成立の頃、北海道を含む列島の東地区には、バイカル湖文化系の「東日本人」と、九州、四国を含む列島の西地区には、華北（黄河）文化系の「西日本人」という、二系統の民族集団がこの列島の東西に並存するという大枠が形成されたと考えている。そして、それは基本的に縄文時代へつながった。

従って、縄文時代の東日本の中心都市、三内丸山は必然的に「バイカル湖文化系の東日本縄文人（古バイカル人）」が作り上げた都市であったと考えられる。

（日本人の起源、伊藤）



（日本人の起源、伊藤）

意外なほど高度な縄文人の生活

縄文時代

高度な生活

縄文人の生活(逆説の日本古代史、水野祐監修)

1. 縄文人はカキの養殖を行っていた。貝殻が棒に付着したカキを発見。潮干狩りは春から初夏にかけて。
2. 縄文人の集落はクリで囲まれていた。縄文中期後半になると寒冷化が進み、食料不足を補った栗が植えられた。(栗の植林)
3. 縄文人はアスファルトを接着剤・凝固剤としてつかっていた。(アスファルト)
4. 縄文時代にも神聖なランプがあった。吊り手土器は集落の特定の家からだけ出土する。祭祀につかわれたランプか。(ランプ)
5. 縄文時代中期から後期にかけ形成された環状貝塚には多量の貝殻が残された。環状貝塚は、干し貝の製造所と考えられる。(干し貝製造)
6. 縄文人は木ではなく土器で太鼓をつくったか。有孔罌付土器(ゆうこうつばつきどき)は用途は太鼓か!?(土器の太鼓)
7. カキの幼生であるプランクトンは何かに付着しないと生育しないという特性をもつ。縄文人はより多くのカキをえようと浅瀬に木の枝を投げ込み、カキを枝に付着させたと思われる。この棒付きカキは埼玉県や神奈川県貝塚でよく見られ、縄文人がカキの養殖を行っていた証拠と考えられている。(カキ養殖)
8. 縄文時代の抜歯風習は、中期末に仙台湾沿岸地方で発生し、後期前葉には関東地方に広まり、後期中葉には九州地方にまで達した。とくに後期・晩期の成人人骨には、ほとんど抜歯が認められる。この風習は一部九州を中心とする西日本の弥生時代前期ごろにも引き継がれている。抜歯は、その当時、共同体の構成員として認められるために、男女の別なく、だれもおこなわれなければならない重要な儀式であった。また、固いものを噛んだと思われ、前歯も臼歯と同じく上下の歯が噛み合いすり減っていた。(抜歯風習)
9. 石斧、石剣、石棒、石錘のような用途が類推できる道具のほかに、「第2の道具」(精神的物質)よばれる用途不明で、形状や特徴から名付けられた一群の遺物がある。石冠、土版・石板、土弾、御物石器、スタンプ形土製品、青龍刀石器、独鈷石などがある。独鈷石は中央凹に糸を巻き、両端でなにかを鼓打する、季節祭祀に使われた石器と思われる。(高度な石器利用)
10. 茨城県広畑貝塚から大量に出土した文様のない薄手の土器は、縄文時代後期のもので、海水を煮て食塩を作るためのものである。製塩は縄文時代までさかのぼることができる。(製塩)
11. 複数の集落によって、かなりの大規模なドングリ等のアク抜き共同作業場が営まれていた。(藤田、付記)(組織的アク抜き)
12. 丸木舟を作るには、丸太に高温に焼いた石を置き焦がし、炭化した部分を石器で削る。さらに、削った部分で火を焚く。これを繰り返し丸木舟に成型した。また、翡翠に孔を穿つ等の玉造技法があった。(藤田、付記)(玉造)
13. 栗、エゴマ、ヒョウタン、ゴボウ、マメ、陸稻などの栽培跡が見出された。(栽培後)



太鼓のバチか

大宿南原遺跡出土独鈷石

竪穴住居

縄文時代の住居は地面を掘り込んで床を造りました。中央には炉があります。(特別史跡 三内丸山遺跡、Net)



■抜歯した縄文人



●有孔罌付土器 (太鼓か)

多様な土器



■吊り手土器の用途

お守り



足形付土版

子供の足形を写した土版。ひもを通して首からぶら下げ、子供の成長を祈るお守りとして使われたと考えられている。

縄文人のみならず弥生人（海神族、江南からの渡来人）も入れ墨の風習を持っていた

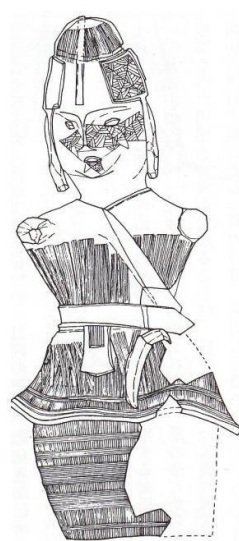
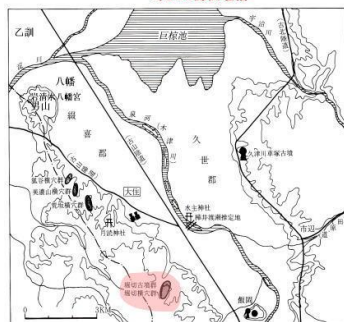
入れ墨

（起源） 入れ墨は比較的簡単な技術であり、野外で植物の棘が刺さったり怪我をしたりした際に、入れ墨と同様の着色が自然に起こることがあるため、体毛の少ない現生人類の誕生以降、比較的早期に発生し普遍的に継承されて来た身体装飾技術と推測されている。古代人の皮膚から入れ墨が確認された例としては、アルプスの氷河から発見された5300年前のアイスマンが有名であり、その体には入れ墨のような文様が見つかった。また、1993年に発掘された2,500年前のアルタイ王女のミイラは、腕の皮膚に施された入れ墨がほぼ完全な形で残されたまま発掘されている。

日本の縄文時代に作成された土偶の表面に見られる文様は、世界的に見ても古い時代の入れ墨を表現したものと考えられており、縄文人と文化的関係が深いとされる蝦夷やアイヌ民族の間に入れ墨文化が存在したため、これも傍証とされる。続く弥生時代にあたる3世紀の倭人（日本列島の住民）について記した『魏志倭人伝』中には、「男子皆黥面文身」との記述があり、黥面とは顔に入れ墨を施すことであり、文身とは身体に入れ墨を施すことであるため、これが現在確認されている日本の入れ墨の最古の記録である。また『魏志倭人伝』と後の『後漢書東夷伝』には、「男子皆黥面文身以其文左右大小別尊之差」（魏志倭人伝）「諸国文身各異或左或右或大或小尊卑有差」（後漢書東夷伝）と、共通した内容の入れ墨に関する記述が存在し、入れ墨の位置や大小によって社会的身分の差を表示していたことや、当時の倭人諸国の間で各々異なった図案の入れ墨が用いられていたことが述べられている。『魏志倭人伝』では、これら倭人の入れ墨に対して、中国大陸の揚子江沿岸地域にあった呉越地方の住民習俗との近似性を見出し、「断髪文身以避蛟龍之害」と、他の生物を威嚇する効果を期待した性質のものとして記している。（入れ墨－Wikipedia）



倭人の顔面埴輪



0 20cm
図44 堀切7号墳（京都）の人物埴輪

左図. 大隈隼人の居住地だった京都府南部綴喜郡大住から出た直孤文を顔と兜に刻んだ埴輪。

隼人には奄美諸島の久米隼人があり、久米族と隼人族がよく似た種族であるかと思える。

『古事記』大久米命とイスケヨリヒメのエピソードで「鯨ける利目（まさけるとめ）」と出てくる。「まさける」は鯨面しているという意味だが、「まるで裂けているかのような模様」とも考えられ、目の周りに×、あるいは上下に湾曲したような刺青か？

（民族学伝承ひろいあげ辞典、Net）



「裂ける利目」



関東・東北縄文人の刺青

土偶・土面にみるハの字状顔面装飾 1. 葦原遺跡（長野）、2,3. 釈迦堂遺跡（山梨）、4. 水遺跡（長野）、5. 三貫地貝塚（福島）

（民族学伝承ひろいあげ辞典、Net）



入れ墨状の文様をもった土偶(Wikipedia)

縄文人は総じて入れ墨の風習をもっていた。また、江南の流れを汲む海神族（大国主を含む）にも入れ墨の風習があった。『魏志倭人伝』にあるように邪馬台国時代の倭人には入れ墨の風習が色濃く残っていた。しかし、南朝鮮の倭人は華北人や朝鮮人（高句麗系）の南下の影響を受け入れ墨の風習がなくなり、北九州の倭人からも入れ墨の風習が薄れた。彼らが東征の中核を担ったため、西日本から徐々に入れ墨の風習がなくなっていった。（藤田）



阿曇族の鯨面

図22 弥生～古墳時代初期の線刻人面画 1. 仙遊遺跡（香川）、2. 亀塚遺跡（愛知）、3. 鹿田遺跡（岡山）

（民族学伝承ひろいあげ辞典、Net）

『古事記』（712年）の神武天皇東征の条に、「大国主命の黥利目」という記述が見られます。この「黥利目」は、別名「裂ける利目（さけるとめ）」（黥ける利目）と言われています。これは「目のまわりに入れ墨（黥）をした鋭い目」という意味なのだそうです。

（Net 大国主命（おおくにぬしのみこと）は刺青メイクを施した元祖ビジュアル系男子だった、Net）

部族の認識に使われたトライバルタトゥー(部族入れ墨)

アイヌ 刺青(入れ墨)

特に知られているのは、成人女性が口の周りに入れる刺青である。髭を模した物であると思われるが、神聖な蛇の口を模したとする説もある。まず年ごろになった女性の口の周りを、ハンノキの皮を煎じた湯で拭い清めて消毒する。ここにマキリ(小刀)の先で細かく傷をつけ、シラカバの樹皮を焚いて取った煤を擦り込む。施術にはかなりの苦痛が伴うため、幾度かに分けて、小刻みに刺青を入れる。

女性の腕や指にかけての刺青は7~8歳になる頃から母親同伴で彫師の元に通いながら婚礼までに少しずつ彫り進めてゆく習慣があった。女性の手指の刺青は家事や裁縫などが上手になって無事に立派な家庭を持つ事が出来るよう、嫁に出す側の親の願いが込められた婚礼道具のような性質のものであった。

また、男性の場合も地域ごとに様々な刺青の習慣があった。ある地域の男性は肩に、有る地域の男性は手の水かきの部分に刺青を入れると弓の腕があがって狩りが上手になるという言い伝えを持っていた。

(Wikipedia抜粋)

琉球、アイヌ、縄文人のトライバルタトゥーの歴史

日本のトライバルタトゥーとしては、ごく近年まで習俗としてそれが行われていた琉球(沖縄)とアイヌ(北海道)の記録を挙げる事ができます。琉球では女性の手の甲と指に施されていたものが主流ですが、その中の宮古島では前腕部の記録も残っています。特に宮古島のパターンはサモア、フィリピンなどの南洋諸島の女性のものとの強い類似性をもっています。アイヌの場合はこれもやはり女性なのですが、前腕、手の甲、眉、口の周辺に彫っていました。アイヌの施術法は世界のトライバルタトゥーの中でも珍しい部類に入る、カミソリなどの刃で皮膚を切り裂き、その傷に煤を擦り込むというものでしたが、これには北海道が切れ味抜群の良質の黒曜石の産地であったことが関わっているような気がします。また口のまわりに施すパターンは台湾のアタヤル族女性のそれとよく似ています。

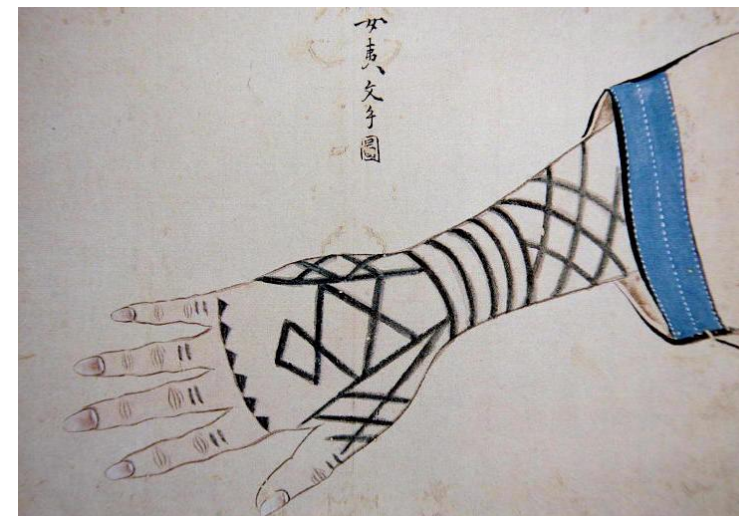
琉球、アイヌともにタトゥーの意味としては、呪術的側面としては死後の旅立ちをサポートするもの、社会的側面としては結婚可能な女性であることの信号、同族外の男にさらわれないためのガードなどの理由づけがなされていましたが、対象者が女性ということもあり、やはり何と言ってもファッションとしての力がその存在意義だったようです。どちらの地域でもかつては男女とも施術していたようなので、近年の資料に残された状況は、明治政府による禁止令という出来事以前に、すでにその文化が消え行こうとしている最後の灯火だったのかもしれない。

全盛期の縄文時代に土器や土偶と同じ模様がトライバルタトゥーとして人々の肌を飾っていたと考えるのはいたって自然でしょう。この渦巻きとまともに向き合っていたこの一年で僕はある感覚を抱くようになりました。これは蛇である。神のレベルにまで昇華された世界蛇(龍)であり、抽象化された生命力のシンボルとしての蛇である、という感覚。北方においてはその形状や動きがデザインとなり、南方では煌びやかな毒蛇が多いためにその皮膚の柄がモチーフとなっているんじゃないだろうか、という見方です。このようなアングルでカムチャッカ半島からインドネシアまでを俯瞰すると新しい地図が見えてきます。渦巻きの模様ばかりに目が行きがちな縄文パターンですが、直線的な線彫刻の連続パターン、いわゆる線刻も見落としてはならない要素だと思いますね。これらは縄文に特徴的なものではなく世界中のあらゆる地域であらゆる物に対して普遍的に使われているデザインなのですが、それゆえにタトゥーの柄としてもとても普遍的なのです。実際、原始的な道具で彫っていくプロセスを考えるとただの点表現の次に可能となるのは線表現なわけですし、そこから面の表現となるまでの間にはそれなりの道具の進化が無ければ効率が悪く隔たりがあるんです。だからこれらの線刻のデザインは実際の当時のタトゥーの主立った構成要素でもあったと感じているんです。

(Tribal tattoo, Net)



(Indigenous Body Adornment Ainu Tattoo, Net)



(Wikipedia)

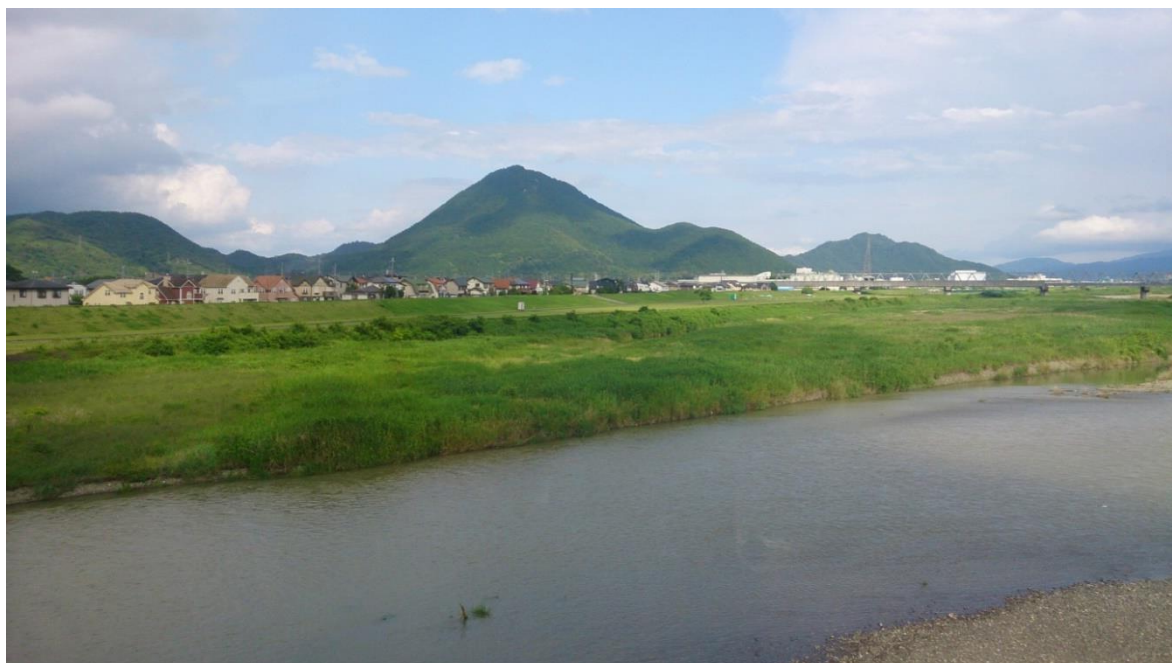
日本人はY染色体D2型の集積が高く、アイヌと琉球に特に高い。従って、縄文人はD2型であったと思われる。鬼界カルデラ噴火に際し一部の縄文人は琉球に逃げた。また、縄文後期の寒冷期に原アイヌ人(蝦夷)が西日本にも進出し一部は琉球にまで至ったと思われる。さらに元寇の頃九州の縄文人の子孫が琉球に移住した。かくして、縄文人、アイヌ、琉球に類似のトライバルタトゥーが江戸時代まで残った。(藤田)



近江と伊勢で最古(1万年以上前)の土偶が出土

縄文ビーナスと三上山

このビーナスは、もちろん単なる飾りではありません。京都大学の泉拓良教授によれば、「乳房を強調した土偶は、定住を始めた人々が豊饒や命の再生への願いを込めたのだろう」とのこと、縄文草創期(1万3千年前)。この遺跡と同じ湖南地区には、滋賀の座標軸とも呼ばれる三上山(御神山)がそびえています。
(縄文ビーナスと三上山、Net)



三上山と野洲川 (2015-06-21. 東海道本線車窓より、撮影)



三重県飯南郡飯南町の粥(かゆ)見井尻遺跡から日本最古とみられる縄文時代草創期前半(約1万2千年-1万1千年前)の土偶が出土した。(Hisao Kotoguchi (土木史)、Net)



1万年以上前の石に線刻「縄文のビーナス」の一種か 鹿児島・牧野遺跡

鹿児島県南九州市の牧野遺跡で、線刻を施して女性を表現したとみられる約1万3500年前(縄文時代草創期)のこぶし大の石が見つかり、県立埋蔵文化財センターが27日発表した。子孫繁栄などを願って作られた「縄文のビーナス」の一種とされ、同時期としては国内3例目。

見つかった石は長さ5.5センチ、幅4.8センチ、厚さ4.1センチで安山岩製。全体に刻まれた縦や斜め方向の線が、女性の髪を表しているとされる。同じぐらいの大きさの石約1600個が詰め込まれた円形の穴(直径2メートル、深さ30センチ)の中から見つかった。同センターの堂込秀人所長は「特殊な遺構から出土している。祭祀(さいし)との関連も考えられ、縄文時代の精神文化を知る貴重な史料だ」と話した。

線刻を施した同種の石は、愛媛県の上黒岩遺跡や鹿児島市の掃除山遺跡で見つかっている。

(産経新聞 2017.11/27)



土偶

縄文の豊饒を祈る多様な造形

土偶(どぐう)は、人間(特に女性)を模して、あるいは精霊を表現して作られたと考えられる土製品で、日本では、縄文時代に沖縄県を除く地域で製作された。世界的には、こうした土製品は、新石器時代の農耕社会において、乳房や臀部を誇張した女性像が多いことから、通常は、農作物の豊饒を祈る地母神崇拜のための人形と解釈されることが多い。

現存する日本最古の土偶は、滋賀県や三重県で出土した縄文草創期のものである。早期には近畿、関東東部に広がっている。中期終わりには、東北地方を除いてほとんど作られなくなるが、後期には東日本を中心に復興する。九州においては、熊本を中心に後期のものが出土している。弥生時代にはほとんど作られなくなる。

国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)の調査によれば、日本全国の出土総数は15,000体ほどである。武藤、豊田は18,000点程度としている。出土分布は東日本に偏っており、西日本での出土はまれである。千葉県佐倉市にある吉見台遺跡からは、600個以上の土偶が出土している。

現在までに出土している土偶は大半が何らかの形で破損しており、故意に壊したと思われるものも多い。特に、脚部の一方のみを故意に壊した例が多い。そのため、祭祀などの際に破壊し、災厄などをはらうことを目的に製造されたという説がある。また、大半の土偶は人体を大きくデフォルメして表し、特に女性の生殖機能を強調していることから、多産、安産などを祈る意味合いがあったものと推定する説もある。その他、用途としては生命の再生、神像、女神像、精霊、護符、呪物などの多様な説があり、子供の玩具やお守りだった、身体の悪い所を破壊することで快癒を祈った、ばらばらになるまで粉碎された土偶は、それを大地にばら蒔くことで豊穡を願ったのではないかなどとする説もある。(土偶の祭りは日差しのもっとも弱くなる冬至ころに行われた。)

出現 最も古い土偶は、滋賀県東近江市の相谷熊原遺跡で縄文時代草創期(約1万3000年前)の土偶1点がほぼ完全な形で見つかった(前述)。また三重県松阪市飯南町粥見井尻(かゆみいじり)遺跡で見つかった縄文時代草創期(約1万2,000年~1万1,000年前)のもの2点がある。後者は小形でやや厚みのある板状のもので、頭部と両腕を突起で表現しており、顔や手足の表現がないが、乳房は明瞭に表現されている。早期前半、関東地方東部に逆三角形や胴部中程がくびれた形の土偶が出現し、早期後半には東海地方にまでその分布が広がり、それぞれが明確な土偶形式を形成している。前期は、この延長線上で板状土偶が発達した。しかし、この段階の線刻礫や土偶が、実際にどのような目的で造形されたのかは分かっていない。

立像土偶 中期初頭になって、土偶が立体的になり、四肢・頭部の表現をはっきりさせ、しかも土偶自体が自立できるようになる。この造形変化は、縄文全時期を通じて土偶の変化の内最も大きな変化であった。しかし、突然変化したのではなく、前期後半には顔の表情豊かな土偶が現れていた。現在最も古い表情豊かな土偶は前期前半の千葉県石揚遺跡出土で、扁平・円形の頭部に2~6個の丸い孔があげられている。同じような表情豊かな土偶は、東海地方から関東地方までの東日本で現れ、当時の土器形式圏を越えた広い範囲に分布している。それが前期末葉になって、新たな変化は東北地方で現れはじめる。前期後葉の宮城県糠塚遺跡の土偶に始まる。それは両目・口の表現の獲得である。それ以降は、東北地方南部に分布する土偶から、顔面の表現が次第にはっきり形作られてゆき、北陸地方や中部高地地方に広がっていき、中期初頭には「立像土偶」へと移りはじめ、胴部が板状、頭部が円盤状、正面に目・鼻・口が添えられる程度であるが、短期間に立体化し、自立可能な立像を完成させた。長野県棚畑遺跡出土の「縄文のビーナス」はその到達点である。この急速な変化は、土偶が子孫繁栄、安産祈願、祭祀等の個人レベルの目的に造られてきたのに対して、村落共同体レベルでの祭祀に使われるようになったと考えられる。つまり、土偶はこの中期前葉に、縄文社会に定着した。

後期にはハート型土偶が現れる。後期から晩期にかけて、関東から東北地方では、山形土偶やミズク土偶、遮光器土偶などが大量に造られる。また仮面を被ったもの(仮面土偶)なども見られる。九州を除く西日本では人型土偶はまれで、簡略で扁平な分銅形土偶などが多い。(土偶-Wikipedia抜粋)



土偶(通称「縄文のビーナス」)
縄文中期の代表的な土偶。長
野県棚畑遺跡出土(国宝)



土偶(中空土偶)(複製)
北海道著保内野遺跡(国
宝)



合掌土偶(青森県風張1遺跡)(国宝)



「仮面の女神」土偶
(茅野市の中ツ原遺跡)国宝

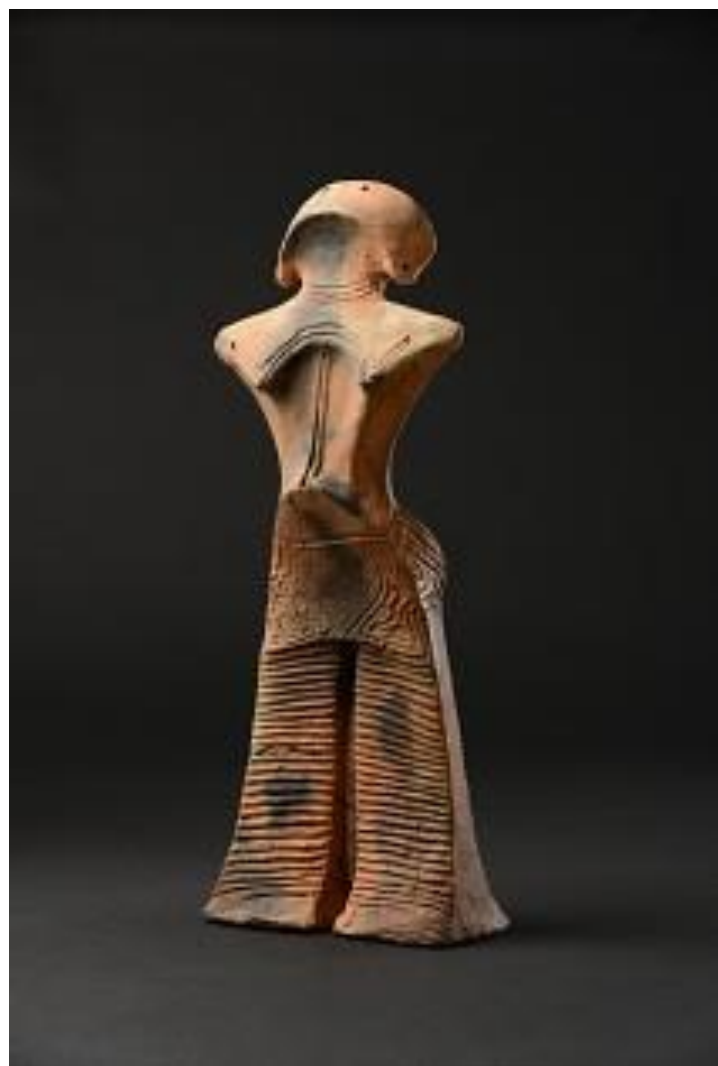


土偶頭部(岩手県繋萩内遺跡)



遮光器土偶(宮城県恵比寿田遺跡)

縄文の女神(山形県舟形町西ノ前遺跡出土土偶) 高い芸術性を備えた秀逸の造形美



縄文の女神(正面左向き)



縄文の女神(左側面)



縄文の女神(背面右向き)

国宝「縄文の女神」

縄文の女神は、高さ45cmと見つかった完形土偶の中で最も大きい土偶です。重さは3.155kgとちょうど新生児の重さと同程度です。頭部は半円形に丸くなり、複数の孔(あな)が開けられています。眼・鼻・口の表現がないのが特徴です。W字のシャープな胸、尖ったような腹、どの部分も洗練された形をしています。また、お尻は後ろに突き出ており、その形から「出尻形土偶(でっちりがたどぐう)」と呼ばれています。すそ広がり脚の底面は少しえぐって、焼むらを抑えようとしています。

(国宝縄文の女神—山形県立博物館、Net)

石棒は男性器を象徴。岩偶は呪術に使用か

石棒

縄文時代、石は刃物や、食料を加工するための道具などとして加工され、利用されました。一方で男性器をかたどった石棒など、信仰やマツリに関する「道具」も作られました。

石棒は、縄文時代中期から後期にかけて多く作られ、住居の中の炉の縁や壁際などに立てられたほか、ムラの中の特定の場所に置かれて、豊かな恵みを得るための祭祀や儀礼が行われたと考えられています。

(縄文時代の石棒祭祀－諏訪市、NET)

注)縄文時代、土偶は女性あるいは女性器を象徴するものが多いが、石棒は男性器を象徴する。



(縄文時代の石棒祭祀－諏訪市、Net)



(千葉市加曾利貝塚)



熊本県多良木町黒肥地の追の原遺跡から出土した、約8千年前（縄文時代早期後半）に作られた最古の岩偶(多良木町教育委員会提供)

岩偶(がんぐう) やわらかい凝灰岩【ぎょうかいがん】質の泥岩でつくった人形である。簡単な頭部と肩があり、その下に腕を表現したかと思わせるような造形がある。顔はないが、手を胸に当てがったような恰好の方がふくらみもち、前面であろうか。各処に製作時の擦痕がある。

岩版 岩偶と同じ石材である。梯形に形を仕上げ、上の方に二つの孔をあけている。扁平な両面には、一方は鋸歯状に、他面はX状に小さな列点文がつけられている。

岩偶、岩版は共に縄文時代の信仰に関係のある遺物で、前者は呪術【じゆじゆつ】のようなことに、後者は護符【ごふ】として用いられたものであろう。(岩偶とは - コトバンクNet)



「笑う岩偶」縄文時代の後・晩期。儀式、祭祀のためとも言われるが、何のために造ったかわからない。秋田県北秋田市蔵(11月19日、安中市「ふるさと学習館」のストーン・ツールズ」企画展で、矢本真人撮影)

磐笛(岩笛・石笛) 縄文を象徴する吹奏祭具

岩笛そのものは、縄文期の遺跡から数多く出土しております。鳥取県の目久美遺跡から発掘された縄文前期の岩笛、千葉県曽谷貝塚からは翡翠製の岩笛(縄文中期・國學院蔵)、東京国分寺で見つかった同じく翡翠の岩笛(縄文中期)、石川県真脇遺跡、北海道日高地方、函館・谷地頭遺跡、岐阜県東乙原遺跡(いずれも縄文中期)等々、各地から発見されています。岩笛が人工的に穿孔されたもの、自然の穴のもの、自然の穴に加工を施したものなど、色々な形と材質のものがみついています。

しかし、奇妙なことに、縄文のあとの弥生期にも岩笛は存在していると想像されますが、この時代の出土品の中には、ほとんど記録に残っていないそうです。中西 旭先生は、岩笛が縄文時代“心霊降臨の齋場で鳴らされたものであろう”と請われておりますが、まさに岩笛は、縄文を象徴する吹奏祭具であったものと思われれます。

(NPO法人「につぼん文明研究所」、Net)



穿孔した石笛(糸魚川原石)
(NPO法人「につぼん文明研究所」、Net)

縄文尺と堀立柱建物 縄文尺は殷尺か (日本の巨大木造建築の尺度に繋がる?)

歴史的には縄文時代前期に出現し、青森県青森市の三内丸山遺跡や秋田県大館市の池内遺跡など拠点集落の中心的な建物に用いた。ことに三内丸山遺跡の巨大な木柱による六本柱の建物は有名である。径1mのクリ材もさることながら、柱穴の間隔、幅、深さがそれぞれ4.2m、2m、2mで全て一致することも重要である。特に「4.2m間隔」の柱穴は他の縄文遺跡でも確認されており「縄文尺」とでもいうべき共通の尺度が広汎に使用されていたのではないかと考えられるまでになった。(栃木県古宿遺跡、根古屋台遺跡、秋田県杉沢台遺跡、青森県近野遺跡岐阜県下田遺跡などなど、東日本で発掘された大型住居跡の大半に適用できることがわかりました。)この六本柱の建物は祭壇や見張り台のような施設ではなかったかと推定されている。(堀立柱建物—Wikipedia抜粋)

この縄文尺(35センチメートル)の存在は当時既に測量の技術が備わっていたことを示すものであり、ここに住んでいた人々が当時としては高度な技術的水準に達していたことを示すものである。特に4.2メートルというのは35センチメートルの倍数であり、35センチメートルの単位は他の遺跡でも確認されているので「縄文尺」ともいうべき当時のものさしとして何らかの技術の共有をしていた可能性が考えられている。柱本体にも腐食を防ぐため周囲を焦がすという技術を使っており、腐食を長い間防いだ一因となっている。(三内丸山遺跡—Wikipedia抜粋)

縄文尺度の存在は、奈良の法隆寺や東大寺の技術的基礎は縄文時代から育まれていたことを示すのではないかと。縄文尺度は中国の新石器時代の尺度(17.4cm、縄文尺の半分、下参照)やエジプトのピラミッド建築の際の王室キュービット(52.4cm、縄文尺の半分の3倍)と関連があるのではないかと。

縄文尺について、岩田重雄さんという方は、中国の新石器時代の平均値が十七・四cmで、これが日本へ入ってきて、このような尺度が生まれたのではないかと述べています。それを受けて藤田富士夫さんも、そうに違いないと。当時、中国の新石器から殷にかけて、尺度が用いられているものだから、殷尺であろうとおっしゃっています。(メソポタミア起源?)三十五cmの単位は人であると、中指の先端から肘である可能性はありますが、どこでも同じように三十五cmという決まった数値でものさしを決めていくというのは、やはり伝播していった可能性が高いです。

(国際縄文学協会 (IJCC)、Net)



三内丸山遺跡の堀立柱建物(堀立柱建物—Wikipedia)

ウッドサークル 縄文の巨木文化は諏訪の御柱祭や出雲大社の巨大柱に通じる

真脇遺跡

真脇遺跡(まわきいせき)は、石川県鳳珠郡能登町字真脇にある縄文時代前期から晩期にいたる集落跡の遺跡である。真脇遺跡は能登半島の先端から少し内海に入ったところにある入江の奥に位置する。用水路工事に伴う1982-83年にかけて行われた発掘調査により発見された。遺跡は入江奥の沖積低地の包含層の、最近の水田の土地の約1メートル下にあつて、そこから約3メートル下に亘って遺跡の含まれる層が年代順に層を成していた。そこから発掘される史料なども豊富であるため、「考古学の教科書」などとも呼ばれる。約6000年前から約2000年前まで、採集・漁撈の生活を営む集落があったものと考えられている。発掘で出土した厚く堆積した300体を超える大量のイルカの骨や、長さ2.5メートルもある巨大な彫刻柱、土偶、埋葬人骨、厳つい風貌の土面は後期に属する日本最古の仮面、整然とした地層などが話題を呼んだ。

この遺跡に住んでいた人々はイルカ漁を盛んに行ったらしく、大量のイルカの骨が発掘されている(特に前期中期にかけて多く見られる)。イルカの骨には石器の鏃や槍が残っていて、獲ったイルカは食用に供せられるほか、骨を再利用したり、油を採ったりされた。また、イルカは、この土地だけでなく他地域との交易に使われたと考えられる。船は出土しなかったが、船の櫂(ヤチダモ材)が出土している。さらに中部山岳地帯や東北地方からの土器や玉が出土していることから分かる。

遺跡最晩期の地層からは円状に並べられたクリ材の半円柱が発掘された。10本の柱で囲んだと思われる直径7.4メートルの環状木柱列で、各々の柱を半分に割り、丸い方を円の内側に向けている。その太さは直径80～96センチもある。小さな環状木柱列もあり、これらは何度も立て替えられたと考えられる。同じ石川県金沢市で先に確認されたチカモリ遺跡の環状木柱列(ウッド・サークル)と良く似ており、注目されている。このような巨木を用いた建物や構築物は巨木文化と呼ばれ、日本海沿岸から中央高地にかけていくつか確認されている(新潟県糸魚川市の寺地遺跡、富山市古沢の古沢A遺跡、長野県原村の阿久遺跡など)。

遺跡は、1989年に国の史跡に指定された。また出土品のうち保存状態の良好なもの219点が1991年国の重要文化財(考古資料)に指定された。
(真脇遺跡—Wikipedia抜粋)



満点の星空の下、たたずむ縄文遺跡「真脇遺跡」の復元された「環状木柱列」=石川県能登町で、川平愛撮影(りらくフォト 毎日新聞)



チカモリ遺跡公園の環状木柱列復元模型

チカモリ遺跡

本遺跡は犀川の造り出した扇状地にあり、地下水が豊富にあるため木製品や植物製品が残されていた。1954年から数回にわたり発掘調査が行われたが1980年の調査の際に掘立柱の環状木柱列(ウッドサークル)が発見された。その後の調査で、直径30から85センチメートルの巨木柱の下部部分(柱根)が総計347点も見られ、円を描くように配置されている。それら木柱の多くは縦に半分に割られ、断面がカマボコ形になっているものやU字形になっている。加工されていないものは少ない。堅いクリ材であり、運搬に便利に半截してあり、目途孔を開けている。

これら木柱のうち直径50センチ以上の23本の巨大な木柱は、集落の中央広場付近に8～10本が組みになって、直径6～8メートルの円形に規則正しく並べて立てられ、出入り口が付いている。円形遺構、正方形遺構、長方形遺構の三タイプに分けられる。これらのタイプが近接したり、重複したりしている。柱根だけが残っているので本来の長さは分からないし、どのような建築物であったかも分からない。しかし、柱の太さからいって普通の住居ではなかったことは推測できる。

これら、木柱根の出土が縄文時代の遺跡の中で極めて多く巨木文化の存在が考えられる。祭祀施設と想定されている。

(チカモリ遺跡—Wikipedia抜粋)

日本海文化圏の特徴の一つ:巨木を立てる

能登半島の真脇遺跡、金沢市のチカモリ遺跡、糸魚川市の寺地遺跡などの縄文時代後期の遺跡には巨木を建てる特徴がある。その流れを受けたものが、金輪による三本柱(三本の巨木を鉄の輪で一本に束ねた柱)で有名になった出雲大社の巨大神殿に影響を与えているのではないかと指摘もある。(風土記の世界、三浦)

ストーンサークル 墓地か祭祀跡か

環状列石は、長径30 - 40メートルの隅丸方形に配石した遺構である。一番外側に、二重・三重に川原石を環に並べた「外帯」と、多くの場合、その中心に「内帯」がある。「内帯」の内側は、直径5メートル内外の方形または円形の広場ができています。これらの配石の下に墓穴があったり、石列の間に土器棺があることが多い。そして、環になっている石の一部が途切れ、幅2 - 3メートルの通路ができ、両側に石が並び外に続いている。

以上のような環状列石が、日本においては、現在までに主に青森県と秋田県北部、北海道では渡島半島を中心に道北を除く道内各地に検出されている。血縁・地縁をもった氏族の連合が40 - 50キロメートルほどの距離をおいた領域を占有し、その中心に祭の場を築造したのではないかと考えられている。この遺跡が日本ではじめて公表されたのは1886年(明治19年)小樽市の忍路環状列石である。

東北地方から北海道にかけてのストーンサークルは縄文時代中期後半から後期にかけて作られている。大きさは直径30メートル以上のものと直径10メートル以下のものがあり、大きいものは祭祀の場として作られ、小さいものは竪穴住居の周囲に石を置いたものが多い。直径が30メートル以上のものは、まず縄文時代中期の終わりごろに現在の静岡県、山梨県、群馬県付近で作られる。続いて縄文時代の後期前半に秋田県北部や青森県、北海道西南部で作られる。同じころ、岩手県では石を直線状や弧状に並べるものが作られている。

配石遺構は、縄文中期後半から後期になると各地で築造され、日本各地で発見例が増えてきている。現在までのところ最も古いと考えられているのは長野県諏訪郡原村にある阿久遺跡の配石で、縄文時代前期のものと推定されている。ドルメンが多いが、大分県には人間の背丈ほどのメンヒルを環状に並べた佐田京石がある。

(Wikipedia抜粋)



秋田県鹿角市十和田 大湯環状列石



秋田県北秋田市森吉地区にある深渡(ふかわたり)遺跡の小型ストーンサークル。使わなくなった竪穴住居の周囲に石を置き祭祀を行った跡

縄文時代の稲作 江南から渡来した熱帯ジャポニカ(陸稲)の畑作

縄文時代の稲作

縄文の早期～中期にヒプシサーマル(気候的最適期)と呼ばれる時代があった。6500年前から4000年前のことである。その当時の気温は現在より、東日本で2度、西日本で1.5度ほど高かった。その温度上昇は海水面を現在より2～3mから4m押し上げていたといわれる。当然のことながら、たとえば関東平野などでは、海水が栃木県上都賀郡藤岡町のような内陸まで侵入した。これは「縄文海進」と呼ばれている。その様子は貝塚遺跡が数多く内陸に分布していることから実証される。この時代、縄文文化は最盛期を迎える。三内丸山の大規模集落があったのもこの時期であったし、八ヶ岳山麓に環状集落が繁栄したのもこの時期であった。しかし、4000年前ごろから徐々に冷涼化が始まり、縄文文化の繁栄にも陰りが見えてくる。それはまた、次の時代・水田稲作を迎える序章の始まりとも言えるのである。

プラントオパール分析法

ある年配以上の方々には子供のころ、野原や川辺でススキの穂を採ろうとして、剥き出しの腕や足の脛などを鋭利な刃(葉)でスッパリ斬られた経験をお持ちだろう。これが所謂プラントオパールと呼ばれる物質の仕業だった。ススキをはじめ、イネ、ムギ、キビ、トウモロコシなどのイネ科植物は吸い上げた水分の中の珪酸という物質を、機動細胞という細胞に蓄積する性質がある。機動細胞に溜まった珪酸は細胞内で一つの固まり、珪酸体となる。イネ科植物が枯れたとき、有機物は分解されて土に還るが珪酸体はガラス質であるため腐ることなく、そのまま1万年でも土の中に残留することになる。その珪酸体というガラス成分が掘り出されたものがプラントオパールと呼ばれるものである。プラントオパールは植物の種類によってその形状が違う。事前にその形状を把握していれば、遺跡などから出たプラントオパールがどういう植物に由来するものか分かるわけである。

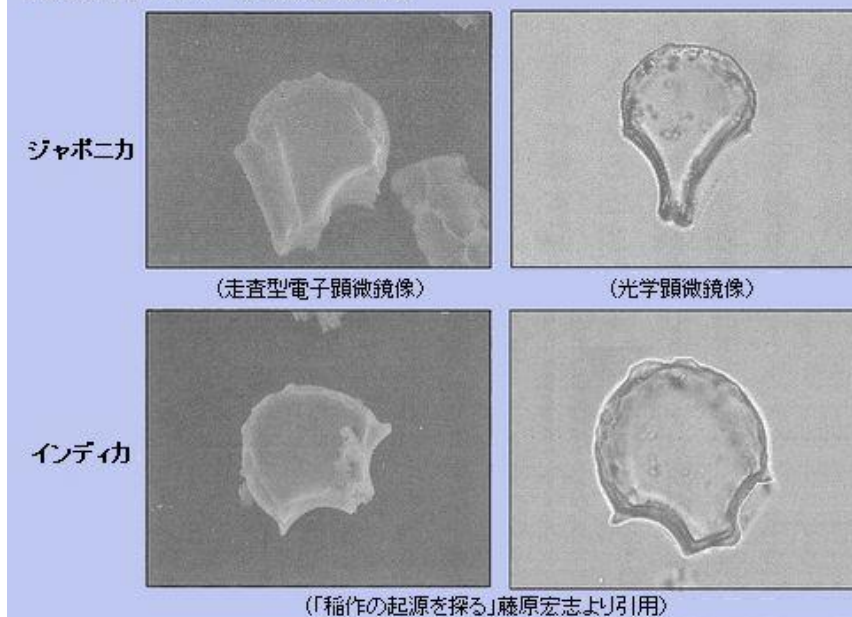
土中から検出されるプラントオパールを定性的に或いは定量的に分析して、その植物の属や種を特定したり、野生か栽培かなどを判別する所謂「プラントオパール分析法」を確立したのが、農学者 藤原宏志である。藤原の著書「稲作の起源を探る」から引用した右のイネのプラントオパールの顕微鏡写真をみると、イネのジャポニカとインディカの違いがよく判別出来る。このプラントオパール分析法が開発されることによって、栽培や農耕の遺跡が発掘されなくとも、米粒や籾殻が検出されなくとも、イネのプラントオパールが認められれば稲作の可能性を考えることが出来るようになった。しかも炭化米や籾殻、籾痕などが検出されても、他所から持ち込まれたのではないかという疑いが拭えないが、プラントオパールは葉や茎がなければ発生しないものであるので、多量のプラントオパールが検出できれば、少なくともそこにイネが生育していたと考えてよいのである。このプラントオパール分析法の開発によって日本列島に於ける古代イネの研究は急速に進むことになった。1999年時点でプラントオパールが出土した遺跡は、農学者佐藤洋一郎によれば右の31例に及んでいる。さらにその後、2005年2月には、岡山県の灘崎町にある彦崎貝塚の縄文時代前期(約6000年前)の地層から、イネのプラントオパールが大量に見つかった。その量は土1gあたりプラントオパール2000～3000個という大量のもので、上表の縄文前期の遺跡・朝寝鼻貝塚の数千倍の規模である。これはただ単にイネが何らか理由で持ち込まれたという規模ではなく、まさに栽培されていたというレベルである。右の写真から判別すると、イチョウの葉状の形からジャポニカ米の系統と見られる。

今後縄文稲作の年代はもっと遡る可能性があるが、現在最も古い朝寝鼻貝塚の6400年前という年代測定が正しければ世界最古級の稲作遺跡である河姆渡遺跡からわずか600年でこの列島に伝播したことになる。稲作は弥生時代から、せいぜい譲っても縄文晩期後半からという従来からの定説に相変わらず固執する学者もいるが、以上のように各地でプラントオパールが検出され、かつ大量出土する遺跡が現れてくれば、縄文稲作の存在自体を否定することはもはや出来ないであろう。

プラントオパールの検出状況からみるとかなり活発な稲作が推測できるのに、不思議なことに考古学的な直接的証拠、たとえば耕作の跡やそれに使う道具類が出てこないという不可思議な現象がある。これは何故だろうか。縄文の稲作が低湿地での水田ではなく、低湿地での灌漑を伴わない粗放稲作や、やや高い台地のようなどころでの焼畑のような稲作であったとすると、これからも畔(あぜ)のような遺構はもとより、鍬(くわ)などの道具も出土することは期待できないと言わねばならない。何故なら焼畑や粗放農耕なら、種粒を入れる穴を掘る道具、すなわち棒杭1本でこと足りるからである。縄文の稲作がプラントオパールなどの状況証拠ばかりが出て、耕作跡などが出てこない原因が、このようにかなりの確度を持って推察できた今、筆者には“縄文稲作”を否定する理由はなくなったように感じられる。

(日本人の起源、伊藤)

イネのプラントオパールの顕微鏡写真



(日本人の起源、伊藤)

縄文時代のイネのプラントオパールの出土地
(縄文時代晩期後半を除く)

時期	遺跡	所在地	ブロック
1 前期	朝寝鼻貝塚	岡山市津島東	岡山ブロック
2 中期	古閑原貝塚	熊本県玉名郡岱名町	有明海ブロック
3	鹿児島大学構内	鹿児島市郡元	その他地域
4	姫笠原	岡山県真庭郡美甘村	岡山ブロック
5	矢部貝塚	倉敷市矢部	岡山ブロック
6	福田貝塚	倉敷市福田古城	岡山ブロック
7	長縄手	備前市西片上	岡山ブロック
8 後期	大野原	甘木市小田	有明海ブロック
9	法華原	福岡県浮羽郡吉井町	有明海ブロック
10	南溝手	総社市南溝手	有明海ブロック
11	津島岡大構内	岡山市津島	岡山ブロック
12	福田貝塚	倉敷市福田古城	岡山ブロック
13	浜島	福井市浜島町	その他地域
14	風張	八戸市是川	その他地域
15 後・晩期	四箇東	福岡市早良区	有明海ブロック
16	東鍋田	山鹿市鍋田	有明海ブロック
17	ワケ石	熊本県菊池郡大津町	有明海ブロック
18	上東	倉敷市上東	岡山ブロック
19 晩期前半	長行	北九州市小倉南区	有明海ブロック
20	板付	福岡市博多区	有明海ブロック
21	天城	菊池市赤星	有明海ブロック
22	小原下	長崎県南高来郡有明町	有明海ブロック
23	筏	長崎県南高来郡国見町	有明海ブロック
24	百花台	長崎県南高来郡国見町	有明海ブロック
25	磯石原	島原市磯石原町	有明海ブロック
26	ワケ石	熊本県菊池郡大津町	有明海ブロック
27	上南部	熊本市上南部	有明海ブロック
28	上ノ原	熊本市健軍町	有明海ブロック
29	大石	大分県大野郡緒方町	有明海ブロック
30	恵良原	大分県直入郡萩町	有明海ブロック
31	諫良郡条理	福岡県直入郡萩町	有明海ブロック

(外山典一さん作成の表(1999年)に加筆)

佐藤洋一郎氏引用

(日本人の起源、伊藤)

縄文イネの品種：熱帯ジャポニカ

縄文稲作が畑作系のそれも焼畑を活用する稲作だったとすると、そこではどんな品種のイネが栽培されていたのだろうか。ジャポニカとインディカと二種類に分類してきたが、実はジャポニカは近縁ではあるが、さらに温帯型と熱帯型に分類され、その位置関係は右図のようなイメージで藤原宏志は「稲作の起源を探る」で「宮崎県えびの市の桑田遺跡で縄文晩期の層からイネのプラントオパールが検出され、その形状解析から熱帯型ジャポニカである可能性が高いことがわかった。水田稲作の伝来以前にイネが存在していたとすれば、やはり、焼畑など畑作系譜の稲作を想定する以外にないとわたしは思う。水田稲作にともなう栽培イネが温帯型ジャポニカであるのに対し、畑作系のイネは熱帯型ジャポニカが多く、しかもこれが縄文時代のイネに多い。」と述べている。また佐藤洋一郎も「DNAが語る稲作文明」のなかで「最近では、縄文土器の胎土から稲のプラントオパールが検出されているが、これも多くは熱帯ジャポニカの稲由来のものであると言われている。---ごく端的に表現するなら、温帯ジャポニカが水田稲作を代表とする集約的な稲作に支えられた稲。熱帯ジャポニカは焼畑を代表とする粗放な稲作に支えられた稲である。---熱帯ジャポニカは縄文時代に西日本に伝わり、粗放な稲作に支えられていたと考えられる。」と、藤原も佐藤も縄文のイネは熱帯ジャポニカであったと述べている。

縄文の稲作の品種が熱帯ジャポニカであったことはまず間違いのないらしい。ジャポニカのプラントオパールの写真は熱帯ジャポニカのそれであったことになる。

稲作の起源説の変遷

アッサムー雲南起源説の隆盛の中、文化大革命による考古学者受難の中、この河姆渡遺跡の発掘は細々とつづけられ、1986年北京農業大学の王在徳によって発掘成果が発表された。その論文に出てくる地図はおおよそ次のようなものである。この地図を見ると稲作は7000~8000年前に長江中流域で発生し、一度下流に伝播して、その後、逆に下流から中流へ遡るように広がり、3000年前くらいに今の中国の稲作地帯のほぼ全体に及ぶようになった。(アッサムー)雲南センターへはほぼ最終期に近い時期に広がった、と従来のアッサムー雲南起源説(雲南を起源として稲作は長江を下るように広がる)とは逆の仮説を王在徳が展開していることが分かる。そして、いまや稲作の起源は長江中・下流説が主流になっており、それはさらに発展して中国の文明は黄河文明に先立って「長江文明」があったという議論にまで発展している。

熱帯ジャポニカの起源

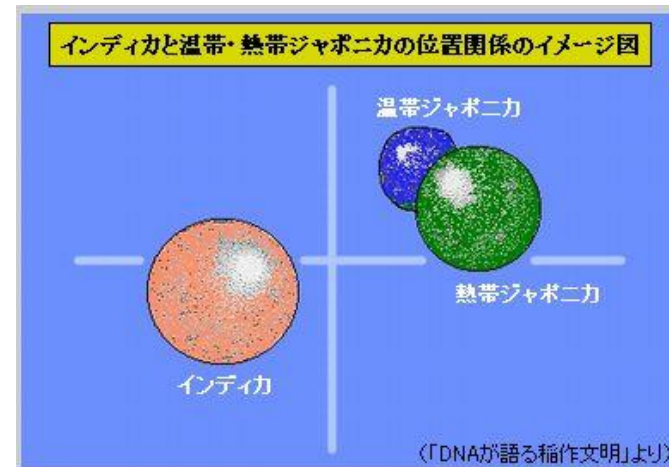
先に縄文イネは熱帯ジャポニカであったとした。それでは温帯ジャポニカと熱帯ジャポニカはどう違うのか、稲作の起源とどう関係するのかが問題となる。

まず次の図を見ていただきたい。これをみると、熱帯ジャポニカが粗放な作業で収穫が得られる品種であることが大体想像できる。おそらく、ごく少数の人々が何処に漂着するか分からないような遠洋航海に出るような場合、当然最低限の運搬物しか持って移動できないであったろうし、そして遠方の土地の地味や気候が分からないような場合、選ばれたのは当然「熱帯ジャポニカ」であったに違いない。したがって縄文のイネが熱帯ジャポニカであっても、何ら不思議ではないし、むしろ当然と言っていい。

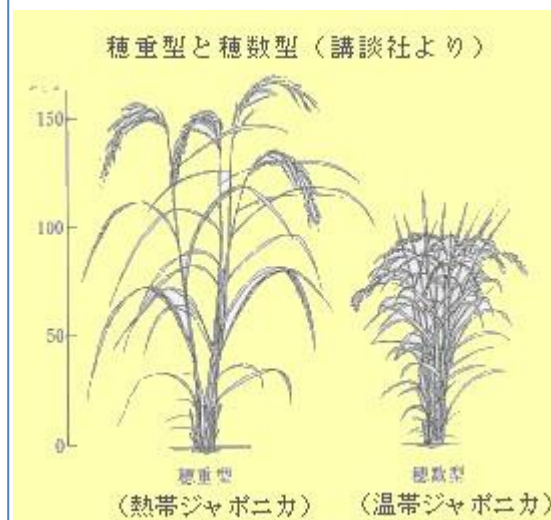
イネの長江起源説とはどういう関係にあったのか。佐藤洋一郎は、「日本人はるかな旅4」の「DNAからみたイネの道」という一節(p120)で、---私の研究グループでは長江中・下流域のいくつかの遺跡から出土した炭化米からDNAを取り出してみた。すると面白いことに分析した全て(20粒)がジャポニカに属することがわかった。長江流域はジャポニカの起源地であったのである。...DNA分析を進めたところ、この20粒ほどのうち2粒(ともに河姆渡遺跡)は熱帯ジャポニカであった。残りは、分析の未熟さのためか温帯ジャポニカとも熱帯ジャポニカとも区別できなかった。---と記述している。「長江のイネがジャポニカであることははっきりしている。しかし温帯ジャポニカか熱帯ジャポニカかは今のところわからない。」としていた「DNAが語る稲作文明」の記述から一歩も二歩も踏み出している。すなわち、少なくとも河姆渡遺跡では、「熱帯ジャポニカのイネも」栽培されていたのである。この事実は大変大きな意味を持つ。

- 1.もともと温帯ジャポニカと熱帯ジャポニカは遺伝的に非常に近い関係にある。したがって両者が同じ地域で起源した可能性が強いということは、極めてノーマルな結論と言ってよい。
- 2.長江中・下流域、江南地方で熱帯ジャポニカが栽培されていたことにより、日本列島への伝播ルートに無理な設定をする必要がなくなった。

(日本人の起源、伊藤)



(日本人の起源、伊藤)



(日本人の起源、伊藤)

縄文時代のお米は「熱帯ジャポニカ」という種類のお米。これは陸稲に適しており、他の雑穀などとともに水田とも畑ともつかない未分化な環境の中でもしっかり育つそうです。

この「熱帯ジャポニカ」は江南で水稲に適した「温帯ジャポニカ」が生まれ、渡来するまで、日本でしっかり根付いていたことが遺伝子レベルの研究で「温帯ジャポニカ」の在来品種の中に「熱帯ジャポニカ」の特性が発見されたことから分かる。(るいネット + 藤田)



(日本人の起源、伊藤)

縄文イネ（熱帯ジャポニカ）は江南・河姆渡遺跡から渡来！ 長江文明との長期に亘る交流の拠点

プラントオパールなどが出土した30遺跡の“地形”の分析の結果は、水田向きの地形は少なく、むしろ畑作（焼畑）に向く地形からイネのプラントオパールが出土していたことが明らかになった。このことが、縄文イネの品種が熱帯ジャポニカであったろうとされる、一つの決め手になった。しかも河姆渡遺跡の炭化米が同じく熱帯ジャポニカであることが判明し、江南地方と日本列島の交流の可能性が、一層増大した。

こんどは30遺跡の“所在地”に注目して分析を試みる。縄文時代の遺跡から出土する、イネのプラントオパールが熱帯ジャポニカであること、また、佐藤洋一郎が、長江下流域のいくつかの遺跡から出土した炭化米20粒から、DNAを取り出して調べた結果、河姆渡遺跡から出土した炭化米2粒が、熱帯ジャポニカであることが判明した。河姆渡村を含む中国江南地方から、長江文明（含む熱帯ジャポニカ種のイネ）が、セットとなってこの列島に流入していた。このように遺跡を、岡山ブロック、有明海ブロック、その他地域の三つに分類すると、

- ・岡山ブロック 9カ所（30%）
- ・有明海ブロック 12カ所（40%）30遺跡中。
- ・その他地域 9カ所（30%）

驚くべきことに、岡山、有明海ブロックで全体の70%を占める。早い時期は岡山に重点があり、時期が下ると有明海に重点が移る。しかし、両地域とも縄文前期・中期から後・晩期にかけて継続的分布が見られる。

鳥浜貝塚と河姆渡遺跡との間の交流を一つの例として、日本列島の西日本地区（照葉樹林帯）の各地と中国江南地区の各地は、それぞれ互いに交流していたと考えられる。その交流が重なっていくうち、互いの交流地域が次第に収斂していった。そこが岡山ブロックと有明海ブロックであった。

長江文明は稲作農耕と漁撈の融合をベースとして興り、その担い手はいわゆる“越人”であったと思われる。彼らは農耕・漁撈技術とともに、長江や沿岸海域を利用した水運技術にも長じていたことはよく知られているところである。岡山・有明海ブロックは、あたかも長江のような瀬戸内海と有明海という内海に面し、上の表にも括弧書きしたように、内陸の遺跡も大河の流域に存する。日本列島と交流した越人にとって、この二つのブロックは江南地方によく似た、居心地のいい地域だったのではないか。だからこそ、この二つのブロックが交流の拠点となったと筆者（伊藤）は考えている。

すなわち、江南人・越人たちは、長江中・下流域ないし東亜稲作半月弧から、偶発的にたまたま日本列島に漂着したのではなく、当時すでに高い水準にあった渡海航法を駆使し、瀬戸内海や有明海の一定地点を目指して渡来して来たのではないか、「相互交流」が長期に亘って存在していたのではないか、と思われる。

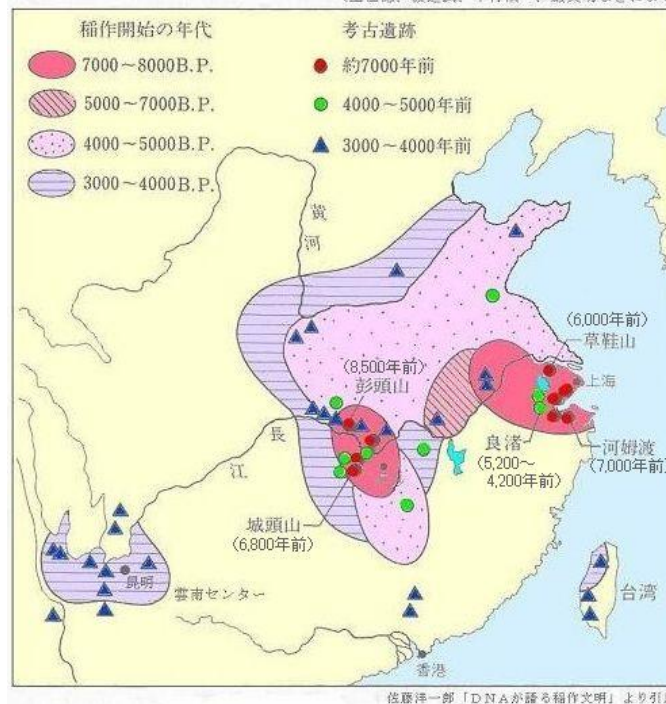
（日本人の起源、伊藤）

中国浙江省（Zhejiang）金華市（Jinhua）で14日閉幕した「上山遺跡発見20周年学術シンポジウム」で、約1万年前の上山文化が世界の稲作文化の起源であることが確認された。

上山遺跡は2000年、同市浦江県（Pujiang）で発見された。8600年～1万1400年前の遺跡で、約1万年前の炭化したイネが出土している。同遺跡に属する文化は2006年、正式に上山文化と命名された。遺跡の発掘調査を指揮した浙江省文物考古研究所の蔣樂平（Jiang Leping）研究員によると、上山文化に属する遺跡はこれまで19カ所見つかри、早期稲作が行われていたことを示す証拠も数多く出土したという。

【2020年11月18日 Xinhua News】

中国の考古学データに基づく稲作の起源
（王在徳、渡辺武、中村儀一、嚴文明などによる）



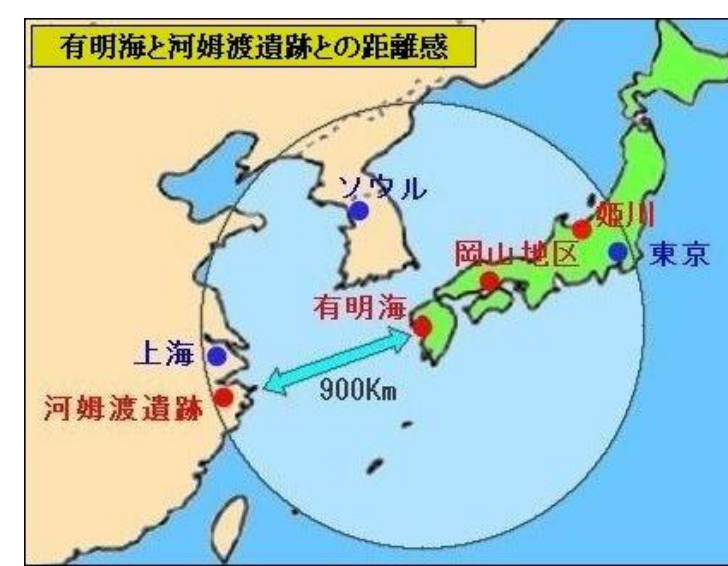
（日本人の起源、伊藤）



（日本人の起源、伊藤）



（日本人の起源、伊藤）



（日本人の起源、伊藤）

縄文時代晩期の寒冷化・乾燥化と世界の文明の変動と民族移動

世界的気候寒冷化と民族大移動

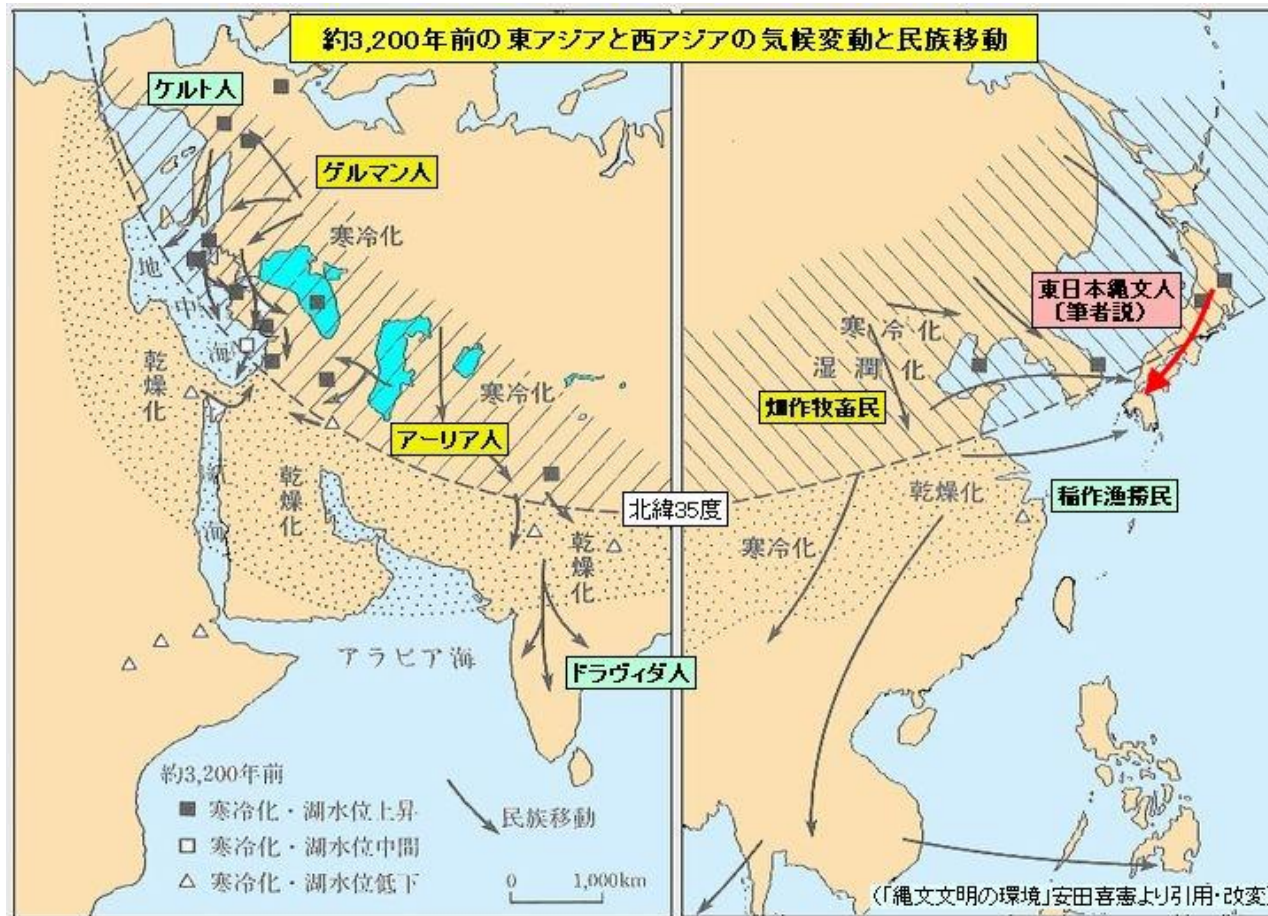
気候の寒冷化は当然のことながら日本列島だけで起こったものではない。世界的な気候の寒冷化が各地を襲った。縄文文化が森の季節の変化に歩調を合わせた自然=人間循環系の文化であったのと同様に、エジプト文明はナイル川の定期的洪水氾濫(河岸地帯の肥沃化)に歩調をあわせた、やはり自然循環系の文明であった。それゆえ気候の寒冷化がナイル地域の乾燥化を招き、ナイルの水位が下がって氾濫規模を縮小すると生産力が低下し、ツタンカーメンなどのエジプト新王国時代はこの時期に終焉した。またヨーロッパ大陸ではゲルマン民族の南下によりケルト人をライン川東岸から追い出した。地中海沿岸では民族移動の嵐が起こりミケーネ文明やヒッタイト帝国が崩壊した。インダス川流域ではアーリア民族が南下して先住のドラヴィダ人をインド南方に追いやった。まさに気候の寒冷化・乾燥化が世界各地で民族の南下や移動を誘発し、他の民族の逃避や文明の崩壊を引き起こしていたのである。

寒冷化がもたらした中国大陸の動乱

中国大陸も例外ではない。4,000年前、中国大陸では、北方の畑作牧畜民(黄河中流域の漢民族)が長江流域の江漢平原(湖北省)に南下した。

その証拠は湖北省石家河遺跡(4,000年前)から三足土器が出土している。これは明らかに長江流域のものではなく、中原(黄河中流域の平原地帯)のものである。気候の寒冷化・乾燥化はその後も繰り返し起こった。そのたびに北方民の長江流域への侵攻があった。特に3,000年前の寒冷化・乾燥化は厳しく、北方の民は大挙して長江流域に押し寄せた。度重なる北方民の侵入により、右図のように長江流域を追われて雲南省や貴州省の山奥に逃れる民族も出てきた。(たとえば苗族がそれである。)長江流域の民が向かったのは中国の奥地ばかりではない。東南アジアにも向かったし、台湾島にも向かった。

(日本人の起源、伊藤)



(日本人の起源、伊藤)



石家河遺跡出土の三足土器

(日本人の起源、伊藤)



(日本人の起源、伊藤)

縄文時代晩期の寒冷化が日本列島の植生を変化させる

縄文時代後・晩期

寒冷化

1万年間続いた東日本縄文社会の崩壊

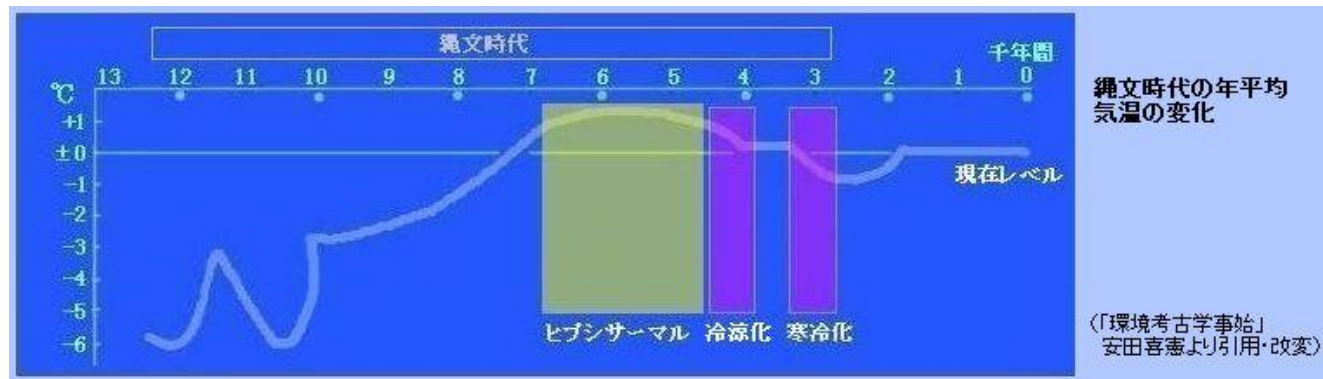
環境考古学の安田喜憲によると、6,000年前ごろ気候最適期にあった縄文文化は、縄文後期に入る4,000年前ごろから冷涼化に見舞われ、縄文晩期に入る3,000年前ごろには厳しい寒冷化・乾燥化に見舞われた。安田は、その気温変動の様子をごく大雑把に右のグラフで表わしている。この日本列島の豊かで安定した森、特に東日本の落葉広葉樹林帯(ナラ林帯)は、高温期から寒冷化が進む3,000年の間に、温暖帯系のクヌギ・コナラ・クリなどの森から、冷温帯系のブナ、ミズナラなどの林に大きく姿を変えた。

右図で黄緑色で示した暖温帯落葉広葉樹林が寒冷化によって壊滅的打撃を受けたことが分かる。東日本地区の、高い生産力を誇ったドングリの森林は、その生産力を大幅に減じることとなったのである。

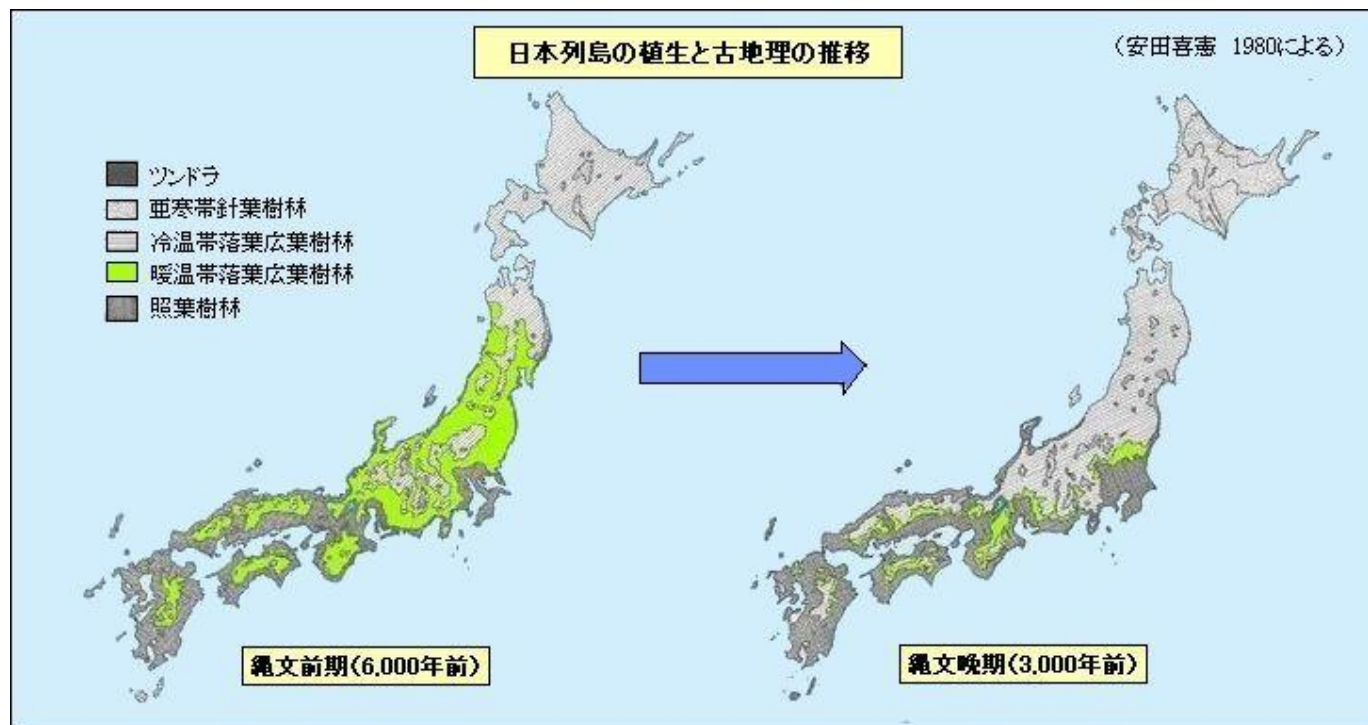
一方、西日本地区の照葉樹林は気温に対する適応性が大きいのであろう。ほとんど気温変化の影響を受けていない。

縄文文化はすでに述べたように、春には山菜、夏には魚介類、秋には木の実、冬には狩猟という、森の恵みに基盤を置いた自然=人間循環系の文化であった。その“自然の循環”のうち最も基本となる木の実の生産が、東日本地区で、うまく機能しなくなったのである。その結果、中部山岳の八ヶ岳山麓文化圏とも言える縄文中期の繁栄は、4,000年前ごろ突然崩壊し、5,500年前ごろから1,500年間も繁栄し続けた最北の巨大な縄文都市・三内丸山もこの時期に突然放棄されることになった。すでに1万年以上も続いていた縄文社会が、急速に崩壊を始めたといっていだらう。

(日本人の起源、伊藤)

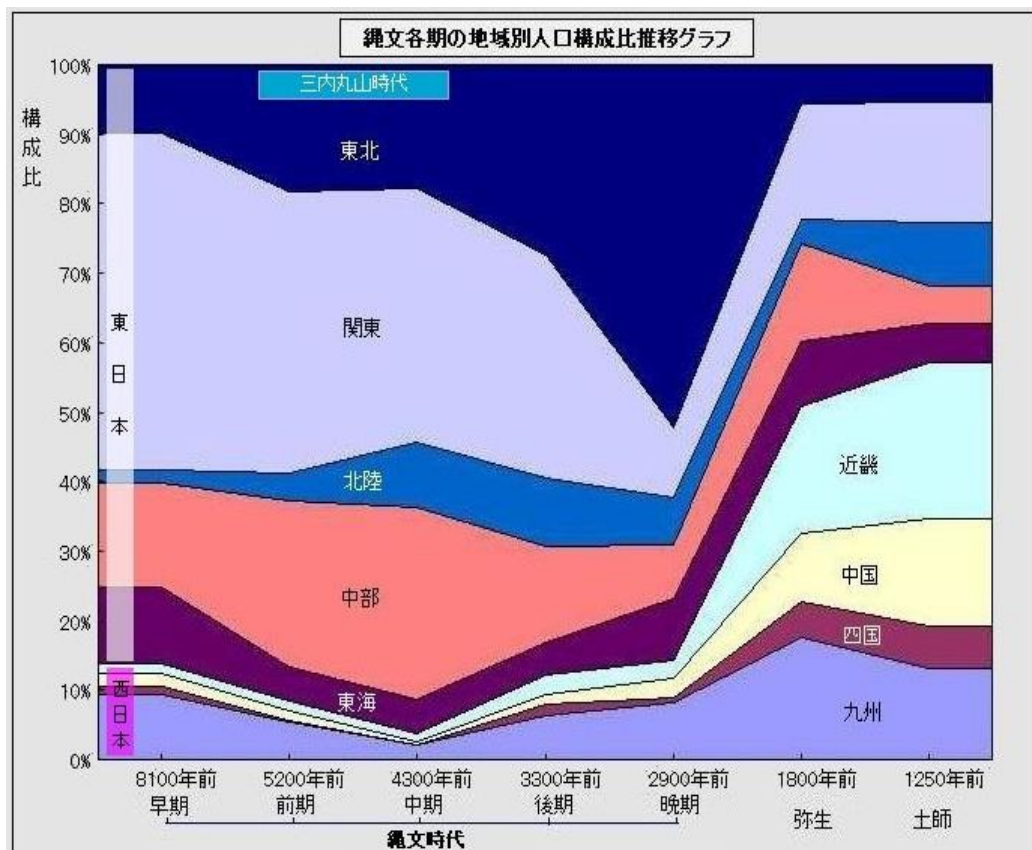


(日本人の起源、伊藤)



(日本人の起源、伊藤)

(日本人の起源、伊藤)



東日本縄文人の南下が縄文人ゲノムの均一化を引き起こす

縄文時代後・晩期

縄文人ゲノムの均一化

東西縄文文化の融合をもたらした 東日本縄文人の南下

当時の縄文人は、地球規模で起こった気候の寒冷化など知る由もなく、自分の住む地域で、局地的に異常気象が頻発することを、いぶかしんでいたことだろう。安田の言う縄文後・晩期の寒冷化は、安定的で、且つ高い生産性を誇ってきた東日本の森林が、主要食料・ドングリなどの堅果類の供給を、突然、何年かに一度激減させるというような、異常な事態を引き起こしていた。しかもこの異常な事態は繰り返し襲って来た。この“自然が作り出した凶作”は東日本の縄文人に、かつてない決断を迫ったに違いない。

右表は、縄文中期・後期に焦点を当てたものである。中期と後期すなわち、気候最適期と寒冷化後で、地域毎に人口がどう変化したかを調べてみた。縄文時代の人口は、縄文中期にピークに達している。それも95%以上が東日本に偏在した。その東日本(東北を除く)が冷涼化・寒冷化による森林の生産力の低下で、人口が半減してしまった。特に中部の山岳地域では3分の1以下に激減した。その一方で注目しているのは、東日本に比べて極めて人口密度の低かった西日本で、低レベルながら人口が“倍増”したことである。特に四国などは、200人から2,700人へと13.5倍の規模に膨れ上がっている。また九州は実数においてほぼ5,000人に近い大幅な増加を示している。

このような縄文後期における西日本地区の人口増加は、西日本が寒冷化しなかったからでも、照葉樹林の生産性が急に上がったからでもない。またこの期間に、大陸や半島方面から大量の渡来があったからでもない。唯一考えられる理由は、豊かな森を失ったことを実感した東日本人が、西日本地区に南下、流入した結果であろう。たとえば殆ど無人島であった四国地方に、或いはアカホヤ火山灰から再生した南九州の空白地帯に東日本人が流入した可能性は十分ありうると考える。地図に示すと次のようになる。東日本縄文人、遡れば、はるばるバイカル湖畔からこの列島にやって来た人たち、彼らは冷涼な気候を好む人々であつたらしい。彼らが強い勢いをもって、この列島に流入したときから不思議なことに、西日本の温暖な地域には足を踏み入れなかった。(彼らの荒屋型彫器を伴うクサビ形細石刃文化は、東日本地区に留まり、西日本地区まで南下しなかった。その勢いからすれば列島全体を覆っても決して不思議ではなかったのにである。)

右表を作成した小山修三も、---東から西への人間の移動は考え難い。広葉樹林に適応した縄文人(東日本縄文人)は、照葉樹林が中心の西日本には生きられない---とさえ著述している。しかしそういう冷涼気候を好む人々が、右図に見るように、凶作や飢餓のため止むに止まれず、はじめて南下を決断したと考えられる。表の作成者の小山修三は否定するかもしれないが、東日本人の南下を想定する以外、西日本地域の人口倍増を説明することは出来ないと思う。

『縄文時代—コンピュータ考古学による復元』小山修三、中公新書、1984 (日本人の起源、伊藤)



(日本人の起源、伊藤)

縄文各期の地域別人口推移 (小山修三、1978による)								単位:人	
地方 (小山年代)	縄文時代					晩期 (2千9百年前)	弥生 (1千8百年前)	土師 (1250年前)	
	早期 (8千1百年前)	前期 (5千2百年前)	中期 (4千3百年前)	後期 (3千3百年前)	差				
東北	2,000	19,200	46,700	43,800	-2,900	39,500	33,400	288,600	
関東	9,700	42,800	95,400	51,600	-43,800	7,700	99,000	943,300	
北陸	400	4,200	24,600	15,700	-8,900	5,100	20,700	491,800	
中部	3,000	25,300	71,900	22,000	-49,900	6,000	84,200	289,700	
東海	2,200	5,000	13,200	7,600	-5,600	6,600	55,300	298,700	
東日本 (構成比)	17,300 86.1%	96,500 91.5%	251,800 96.4%	140,700 87.8%	-111,100 -	64,900 85.6%	292,600 49.2%	2,312,100 42.8%	
近畿	300	1,700	2,800	4,400	+1,600	2,100	108,300	1,217,300	
中国	400	1,300	1,200	2,400	+1,200	2,000	58,800	839,400	
四国	200	400	200	2,700	+2,500	500	30,100	320,600	
九州	1,900	5,600	5,300	10,100	+4,800	6,300	105,100	710,400	
西日本 (構成比)	2,800 13.9%	9,000 8.5%	9,500 3.6%	19,600 12.2%	+10,100 -	10,900 14.4%	302,300 50.8%	3,087,700 57.2%	
日本列島	20,100	105,500	261,300	160,300	-101,000	75,800	594,900	5,399,800	

*小山年代・小山氏独自の年代観による年代

(日本人の起源、伊藤)

東西文化の融合をもたらした東日本縄文人の南下(つづき)

東西文化の融合

佐々木高明は---縄文後期には磨消縄文が普及し、後期中ごろには、その文様が西日本にも普及し、東・西日本のあいだにみられた地域差が一時的に解消されたことがあった。---としている。また佐原真(「大系日本の歴史1日本人の誕生」)は---縄文時代後期の末近く・とくに九州では、火山灰台地に集落の出現が目立ってくる。東日本からアク抜き技術が伝播したことによって、それまで食べられなかった火山灰地帯の根茎類などの植物が食べられるようになった、という解釈もある。---と述べている。

東日本人の南下、西日本地区への流入、それも既存の西日本縄文人と同規模以上の流入が事実であったとすると、旧石器時代以来、かなり独立した集団であった東日本の縄文人と西日本の縄文人が、縄文後期に、東と西の文化を融合させたということになる。おそらく互いの言語・語彙が共通化するようなことも起こったであろうし、なによりも遺伝子の融合が進んだであろう。すなわち、日本列島の西部地区には、文化的にも民族的にも列島平準的な、新たな西日本人が誕生していたと言っても過言ではないだろう。また、前スライドの図の点線のように、南下した東日本人の一部が、直接、または南九州に一度落ち着いた後、さらに南下して琉球地方や南西諸島に住みついた可能性が高い。それは、丁度この時期に、沖縄中部では貝塚時代前期に入り遺跡が急増し、沖縄南部では琉球新石器時代が始まっているからである。すなわち、この時期に西日本地区と同様、沖縄中・南部の人口が急増しているのである。その原因が東日本縄文人の流入であったとしたら、アイヌ人と琉球人が遺伝学的に同祖であるという有力な学説とも整合性を持つことになる。

水田稲作の日本への伝播

江南の民の向かった地の一つが同じ照葉樹の森を持つ日本列島であり、南部朝鮮であった。長江流域の民にとって西日本は、全く知らない土地というわけではなかった。すでに3,000年以上に亘って交流をしてきた同じ文化(照葉樹林文化)を共有する地域であった。

安田喜憲は日本列島に渡来してきた人々は北方の民の侵略を逃れてポートピープルとなり、未知の島・日本列島に漂着した人々であったろうと言っている。しかし筆者(伊藤)はこれまでの検討から、「彼らは北方の漢民族の侵略を受けたとき、昔から交流のあった日本列島をニューフロンティアとして計画的に目指した人々であった。」と言い換えられると考えている。

文字による記録がない時代、すなわち祖先の伝承や物知りの古老の物語などが「記録」であった時代、江南地方ではすでに日本列島が確かな伝説の島であったに違いない。そればかりでなく、日本列島と強い繋がりのある集団や、推測を逞しくすれば、日本列島にコロニーをもつような集団があった可能性も、既に述べた。だからかれらは、江南の港から大海に乗り出すときから、この日本列島や同じく照葉樹林地帯である南朝鮮を目的地に定めていたに違いない。だからこそ彼等は取るものもとりあえず漂流したという形ではなく、水田稲作という技術を、高度に完成されたシステムとして、温帯ジャポニカという水田稲作に適した種籾と水田耕作用の道具類などを携えて日本列島に持ち込めたのであろう。

(日本人の起源、伊藤)

亀ヶ岡文化を担った人々

日本人成立モデルに見るように、筆者(伊藤)の成立モデルの一つの柱は、「縄文人2系統論」である。縄文文化というのは1万年に亘る長期文化であったが、その間、ほとんどが“東日本縄文人集団の文化”であった、と言って過言ではないことである。しかし、さしもの東日本の縄文文化も、4000年前ごろに始まる気候の寒冷化により、急激な人口の減少を見せはじめ、晩期には人口は最盛期の1/4まで激減する。このことは、既に述べてきた。その人口の激減した東日本地区で唯一、繁栄を続けていたのが東北地区である。その東北地区の北部から北海道西南部を中心として、3000年前、最後の極めて高度に成熟した縄文文化・亀ヶ岡文化が出現した。

右図は八戸市是川遺跡の出土品であるが、世界にも例をみない高度な、特に漆の、技術には驚嘆させられる。この文化の担い手こそ、東日本縄文人(蝦夷)が小進化し続けた、即ち原アイヌ人であったろうというのが、筆者(伊藤)の考えである。この亀ヶ岡文化は6、7百年続いた後、紀元前3、4百年ごろ衰退する。アンデス文明のマヤやインカもそうだが、一度潰えた文化が再起、発展するすることはない。北海道の文化を見ても、その後も長い間、縄文文化の残照が残り、近世アイヌでも鉄器文化こそ利用したが、サケ・マスの漁撈と狩猟採集の文化を守り続けた。近代化が興ることはなかった。

(日本人の起源、伊藤)



磨消縄文を取り入れた鐘崎式土器(鹿児島・干迫遺跡出土)

■磨消縄文(すりけしじょうもん)
一度つけた縄文の部分を磨き消して文様とする技法です。縄文部と無文部が沈線
で区画され、区画内に後から縄文をつけ
る(充填縄文)場合も含んで「磨消縄文」
と総称する場合が多く、中期後半以降に
多く用いられています。

磨消縄文は、縄文後期・晩期に東
日本縄文文化のなかで生まれ、西
日本に広がった文化伝統の一つと
考えてよい。(コトバンク)



(日本人の起源、伊藤)



籠の目をアスファルトで埋め、
赤漆で塗り固められた藍胎漆器

浮き彫りのような
磨消縄文の皿形土器

赤や黒色の漆で彩色された
遮光器土偶の頭部

(日本人の起源、伊藤)

太古の朝鮮半島のヒト集団

不思議なことに朝鮮半島の黎明期 (B.C10,000~5,000年)の遺跡消滅、即ち無人化

韓国の前国立中央博物館長、韓炳三(ハンビョンサム)が示すところによると、朝鮮半島では旧石器時代の遺跡は、50カ所程度しか発見されていなかった。このレベルの遺跡ならば、日本列島の旧石器時代の遺跡数は3,000~5,000カ所に上る。

これはどうしたことであろうか。半島の厳しい気候が一度、半島の南端まで達した人々を、また大陸まで引返させてしまったのであろうか。

大陸の気候も決して厳しくないわけではないはずだが、右表は更に衝撃的である。なんとB.C10,000~5,000年の間(赤で塗りつぶされた部分)、遺跡が、すなわちヒトの気配が、半島からなくなるのである。新たに遺跡が出てくるのは、7,000年前、世界がヒブシサーマル期を迎えようとする時期からである。

全く不思議なことに、日本列島の最初の土器が隆起線文土器であったのと同様、5,000年以上の年代格差があるにもかかわらず、朝鮮半島の新石器時代も、同じく隆起線文土器で始まる。このような年代格差をもって、同じような文化が起こる現象は、河姆渡遺跡の環濠がこの日本列島では4,000年遅れで北九州の稲作集落(例えば平塚川添遺跡など)に出現するというに似ている。

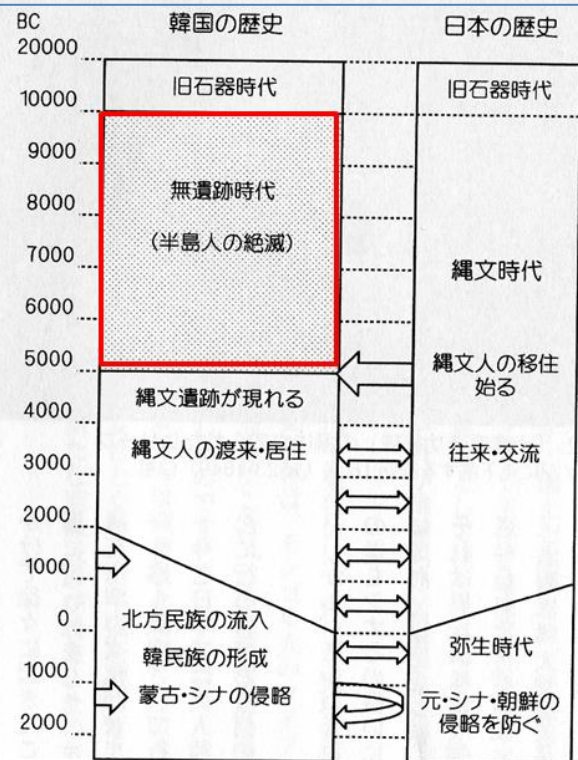
それにしても、国境のない時代とはいえ、7,000年前、ようやく朝鮮半島に現れた新石器文化の土器が、直ちに海峡を越えて対馬に渡って来ていた事は、列島と半島の交流がいかに密であったかということを示す。

(日本人の起源)

年表 CHRONOLOGICAL TABLE (「国立中央博物館」通川文化社、1993より改変)

年代 BC	KOREA	JAPAN	CHINA
300000	旧石器時代 PALAEO LITHIC	先土器時代 PRE-POTTERY PERIOD	旧石器時代 PALAEO LITHIC
10000			
5000	新石器時代 NEOLITHIC	縄文時代 JOMON PERIOD	新石器時代 NEOLITHIC
	櫛目文土器文化 COMB-PATTERN POTTERY CULTURE		仰韶文化 YANG SHAO
			竜山文化 LONG SHAN
			商 SHANG
1000			西周 WESTERN ZHOU
900			
800	無文土器文化 PLAIN COARSE POTTERY CULTURE		
700	青銅器時代 BRONZE AGE		春秋時代 SPRING & AUTAMN
600	古朝鮮 OLD CHOZEN		東周 EASTERN ZHOU
500			
400			戦国時代 WARRING STATES
300			
200	初期鉄器時代 EARLY IRON AGE		秦 QIN
100	原三国時代(三韓時代) THREE HAN STATES		前漢 WESTERN HAN
AD		弥生時代	

太古の朝鮮半島のヒト集団



日本と韓国の歴史比較
韓国人は日本人と北方民族の混血だった
(韓国人は何処から来たのか。長浜)

(日本人の起源、伊藤)



(日本人の起源、伊藤)

かつて南朝鮮(南韓(朝鮮半島南部)、現在の大韓民国)の主人公は西日本縄文人だった(その1)

南朝鮮の主人公は西日本縄文人

① Y染色体ハプログループD2(=D1a2)系統の移動ルートは、[北アフリカ→中東 →中央アジア→華北→朝鮮半島→西九州]と推定される。35,000年前頃華北に到達した古華北人(D1a2)が後期旧石器時代(20,000前)に朝鮮半島を經由して西日本に入り、一部は東日本に至る。一方、古華北人の一団は30,000年前頃にバイカル湖周辺に移動し、ハイテク石器、クサビ形細石刃石器群(荒屋型彫器を含む)文化を産み、その担い手の古バイカル人(D1a2)が13,000年前、沿海州、樺太を經由して日本列島へ流入してきて、東日本縄文人となる。同じ頃に華北に残った古華北人(D1a2)が半円錐形石核を携え、西日本に進出、西日本縄文人となる。これらの古華北人・古バイカル人の列島への侵入以外に、縄文時代草創期以降、この日本列島に大規模な集団の流入があったというような文化的な痕跡は残されていない。(日本人の起源、伊藤) 氷河期を脱し、半島と列島が完全に分離するのは10,000年前で、華北からの列島へのD1a2系統の移動は容易であったと思われ、半島に留まった旧石器時代人は少なかったのではないかと。(藤田)

② 朝鮮半島では旧石器時代の遺跡は50か所しか発見されていなかった(右図参照)。このレベルの遺跡ならば日本列島の旧石器時代の遺跡数は3000~5000カ所に上る、このことは旧石器時代の半島はほぼ無人地帯であったことを示す。そしてB.C10,000~5,000年の間、遺跡が、すなわちヒトの気配が、半島からなくなる。新たに遺跡が出てくるのは、7,000年前、世界がヒブシサーマル期を迎えようとする時期からである。(伊藤)

『韓国の中学校歴史教育』『韓国の高校歴史教育』三橋広夫にも同様の記述。(藤田)

③ 「韓国の歴史」(金両基監修、河出書房新社、2002)には、「旧石器人は現在の韓(朝鮮)民族の直接の祖先ではなく、直接の祖先は4,000年前(?)の新石器時代人からである。」とある。(韓国人は何処から来たか、長浜)

④ 西北九州と朝鮮半島の漁撈文化の勃興。6,300年前(7,300年前、較正年代?)九州・大隈半島の南、鬼界カルデラが大噴火したのである。アカホヤ火山灰と呼ばれる膨大な火山灰が遠く東北地方まで降った。当然、南九州の生態系は破壊され、ヒトの住めるところではなくなったであろう。中九州でも事情はそれほど大きく異なることはなかったであろう。そういう時、西北九州では生き残りをかけて、新たな漁撈文化が生まれた。おそらく、アカホヤ火山灰の打撃の少なかった西北九州(さらに半島)には、九州南部・中部からの避難民が押し寄せたに違いない。それは、堅果類、芋類の植物食をベースにし、タンパク質の供給を魚に求める、補完的な小規模漁業という旧来から本格的な漁撈を含む生業パターンへの変更を迫ることになったと思われる。(伊藤) カルデラ噴火の避難民の半島への移住がほぼ無人の南朝鮮への西日本縄文人の進出と考える。この時以降南朝鮮には倭人(西日本縄文人)が居住した。このカルデラ噴火の降灰とヒブシサーマル期を迎えた結果、西北九州と南朝鮮の漁撈文化や三内丸山に代表される東日本縄文文化の発展に繋がったとも考えられる。(藤田) この漁撈文化はD1a2の西日本縄文人が担い、日本語のゆりかご(特に西九州)になったのではないかと。(DNAでたどる日本人10万年の旅、崎谷満)

⑤ 全く不思議なことに、日本列島の最初の土器が隆起線土器であったのと同様、5,000年以上の年代格差があるにもかかわらず、朝鮮半島の新石器時代も、同じ隆起線土器で始まる。(伊藤)

⑥ 照葉樹林文化の影響を受けた南朝鮮を含む西日本縄文文化圏の発展により、南朝鮮と西日本に古日本語を成立させ、上代日本語の基層となった。(伊藤)

⑦ 韓国では櫛目土器が縄文土器にあたり、無文土器が弥生土器に当たる。新羅・百済・任那で日本産のヒスイ製勾玉が大量に出土(高句麗の旧領では稀)しており、朝鮮半島にはヒスイ(硬玉)の原産地がなく、東アジア地域においても日本とミャンマーに限られることや、化学組成の検査により朝鮮半島出土の勾玉が糸魚川周辺遺跡のものと同じであることが判明した。このことは、南朝鮮と西日本の経済圏が一帯であったことを示すのではないかと。(右図)(藤田)

⑧ 世界的な寒冷化がもたらした世界的な動乱に中国大陸も巻き込まれる。4,000年前、中国大陸では、北方の畑作牧畜民(華北人、黄河中流域の漢民族)が長江流域の江漢平原(湖北省)に南下した。この冷涼化は半島でも華北人やツングース系民族(濊・貊)の南下が始まり古朝鮮語の形成を促した。さらに北方の民は大挙して長江流域に押し寄せた。その証拠は湖北省石家河遺跡(4,000年前)から三足土器が出土している。これはあきらかに長江流域のものではなく、中原(黄河中流域の平原地帯)のものである。気候の寒冷化・乾燥化はその後繰り返り起こった。そのたびに北方民の長江流域への侵攻があった。特に3,000年前の寒冷化・乾燥化は厳しく、北方の民は大挙して長江流域に押し寄せた。度重なる北方民の侵入により、長江流域を追われて雲南省や貴州省の山奥に逃れる民族も出てきた。(たとえば苗族がそれである。) 長江流域の民が向かったのは中国の奥地ばかりではない。東南アジアにも向かったし、台湾島にも向かった。さらに南朝鮮・日本列島へも向かった。(伊藤)

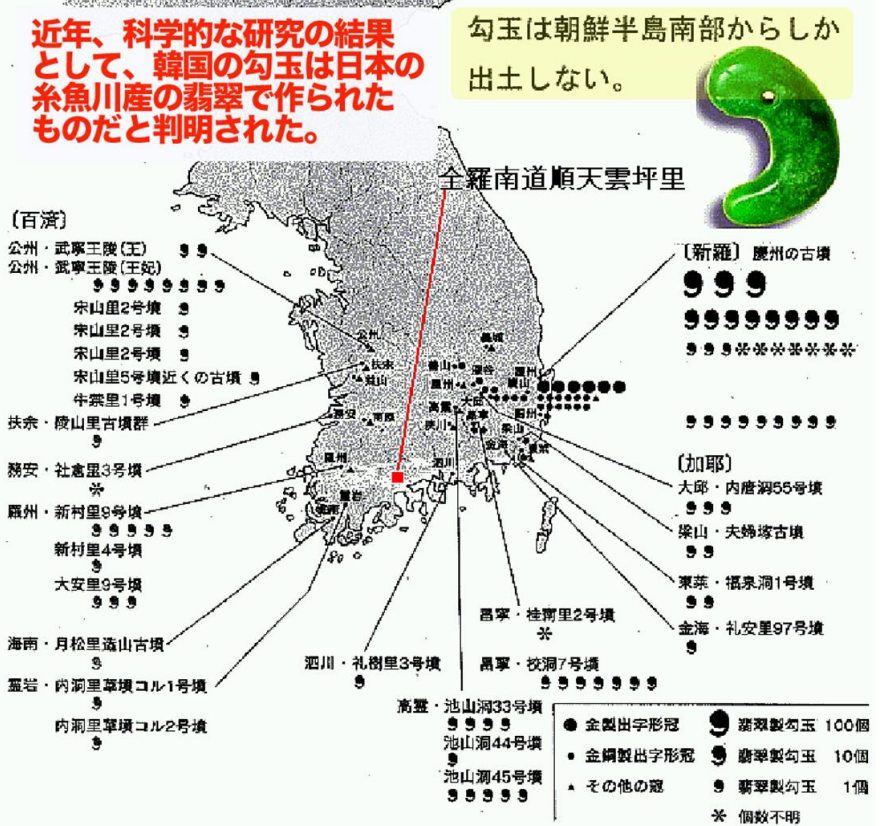


韓半島の旧石器遺跡 (伊藤氏のネット論文より引用・修正)

考古学的証拠

1. 新町遺跡の支石墓から出土した14体の遺骨のうち、弥生前期初頭の熟年男性2体から頭蓋形態が判明した。その特徴は予想に反し渡来形質の片鱗さえ認められず、ほぼ全員に施されている抜歯の様式も西日本縄文人の様式を踏襲していた。まさに「縄文人」の頭骨そのものであった。

2. 小片氏は、1988年から4時にわたって行われた半島南部の「煙台島の貝塚遺跡を調査」に携わり、前4000年紀の古人骨、15体を調査した。この煙台島の骨や歯の特徴は現代の韓国人に似ても似つかぬ形態であり、縄文人骨骨に一致することが判明した。また、半島南部の靉島からの前1世紀の人骨も縄文人のものであった。(韓国人は何処から来たか、長浜)



(任那(みまな)日本府 | 検索サイト2017~2019, Net)

⑨ 4,000年前頃から世界の冷涼化が始まるまでは、朝鮮半島北部はほぼ無人で、南朝鮮には専ら西日本縄文人(倭人)が居住していた。日本語の基層は南朝鮮と西日本で育まれた。冷涼化に伴い、半島北部には、華北人とツングース系の濊・貊(わい・はく)(高句麗の前身)が侵入を開始した。とはいえ、弥生時代前期までは、南朝鮮は倭人が大多数であったと考える。弥生中期・後期のなると華北人や朝鮮人(高句麗系濊・貊)の南下が激しくなった。また、前473年呉が滅亡し、前344年越が滅亡した。その遺民が江南を追われ南朝鮮、九州北西部と本州日本海側に渡来した。南朝鮮には南西岸に漂着し、辰国(のちの馬韓)を建てた。紀元前3世紀、燕が朝鮮半島北西部を領有していた。また、南朝鮮には真番郡を置いた。前108年、朝鮮半島西側へ漢が侵入し楽浪郡や真番郡を置いた。

燕は紀元前3世紀に極盛期を迎え、朝鮮半島西側に倭に至る交易路を造り、また鉄器を朝鮮半島や日本列島にもたらした。この頃、燕は朝鮮半島北部を領有し、南朝鮮の「真番」を略属させ、所々に要塞を築き官吏を派遣して治めていた。燕には河北省出身の韓姓を名乗るものが多く、南朝鮮の真番郡に移住していた。それ故に、後世、後漢の時代に漢人が南朝鮮(南韓)を韓と呼びその住民を韓人と称したのであろう。かくて、韓人なるものは実在せず、華北人、江南人や秦人および彼らとの混血の進んだ倭人が韓人と称されたのか。このように、朝鮮半島の本来の原住民は、南朝鮮の倭人(西日本縄文人)である。

また、一説によると、「韓」を思いついたのは倭人自身であった可能性を示唆する。倭人はスサノオやニギハヤヒの時代から韓地を韓国(からくに)、その地の神を韓神(からのかみ)などと呼び、それに「韓」の字を適用していた節がある。江南人、華北人や朝鮮人とは関係のない時代に、半島南部は既に加羅であり韓であったということである。この事実は、韓はまさに天孫族(倭人)にとって懐かしき濊の地であったということではないか。

かくて、江南から倭国に直接渡来した江南人が国津神となったと考える。また、天津神は、中国人(華北人と江南人)と朝鮮人(高句麗系)の南下に圧迫された倭人が倭国に帰来したものと考える。(藤田)

⑩ 南朝鮮に西日本縄文人が居住していた考古学的証拠として、新町遺跡(福岡県糸島市)の支石墓から出土した14体の遺骨のうち、弥生前期初頭の熟年男性2体から頭蓋形態が判明した。その特徴は渡来形質の片鱗さえ認められず、ほぼ全員に施されている抜歯の様式も西日本縄文人の様式を踏襲していた。まさに「縄文人」の頭骨そのものであった。また、半島南部の「煙台島の貝塚遺跡を調査」で、前4000年紀の古人骨、15体を調査した。この煙台島の骨や歯の特徴は現代の韓国人に似ても似つかぬ形態であり、縄文人骨に一致することが判明した。また、南朝鮮の靑島からの前1世紀の人骨も縄文人そのものであった。(伊藤)

⑪ 高麗が編纂した正史の「三国史記」第1巻(新羅本記)には、日本列島の多婆那国(倭国(北九州)の北西千里に位置するので丹波か)から渡来してきた賢者が新羅2代目の長女を娶り、義理の兄弟となった3代目の死後に、4代目の王として即位する説話がある。この王が脱解王で、新羅の3王室の一つの昔氏の始祖となる。脱解王と倭人の大輔(総理大臣に相当する)の瓢公が政権を掌握して善政を行い、のちに高麗王朝にまで通じる金王朝の始祖となる赤子(脱解の実子との説がある)を王族として養育した。このように新羅本記には新羅の建国に倭人が深く関与していたことが記されている。

瓢公は、弁韓の伊西国(倭人の国)の出自とされ、新羅の3王家の朴氏、昔氏、金氏の始祖伝説のすべてに関与した。初代新羅王の赫居世居西干の朴姓も同じ瓢から取られているため、同一人物を指しているのではないかという説がある。このように新羅の建国に南朝鮮の倭人が深く関与していたと思われる。当時の弁韓・辰韓では倭人が政治的に主導的役割を演じていたのではないか。

新羅3王室の一つ昔氏は後世新羅王氏族として姿を消す。瓊瓊杵降臨の際大伴氏の始祖天忍日命が降臨に伴っている。倭人の昔氏は大伴氏と名を変え、北九州に帰来したと思われる。この降臨に伴った天兒屋命は中臣氏の祖である。中臣氏もまた南朝鮮出自の倭人で北九州に帰来したと考える。(藤田)

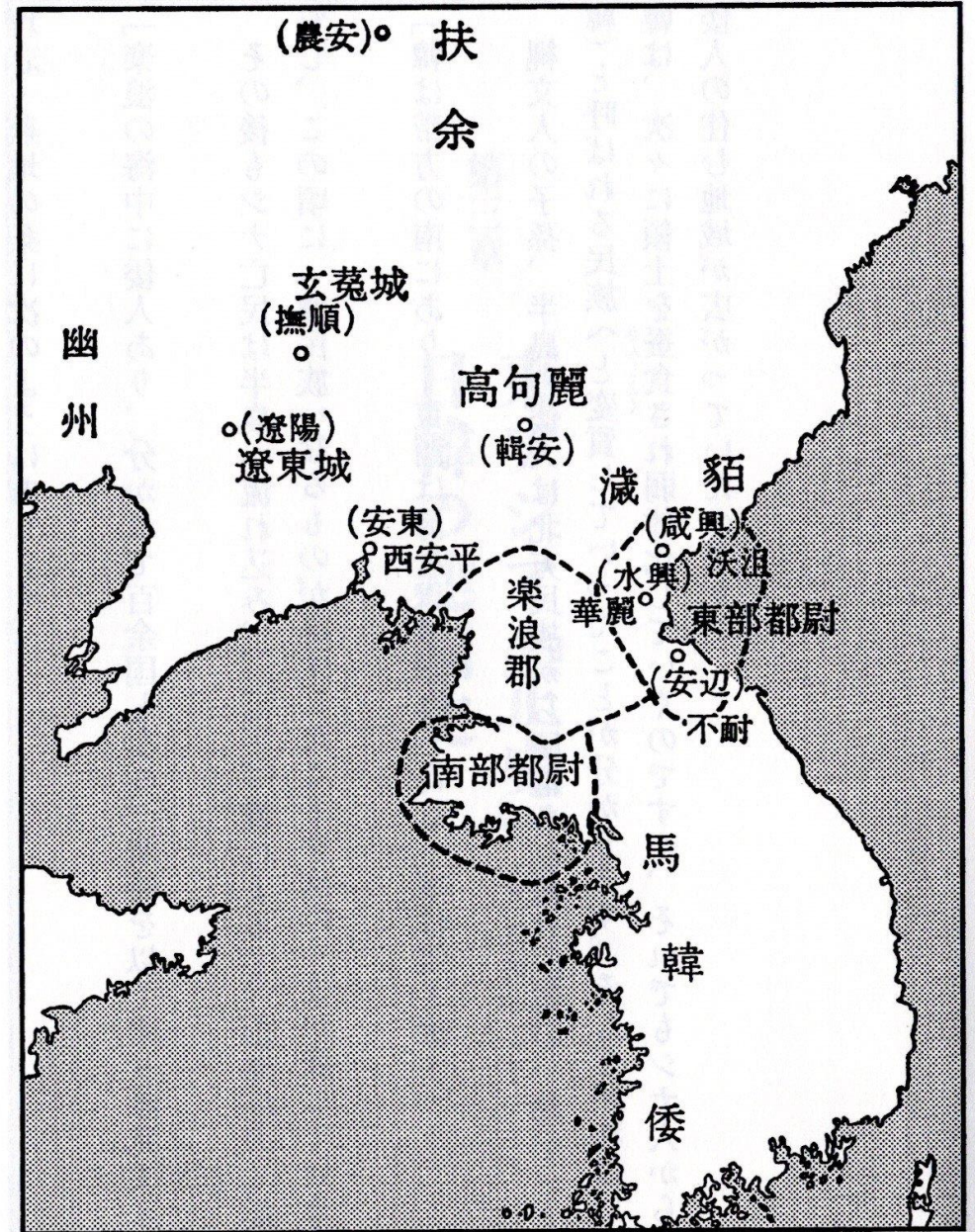


図6 1～2世紀の韓半島
(井上秀雄著:『古代朝鮮』講談社学術文庫 P.45より)
(日本の誕生、長浜)より引用)

図で、楽浪郡は、前漢の前108年、朝鮮半島西部にあった衛氏朝鮮を滅ぼした前漢の武帝により設置されたのが始まりである。郡治所は今の平壤に置かれ、郡の南部には軍事組織として南部都尉が置かれた。前82年には、嶺東7県を管轄する東部都尉が置かれた。この拡大した楽浪郡を創業期の楽浪郡に対して歴史学では「大楽浪郡」ともいう。

ツングース扶余系の濊・貊や高句麗は朝鮮の前身と見なされる。これらの民族は大楽浪郡の北方に位置している。韓は南朝鮮の西部、倭は南朝鮮の東部と南部に位置していたと考える。(Wikipedia抜粋、藤田)

⑫『三国志』『魏書弁辰伝』によると、辰韓と弁辰(弁韓)は、風俗や言語が似通っていたという。土地は肥沃で、五穀や稲の栽培に適していた。蚕を飼い、縑布を作った。大鳥の羽根を用いて死者を送るがそれは、死者を天空に飛揚させるという意味であった。鉄の産地であり、韓、濊、倭などが採掘していた。市場での売買では鉄が交換されており、それは中国での金銭使用のようであった。また倭人とも習俗が似ており、男女とも入れ墨をしていたとある。武器は馬韓と同じであった。礼儀がよく、道ですれ違ふと、すすんで相手に道を譲った。

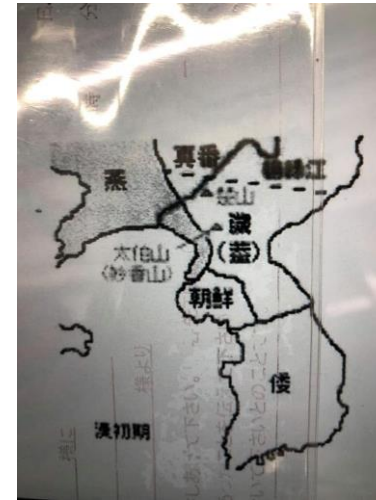
『魏志韓伝』に「弁韓は倭と界を接す」とある。また、後漢の時代、鮮卑の王、壇石槐に因んで次のような伝承がある。「東方の倭人の国を攻めて、千余家を拉致し、河畔で魚を取らせ食糧にした。」この倭人の国は遼寧省にあったもので、朝鮮半島の沿岸部の倭人が移住したものである。世界最古の中国地理書『山海経』では、漢初期(紀元前3世紀頃)に南朝鮮が倭となっている(右図)。『山海経』(海内北経)に、「蓋国在鉅燕南倭北。倭属燕。」という一節がある。つまり「蓋国は鉅燕の南、倭の北にあり。倭は燕に属す」とある。「鉅燕」は大いなる燕の意、「蓋(ガイ)」「蓋馬国(?)」は不明だが蔑称「濊(ワイ)」の元の名と仮定する。(古代日本異族伝説の謎、田中 + Wikipedia抜粋 + 上野(FB情報) + 藤田)

⑬伊都国は紀元前後に新羅のスサノオ北九州侵攻によって建てられたと思われる。1世紀末頃、任那が対馬に興り、次いで南朝鮮の倭人領域を支配下におさめた。邪馬台国時代、任那・伊都国連合が結ばれた。当時、任那の国々の多くは倭人が政権を握っていたと考えられる。また魏の帯方郡と倭人の勢力圏が接しており、大陸・半島の政治情報が直ちに邪馬台国に入っていたと思われる。(藤田)

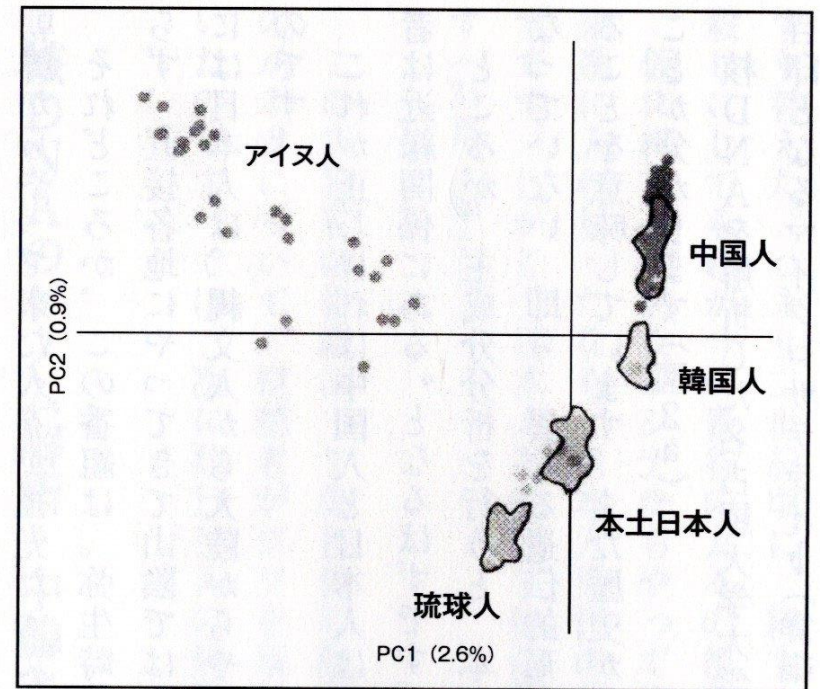
⑭武(雄略天皇)、自ら「使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓(百濟の東)・慕韓(百濟の南)七国諸軍事安東大將軍倭国王」と称した。また、『宋書』(夷蛮伝)でわかるように6世紀後半まではなんとか南朝鮮は倭国の勢力圏として維持できた。さらに、7世紀半ばの『隋書』にも「使持節都督新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事安東大將軍倭国王」、「倭王」が「朝鮮半島の支配権」を認めたと、似た記述が何度も出てくる。663年の白村江の戦いで倭国が唐と新羅の連合軍に敗退した後もかなりの倭人が韓国に留まったと思われる。

⑮斎藤氏らの東アジアにおける人類集団のゲノム遺伝的解析(主成分解析、第1部第1章)では直線状に位置しているのが、アイヌ人、オキナワ人、ヤマト人と韓国人である。アイヌ人がもっとも東アジアの中心部から離れており、オキナワ人、ヤマト人、韓国人が続く。このずれは正しく縄文人の影響、すなわちアイヌ人がもっとも濃密に縄文人のDNAを受け継いでおり、それについてオキナワ人、ヤマト人がつづき韓国人も弱いながら縄文人のDNAを含んでいると思われる。(日本人の源流—核DNA解析でたどる、斎藤) このことは、縄文早期末の鬼界カルデラ噴火ののち、西日本縄文人が南朝鮮に避難し、それ以来弥生時代まで南朝鮮には倭人(西日本縄文人)が居住し、江南人、華北人、朝鮮人(ツングース系)が南下するまで、南朝鮮は倭人の居住地であった。そのため、縄文人のDNAが現在の韓国人に有意に残っているのだと思う。(藤田)

さらに、最近の篠田氏らの弥生人の核ゲノムの解析(主成分解析、第1部第1章)によれば、縄文人、岩手・弥生人、長崎・弥生人、福岡・弥生人/現代日本人、韓国人、北京・中国人と一直線に乗る。このことは、南朝鮮の現住民は倭人(縄文人)であり、韓国人は縄文人と北京・中国人との混血であることを示唆する。また、右図にあるように山本氏らの核DNA解析(主成分解析)でも、琉球人、本土日本人、韓国人と中国人はほぼ一直線に並ぶ。この解析もまた韓国人は本土日本人と中国人の混血であることを示唆する。(藤田)



左図は漢初期(2世紀初頭)に倭は南朝鮮に位置したことを示す。(山岡保氏FB投稿『山海経』)また、倭の北西(半島西岸)に朝鮮とある。これは、魏志に言う箕子朝鮮か。出自は殷とされる。中国では元々漢族と見ているようである。前2世紀初頭に燕由来の衛満に乗っ取られ衛氏朝鮮となる。そして南に逃げた箕子の子孫が馬韓を興したことになる。(上野俊一、FB討論 2020-2-7)



日本と中国・韓国人のDNA構成比較 (別冊宝島「DNAでわかった日本人のルーツ」p.11 図4を一部改変) (日本の誕生、長浜)

上図でアイヌ人スポットが左上方に拡散している。この結果は斎藤氏らの結果と相いれない。これは、アイヌ人(東日本縄文人(原アイヌ人、蝦夷)とオホーツク人との混血)の核DNAの標品の多様性の問題か、あるいは主成分分析の主成分の違いか不明である。(藤田)

古日本語(日本基語)は縄文時代後期に確立か

日本語の起源

1

日本人の起源(<http://www.geocities.jp/ikoh12/index.html> Net公開廃止)
伊藤 俊幸(イトウ トシユキ)の日本語成立論(藤田改変)

旧石器時代、当時のホモサピエンスがどの程度文法的に完成された言語を使っていたのか、筆者(伊藤)は浅学にして、言語学者の説明に接したことがない。

しかし、既に高度な剥離技法などを使う石器が発明され、やがて人類史上始めて、化学的変化を伴う「土器」という製品を生み出した人々が、言語とは呼べないレベルの言葉しか使っていなかったとは、筆者(伊藤)には考えられない。

なぜなら、高度な石器や土器の製作技術やノウハウを、多くの人びとに広め、次世代に伝えていくためには、所謂“見様見真似”だけでは困難であり、かなりのレベルの言語的説明や、やり取り(質疑応答)をしなければならなかったと考えられるからである。すなわち、言語もそのレベルに達していたと考えるのが、自然であろう。

筆者(伊藤)は、古日本語(日本基語)は、かなり早い時代に完成していたと考える。少なくとも、完成し尽くされた言語といわれる、サンスクリット語の成立時期、3000年前には、すなわち新年代観でいっても、水田稲作農耕技術の到来以前に、日本基語は混合言語として既に成立していたと考える。なぜなら、1万年以上に及ぶ縄文文化が崩壊し、全く新しい、農耕技術や社会制度をもたらした弥生渡来人の故郷が、上代日本語から全く推測できないという、異常としか言いようのない現象は、日本基語がよほど完成され、語彙も当時としてはそれほど借用しなくても済むほどに十分であったから、渡来人の言語を農耕技術関連語として以外必要としなかった、という理由しか説明が付かない。しかも、農耕技術関連語をセットとして持ち込んだ、渡来人の出自集団(おそらく長江下流域の民族集団)は、現在においては既に消滅してしまったらしい。

日本語成立の過程

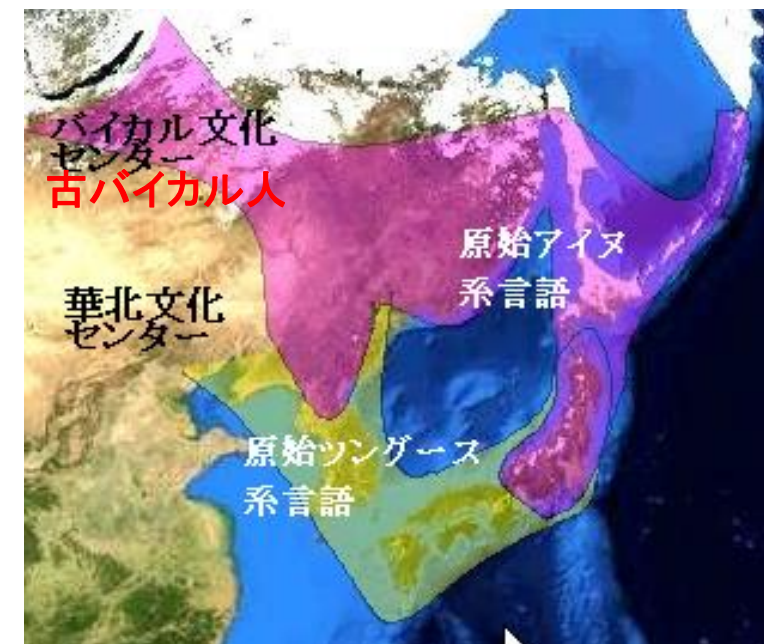
1) 華北文化センターからナイフ形石器文化を伴って、プリミティブな原始ツングース系言語が朝鮮半島や日本列島(津軽海峡まで)に展開した。13000~30000年前のことである。

(古華北人の侵入)

2) 12500~13000年前ごろ、荒屋型彫器を伴う、クサビ形細石器文化が、極東方面に怒濤のように押し寄せた。彼らは原始アイヌ系言語を使っていたらしい。(古バイカル人の侵入) 彼らは冷涼な気候を好み、日本列島ではあまり西日本地域と混交することはなかったのに対し、北部朝鮮では、ツングース系朝鮮語と混合したようである。安本美典の分析では、「アイヌ語と日本語より、アイヌ語と朝鮮語の方が近い関係にある」という。崎山は、アイヌ語とツングース語とは系統が異なるというが、文法的、音韻的特徴に大差はない。(華北とバイカルの両文化センターは、もともと親子関係にあったから言語的にも大差はなかったと思われる。)



(日本人の起源、伊藤)



(日本人の起源、伊藤)

日本語の起源

2

3) 6000年前、縄文前期のころ、同じツングース系の言語であった、古日本語と古朝鮮語は方言のレベルから別の言語に分裂したと、言語年代学から推測される。(南朝鮮が古日本語圏に入っていることに注目) 古日本語には、東アジアにおける位置的關係から、照葉樹林文化(雑穀)や古栽培民の文化(芋)、熱帯ジャポニカを含む文化などを持つ、様々な民族や集団が断続的に流入し、多くの南方系言語の語彙をもたらした。

4) 弥生時代、水田稲作農耕技術をもたらした渡来人は、予想以上に高度な日本基語を習得し、いわばその北部九州方言「倭人語」をもって勢力を拡大し、西日本一帯に遠賀川式文化圏を確立する。これにより倭人語は「日本祖語」といえる標準的存在となった。中部・関東地域でも農耕文化を受け入れた集団は、日本祖語を受け入れる。一方、旧東日本地区で、あくまで狩猟採集文化に拘った集団は、東北地方に後退し、独自の文化・東日本縄文文化を継承していく。

5) 邪馬台国からヤマト王権が成立する時代、南部九州にも新しい文化を拒否して、南西諸島にスピアウトした集団がいた。彼らが使っていた方言がより独立色を強め、琉球語(琉球方言)となった。一方、日本祖語は中国語から、文字という記録媒体を手に入れ、文化や思想語を大量に日本語の中に取り入れ奈良時代に「上代(上古)日本語」が成立した。

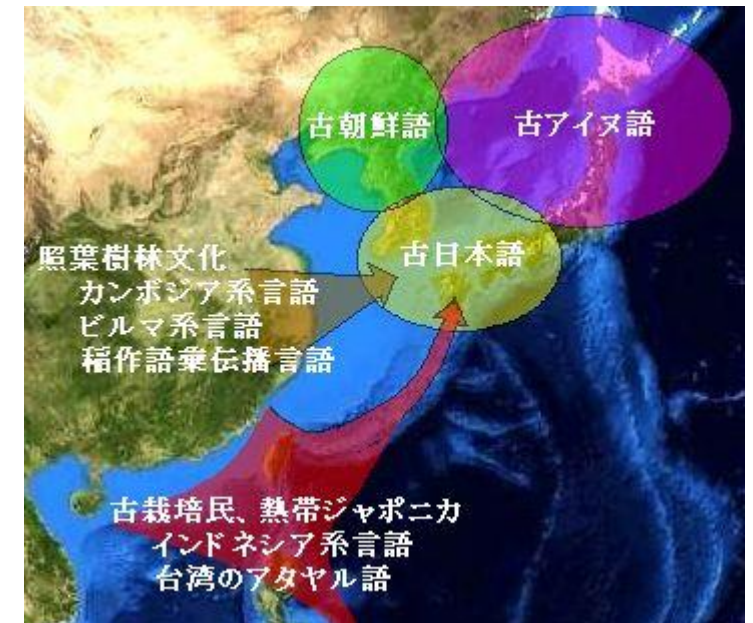
以上が、日本人の成立と日本語の成立との整合性を考えた筆者(伊藤)の日本語論である。

縄文時代後期にメソポタミアを追われたシュメール人が日本に到達し、古日本語にシュメール語を持ち込んだといわれる。また、天孫降臨の時代(紀元1世紀)に伽耶經由でインドからタミール語が持ち込まれたとの説もある。さらに、秦の始皇帝の労役から逃亡してきた秦人あるいは秦の滅亡によって亡民となった秦人に、馬韓はその東の地を割いて与え住ませ、秦韓と名づけたという。秦人は漢人以外の民族を総称することがあり、秦人にはユダヤ人やペルシャ人が含まれていた。この秦韓のユダヤ系の倭人(スサノオ、アメノヒボコや秦氏ら)が紀元前後から順次渡来し、倭語にユダヤ語の語彙が持ち込んだ形跡がある。

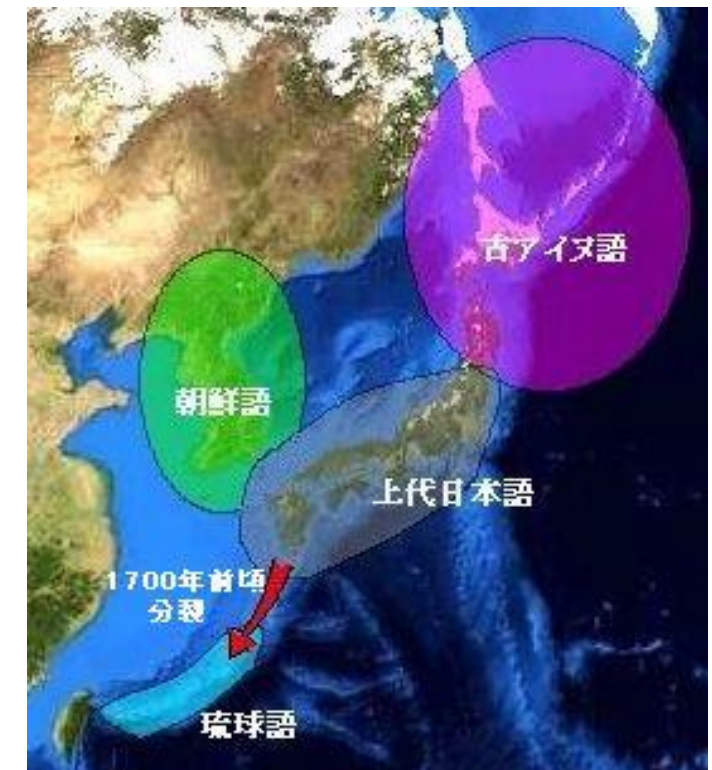
(日本人の起源、伊藤 + 藤田)

日本語諸語の中で西九州語の長崎語が日本語の古い言語体系を温存し、今も最古の上代日本語に見られる古い特徴を伝えている。西九州は言語的多様性が高く、日本語の揺籃の地とも考えられる。(DNAでたどる日本人10万年の旅、崎田満)

日本語、朝鮮語、古アイヌ語(所謂、蝦夷が使っていた言語、現在の北海道アイヌ語とは区別される)は、近い関係にある。これらの言語はアルタイ諸語からも区別される特異な言語群で、旧石器時代の古華北人の言語を基にした膠着語でSOVの語順である。また、朝鮮人はかつては半島北方や沿海州に住んでおり、縄文時代後期から華北人とともに南下し始めた、高句麗がこの朝鮮人の主体である。従って、半島の西側を華北人が半島の東側を朝鮮人が南下した。南朝鮮の西日本縄文人(倭人)が交雑したのは、この華北人と朝鮮人である。飛鳥時代に任那が滅び、多くの倭人が列島に帰来した。半島と列島が文化的に分断されてから、半島は高句麗の朝鮮語が優勢になり現在に至ったと考えている。(藤田)



(日本人の起源、伊藤)



(日本人の起源、伊藤)

日本人の成立モデル

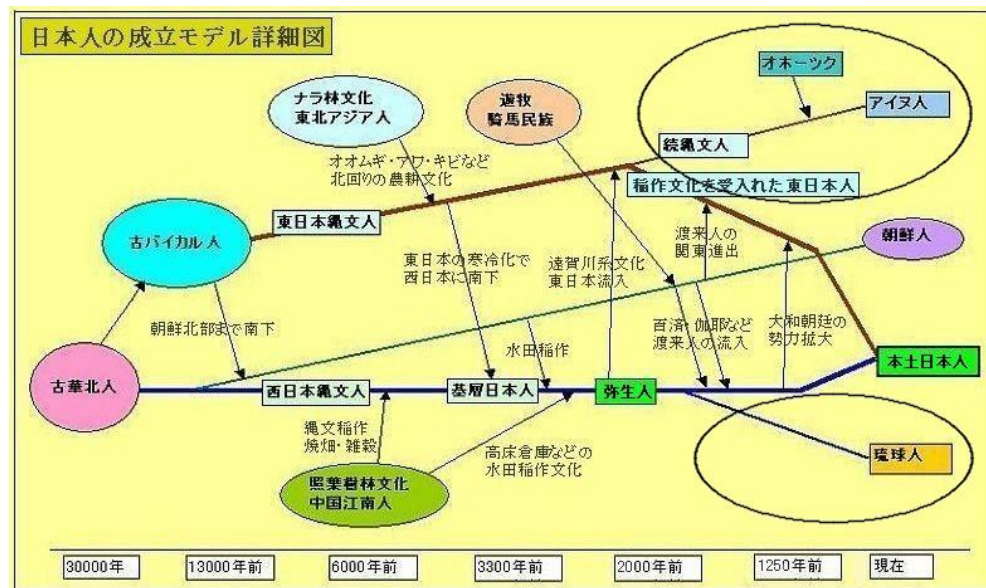


図1 (日本人の起源、伊藤)

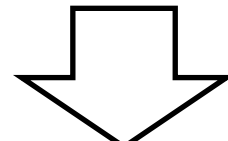
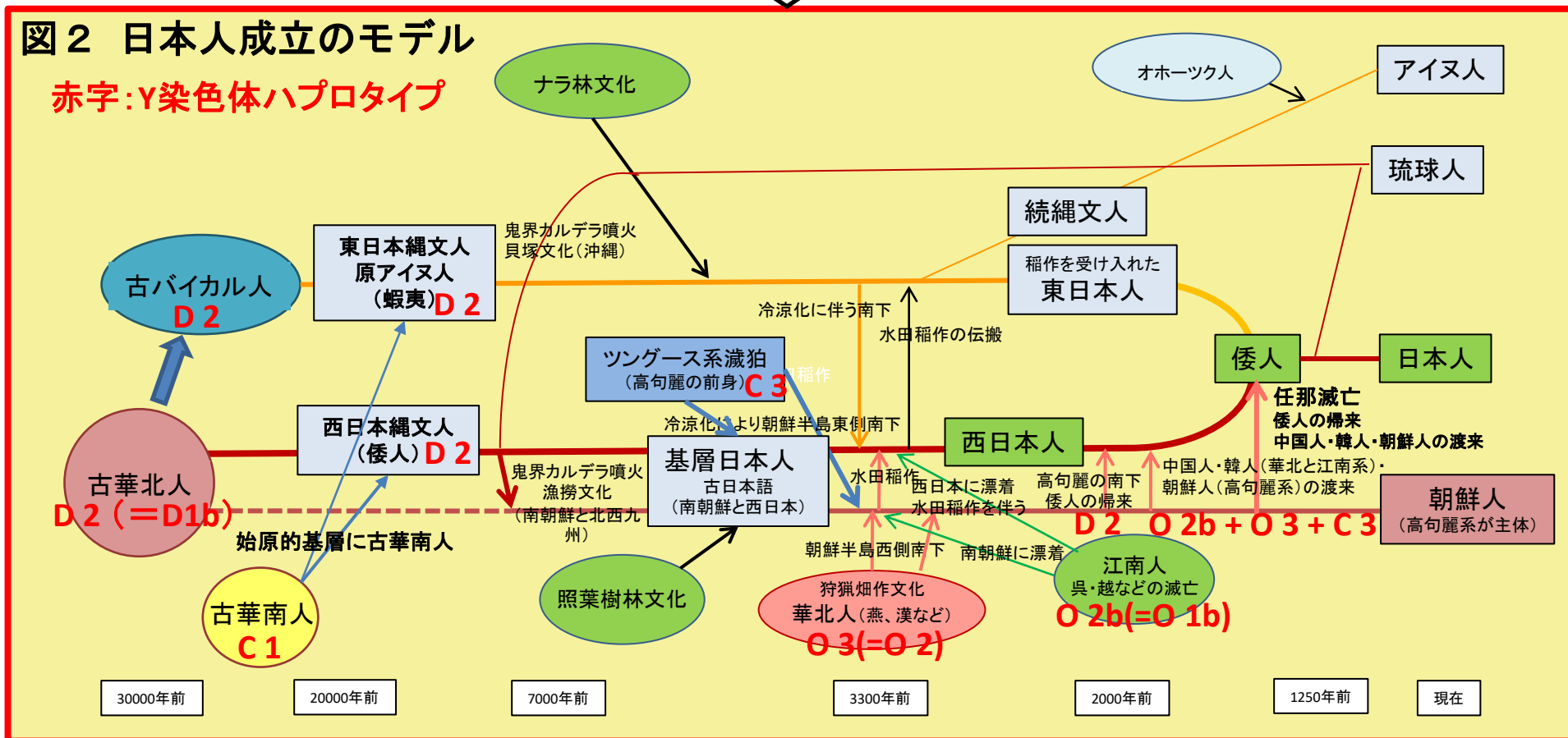


図2 日本人成立のモデル

赤字: Y染色体ハプロタイプ



Y染色体D型の列島への移動

Y染色体O型の列島への移動

図2 日本人成立のモデル 図1(日本人の起源、伊藤)を参考に大幅に改定した。旧石器時代3.5万年前、古湖南人が沖縄経由で太平洋岸を北上し、日本人の始原的基層となる。縄文時代草創期1.3万年前、古バイカル人が樺太経由で南下、北海道・東日本に侵入して、東日本縄文人(原アイヌ人、蝦夷)となった。一方、後期旧石器時代(2万年前がピーク)に古華北人が朝鮮半島経由で日本列島進出し西日本縄文人となったが、半島には殆ど留まらず、縄文時代前期まで半島はほぼ無人であった。新たに朝鮮半島に新石器人が進出したのは、縄文早期末の鬼界カルデラ噴火の避難民(西日本縄文人)の南朝鮮への進出に始まる。その後、縄文後・晩期の冷涼化により濊貊(高句麗の前身)が半島東岸を南下、華北の狩猟・畑作民族の南下に押され江南人が南朝鮮西部へ侵入、さらに華北人(燕・漢など)が半島西側を南下した。これらの民族移動により南朝鮮の倭人が圧迫され列島に帰来した。さらに南朝鮮に進出した中国人(および韓人(華北と江南系))と朝鮮人(高句麗系)の一部が列島に渡来した。さらに、任那、百済と高句麗の滅亡により、倭人が帰来し、中国人・漢人・朝鮮人が渡来した。琉球人は、7000年前頃沖縄に移住した鬼界カルデラ噴火の避難民(西日本縄文人)を先祖とする。さらに、南九州の倭人が弥生時代以降に琉球に移動することにより成立した。アイヌ人は、縄文時代草創期1.3万年前、樺太経由で南下、北海道・東日本に侵入した、古バイカル人(東日本縄文人(原アイヌ人、蝦夷))と平安・鎌倉時代に北海道に渡った北方のオホーツク人との混血である。この混血はは小規模なもので、現在のアイヌ人が北海道の原住民だとはとてもいえない。(藤田)